

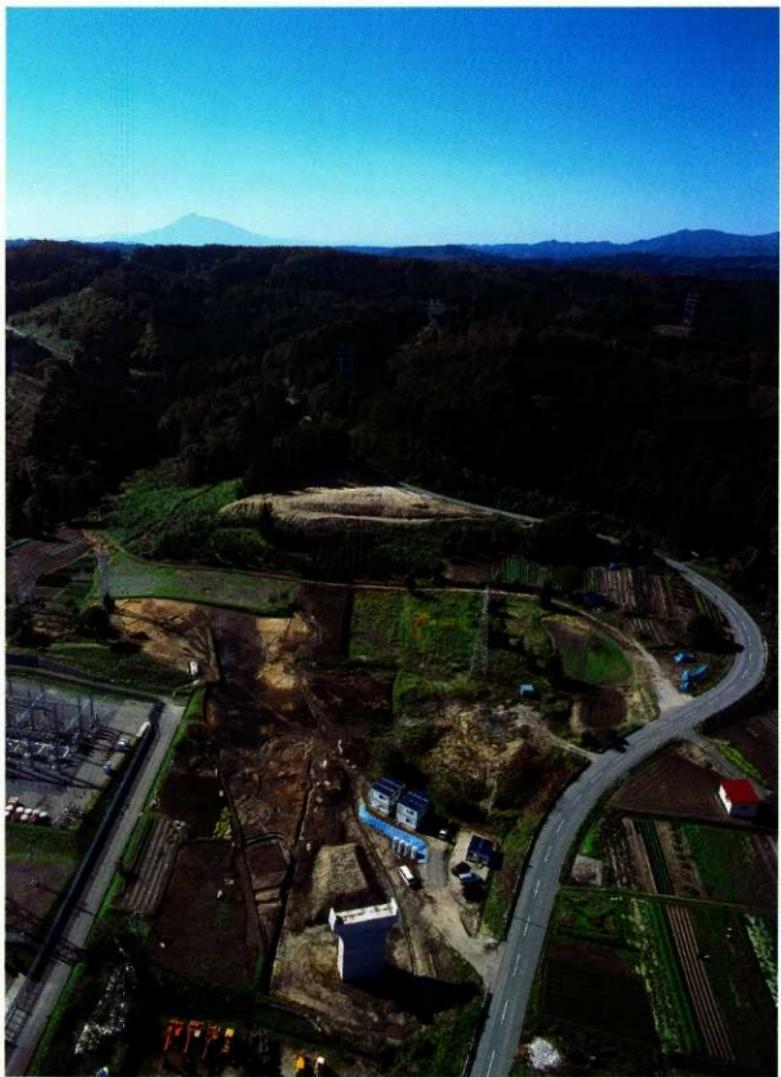
# 朝日山(2)遺跡

—県道青森浪岡線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会





調査区遠景（東から）



## 序

青森平野の周辺丘陵には、縄文時代から古代にかけて多くの遺跡が見つかっています。これまで調査が行われた遺跡では国特別史跡『三内丸山遺跡』や国史跡『小牧野遺跡』が特に知られています。

朝日山（2）遺跡もその一つで、県道青森浪岡線道路改良事業の実施に伴い、発掘調査が行われました。

本報告書は、平成10年度と平成11年度に行われた調査の結果をまとめたものです。

調査によって、平安時代の外周溝を伴う竪穴住居跡や井戸跡などが見つかっています。

この成果が今後の青森県の古代史研究、文化財の保護・活用に、いささかでも役立つことができれば幸いと存じます。

最後にこの調査の実施及び報告書の作成にあたり、関係機関並びに各位からの御指導、御協力を賜りまして厚くお礼を申しあげます。

平成13年3月

青森県埋蔵文化財調査センター  
所長 中島邦夫

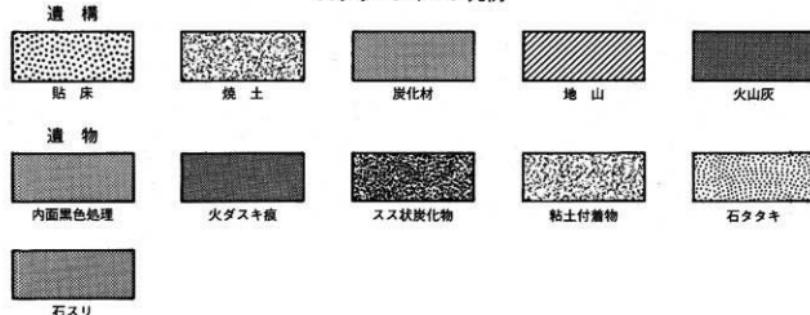


## 例　　言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成10年・平成11年度に発掘調査した県道青森浪岡線道路改良事業に伴う朝日山(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集作成した。なお、執筆者名は依頼原稿については文頭に、その他は文末に付した。
- 3 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 4 土層等の色調観察には1996版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖(小山正忠・竹原秀雄1996)」を使用した。
- 5 出土遺物の鑑定及び同定、分析については、次の方々に依頼した(順不同・敬称略)

石質の鑑定	青森県立八戸南高等学校教諭 佐々木 辰雄
火山灰の蛍光X線分析	奈良教育大学教授 三辻 利一
放射性炭素年代測定( $\beta$ 線計数法)	学習院大学教授 木 越 邦彦
放射性炭素年代測定(AMS法)	(株)地球科学研究所
- 6 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複製したものである。
- 7 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
- 8 調査における出土遺物・実測図・写真等は現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏から御教示、御指導を受けた。  
(アイウエオ順、敬称略)  
青森県立郷土館、青森市教育委員会  
伊藤武士、井上雅孝、内山隆志、宇部則保、上屋真一、遠藤正夫、小笠原雅之、小野貴之、小山彦逸、葛西勲、片山昭悟、北林八洲晴、木村淳一、工藤清泰、工藤大、日下和寿、児玉大成、小谷地肇、斎藤淳、柳原滋高、桜井清彦、桜田隆、佐野忠史、設楽政健、鈴木徹、瀬川滋、高橋潤、高橋学、田中寿明、永井治、長尾正義、成田和世、沼宮内陽一郎、羽柴直人、藤原弘明、古屋敷則雄、村木淳、村田晃一、八木光則、渡部学

スクリーントーン凡例



# 目 次

序

例 言

目 次

## 第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査の要項 .....	1
第3節 調査の方法 .....	3
第4節 調査の経過 .....	5

## 第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置 .....	6
第2節 遺跡の地形と地質 .....	7
遺構配置図 .....	11

## 第3章 古代の遺構と出土遺物

### 第1節 検出遺構と出土遺物

(平成10年度調査)

1 堅穴住居跡（含外周溝） .....	13
2 土坑（含井戸跡） .....	15
3 溝跡 .....	17
4 掘立柱建物跡 .....	19

(平成11年度調査)

1 堅穴住居跡（含外周溝） .....	29
2 土坑（含井戸跡） .....	53
3 溝跡 .....	65
4 掘立柱建物跡 .....	75
5 須恵器大甕埋設遺構 .....	76

### 第2節 遺構外出土遺物

1 土師器・須恵器 .....	77
2 石器 .....	82
3 その他の遺物 .....	84

## 第4章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定（ $\beta$ 線計数法） .....	86
第2節 放射性炭素年代測定（AMS法） .....	87
第3節 火山灰の螢光X線分析 .....	92

## 第5章まとめ

引用参考文献 .....	94
写真図版 .....	95
報告書抄録 .....	105

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経過

平成9年に県土木部道路建設課から県道青森浪岡線道路改良事業予定地内の遺跡について照会があつた。この予定地内には朝日山(2)遺跡と朝日山(3)遺跡がかかっているため同年9月現地踏査を行つた。道路予定地が朝日山(2)遺跡にかかる部分の現状は蔬菜畑と山林で、畠地部分から平安時代の土師器や須恵器の破片及び繩文土器が表面採集できた。朝日山(3)遺跡は、山林部分が道路予定地内となつており、遺物の表面採集は困難な現状である。しかし、この区域より南側の部分を平成7年度に当センターが発掘調査した結果多数の平安時代の堅穴住居跡が検出されている。以上の結果から朝日山(2)遺跡地内は全面発掘が調査が必要であり、朝日山(3)遺跡地内は試掘調査をして遺物・遺構の有無を確認して全面的に発掘調査するかどうかを決めることとした。

平成10年度には、県道に沿った場所を発掘調査し、平成11年度には、西側続く場所を発掘調査することになった。

(成田 賢治)

## 第2節 調査要項

(平成10年度)

### 1 調査目的

平成10年度県道青森浪岡線道路改良事業の実施に先立ち、青森市朝日山(2)遺跡の発掘調査を実施し、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間

平成10年9月16日から同年10月30日まで

### 3 遺跡名及び所在地

朝日山(2)遺跡（青森県遺跡番号01197）青森市大字高田字朝日山408、外

### 4 調査面積

1,500平方メートル

### 5 調査委託者

青森県土木部道路建設課

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関

青森市教育委員会

### 9 調査体制

調査指導員 市川金九 青森県考古学会会長（考古学）

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長  
調査員 一町田 工 青森市立大野小学校校長(考古学)  
タ 山口 義仲 青森県立板柳高等学校教諭(地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫  
次長・調査第一課長 成田誠治  
総括主幹・資料課長 成田滋彦  
総務課長 成田孝夫  
文化財保護主幹 櫻井有一  
文化財保護主幹 畠山昇  
調査補助員 長谷川 浩平・本荘瑞穂・藤谷麻美・佐藤淑  
(島山昇)

(平成11年度)

1 調査目的

県道青森浪岡線道路改良事業の実施に先立ち、青森市朝日山(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

平成11年8月3日から同年10月29日まで

3 遺跡名及び所在地

朝日山(2)遺跡(青森県遺跡番号01197) 青森市大字高田字朝日山411-1、外

4 調査面積

約2,700平方メートル

5 調査委託者

青森県土木部道路建設課

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

青森市教育委員会

9 調査参加者

調査指導員 市川金丸 青森県考古学会会長(考古学)  
調査協力員 池田敬 青森市教育委員会教育長  
調査員 藤沼邦彦 弘前大学人文学部教授(考古学)  
タ 島口天 青森県立郷土館研究員(地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫

次長・調査第一課長 成田 誠治  
 総務課長 成田 孝夫  
 文化財保護総括主査 中嶋 友文  
 文化財保護主事 竹内 誠司  
 調査補助員 斎藤 奈穂子・松原 朋子・木立 未来・今直子

(中嶋 友文)

### 第3節 調査の方法

(平成10年度)

北側の幅杭No.121とNo.122を結んだ線を基準として、4mごとに設定し、北から南にアルファベットを、東から西へ算用数字を付していった。グリッドの呼称は軸線の北東隅の交点を用いた。なお、南北方向の軸線は座標北から約27°西へずれている。今回の調査区域はおむね南北軸がC～K、東西軸が0～22で囲まれた区域のうち、K-4グリッドとD-23グリッドを結んだ線上の北側の範囲である。また、標高原点は調査区域外にある工事用の測量杭(T.3、33.627m)から調査区域内へレベル移動を行って設定した。

遺構の調査は二分法ないしは四分法で行った。遺構の実測は、縮尺1/20の造り方測量を基本としたが、溝跡の一部については、縮尺1/50の平板測量によって実測した遺構もある。

遺構番号は、遺構の種類に応じて確認した順に仮の表記と番号を付した。遺構の種類に応じた仮の表記は、竪穴住居跡；S I、掘立柱建物跡；S B、土坑；S K、井戸跡；S E、溝跡；S D等であるが、調査の進捗によって欠番が生じたものもある。

遺物の取り上げは遺構またはグリッドごと、層位ごとに括して取り上げたが、必要に応じて1/10及び1/20の縮尺で記録してから取り上げたものもある。

写真撮影は35mmの一眼レフカメラを用いて遺構の堆積状況、完掘状況、遺物の出土状況を中心に撮影し、その他必要に応じて基本土層や調査状況などについても記録した。フィルムはモノクロネガとカラーリバーサル及びカラーネガを使用した。また、必要に応じてインスタントカメラも使用した。

なお、整理作業時における住居跡の主軸方位は座標北を基準に計測したものである。また、床面積は住居跡下端のラインを対象に計測している。

(島山 昇)

(平成11年度)

調査区のグリッド設定にあたっては、昨年度と同様に4×4mのグリッドを設定して用いた。グリッドは東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを付し、その呼称は北東隅の杭番号を使用している。座標上の北は南北の基準線から27°東に傾いている。

標準原点は、近辺に設置された工事用原点(34.483m)からレベル移動を行い、調査区内に数カ所設置した。

遺構番号は、遺構の種類に応じて仮の表記と101番からの番号を付した。竪穴住居跡；S I、掘立柱建物跡；S B、土坑(含井戸跡・焼成遺構)；S K、溝跡；S D等であるが、精査の結果、遺構と判断できない風倒木跡などの落ち込みは、精査から除外し欠番とした。

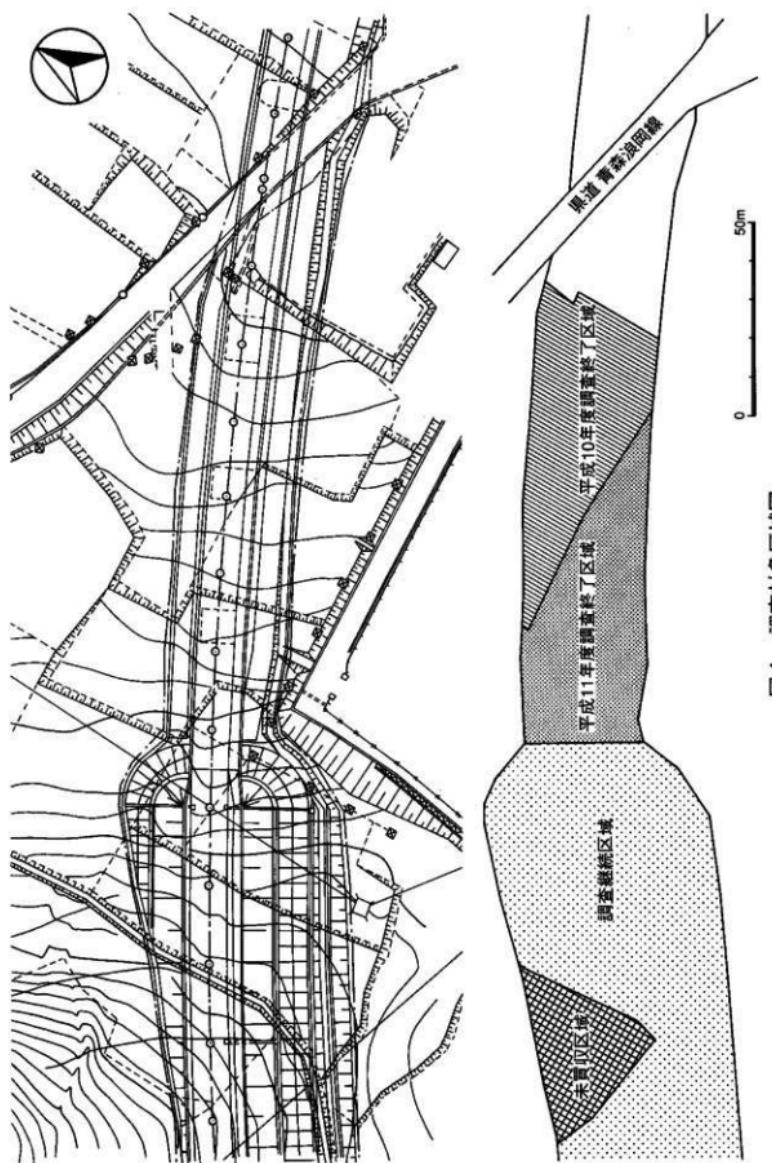


図1 調査対象区域図

遺構の精査は、原則として住居跡は四分法で、その他は二分法で行うこととしたが、遺構によっては、必要に応じて適宜セクションベルトを設けた。

実測は、簡易造り方測量を用い、縮尺は20分の1を原則としたが、必要に応じて10分の1で作図した。土層の注記は、「標準土色帖」を基準とした。

写真の撮影にあたっては、35mmのモノクローム・カラーリバーサルの各フィルムを併用し、カラープリントやインスタントカメラも必要に応じて使用した。

(中嶋 友文)

## 第4節 調査の経過

(平成10年度)

9月16日、器材運搬の予定であったが、台風が北上してきたため、翌日に延ばす。

9月17日、調査器材運搬後、環境整備と草刈りに入る。その後、グリッド杭の設定と粗掘りに入る。

9月21日から9月23日、センターの移転業務のため現場作業が中止。

10月上旬、粗掘りと遺構確認が主体の作業が続く。検出した遺構の調査に入る。

10月中旬、遺構の調査が、本格的になる。

10月29日、30日、調査区域内の埋め戻しをし、器材をセンターへ撤収。予定の調査を終える。

(島山 异)

(平成11年度)

8月3日、発掘調査機材を運搬し周辺の整備を行い、午後から調査区内の草刈を開始した。また、グリッド杭の設定、ベンチ・マークの移動も並行して行った。

8月4日から、粗掘り作業を開始し、遺構・遺物の確認ならびに精査を行う。

8月24日・25日、トレンチ掘りの結果、表土が厚く堆積した区域が確認されたため、重機による表土処理を行った。

9月1日、昨日からの豪雨により調査区が水没したため、排水路を敷設する。

9月2日、原因者より引き渡された東側区域の粗掘りを行った。

9月21日、重機を使用して買収が終了し引き渡された西側区域の表土処理を行った。

9月28日、西側地区の遺構確認の結果、予想以上の遺構が検出された。

10月5日、9月上旬から雨天の日が多く精査作業が遅れているため、作業員の追加雇用を行う。

10月26日、工事優先区域の調査終了に伴い、調査区の空中写真を、ラジコンヘリにより撮影した。

10月29日、調査器材等を越冬プレハブに搬入し、今年度の発掘調査を終了した。

(中嶋 友文)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

青森市の地形は、北側に陸奥湾に面した平野部と、それを囲むように位置する東・西・南側の丘陵地帯からなっている。特に南方には八甲田連峰がそびえ、その裾野付近からは、青森平野に向かっていくつもの細長い低丘陵が突き出ている。

朝日山(2)遺跡は、市街地から南西におよそ14km離れた低い段丘上に位置している。遺跡周辺の地形は、なだらかな斜面で、遺跡が所在する丘陵は畑地や山林が広がっている。標高は、およそ30~40mである。



図2 遺跡位置図

## 第2節 遺跡の地形と地質

青森県立郷土館 島 口 天

### 1. 地形

朝日山（2）遺跡は、青森市西部丘陵地の東縁部に位置する。この丘陵地は、東側を海岸平野である青森平野と南北性の直線的な急崖で接している。本遺跡は、100/1000以下の勾配で東へ傾斜する斜面上にあり、標高は30~40mである。この斜面の東端は、県道27号線を挟んで比高約4mの急崖となり、青森平野に接する。この斜面は遺跡の北側に連続するが、南側は東北電力青森制御所を挟んでしだいに幅が狭くなる。また、この斜面西側には、標高104mの小丘に向かって約200/1000の勾配の東傾斜の斜面が連続している。遺跡の南側には、栄山（標高144.1m）の南側から北東方向へ流れで遺跡付近で東へ向きを変えた小谷がある。

水野・堀田（1982）は、この丘陵地の標高が100~200m、比較的緩傾斜であるが開析は進んでいるとし、その地形分類図の中で遺跡の位置する場所を台地のGtⅡ面（中位面）としている。また、中川（1972）は、青森平野周辺部には小規模かつ局所的に段丘が分布し、高位段丘の豆ノ坂段丘、中位段丘の浪館段丘（段丘面は標高20m以下）、諸河川流域にわずかに見られる低位段丘の3段が認められると述べている。山口（1993）は、本遺跡が中位段丘相当面（標高30~40m）上に位置し、遺跡周辺に分布する中位段丘相当面は、浪館一三内一石江付近に分布する同段丘面よりも約10mも標高が高く、東西幅が100~200mと小規模であって、東方に向かってやや急傾斜しているとしている。

### 2. 地質

青森平野は、表層部が沖積層からなる海岸平野で、その地下には海成堆積物からなる更新統の岡町層（加藤ほか、1958）と、八甲田火山群の噴出物である八甲田凝灰岩（根本・山口、1998b）が指交関係をもって厚く堆積している。これら更新統の層厚は、東から西に向かって次第に増し、青森平野の西端を規制して南北に延びる入内断層付近では、平野北部で1000mに達すると推定される。この入内断層は、堤川の支流入内川に沿って南北に延びる東落の断層で、第三系および岡町層を切る比較的新しい断層である。入内断層西側では、岡町層の下位層である大沢遡層（今泉、1949）が厚く（800m前後）発達しており、西に向かって次第に薄くなる〔岩井（1984）に加筆〕。

西部丘陵地は、表層部に八甲田凝灰岩、軽石流堆積物および降下火山灰が薄く発達しているが、その下位には鶴ヶ坂層（飯塚、1930）、大沢遡層が厚く発達し、南部には中新統の泥岩類が厚く分布している〔岩井（1984）に加筆〕。

鶴ヶ坂層は、青森市鶴ヶ坂付近の新城川流域を模式地とし、層厚は100mであるが模式地を離れると急激に薄くなる。主として塊状で灰~灰白色を呈するデイサイト質軽石凝灰岩よりなり、一部では凝灰角礫岩となっている。軽石片は円磨度が高く纖維状組織が明瞭で、その長径は5~30cmであるが、最大で50cmにおよぶ。長径数cmのデイサイト~安山岩質の火山礫が普遍的に含まれる。両錐型石英粒とともに重鉱物として紫蘇輝石および普通輝石が多く含まれ、黒雲母はほとんど認められない。下位の大沢遡層とは不整合の関係にある（根本・山口、1998b）。

八甲田凝灰岩は、八甲田火山群および十和田火山の裾野に広く分布する。青森平野西縁や黒石東方

の地域では、塊状で暗灰～灰色を呈する非溶結の軽石凝灰岩よりもなるが、その他の地域では溶結凝灰岩となる。両雑型石英を多量に含み、斜長石・磁鉄鉱・普通輝石・紫蘇輝石のほかに少量の角閃石を含む。八甲田山北麓には本凝灰岩の作る広大な緩斜面が発達し、その北縁は北西方で青森平野下に埋没する（根本・山口, 1998b）。

鶴ヶ坂層と八甲田凝灰岩は、八甲田火山群に由来する火碎流堆積物で、村岡・高倉（1988）はそのK-Ar年代をそれぞれ 0.65 Ma および 0.40 Ma としている（箕浦ほか, 1998）。

岡町層は、青森市岡町西方を模式地とし、層厚は約 100m であるが地域的な変化が著しい。主に級化層理の発達した細円錐や砂あるいは粘土から成り、青灰色のシルト・ラミナの発達した中粒砂・重炭等を挟む。砂層は礫を含んでクロスラミナが発達する場合がある。大軒廻層を不整合に覆い、鶴ヶ坂層には軽微な不整合をもって重なるが、鶴ヶ坂層との構造差はほとんどない（根本・山口, 1998a）。

豆ノ坂段丘は、青森市堤川支流の入内川西方にある豆ノ坂付近の丘陵側壁・同市細越西方の丘陵頂の外側・同市三内塗園・同市県立競技場の南西方に小規模に分布し、中～巨礫より成る厚い礫層を伴う。段丘面の標高は 20～50 m である（根本・山口, 1998a）。

浪館段丘は、青森市西部の浪館、同市三内付近から同市野木和および同市大堤付近にかけて発達する。また、新城川流域の同市白旗野付近のほか、西部丘陵地の谷壁や荒川流域の同市小館付近にも分布する。段丘面の標高は 15～20 m で、ある程度開析されているが起伏は小さい。構成層は礫および軽石を多く含む砂層で、これにはクロスラミナが発達する。上位の砂質火山灰に漸移し、これは火山灰により被覆される（根本・山口, 1998a）。

次に、本遺跡の基本層序について記述する。

#### I 層 暗褐色土層 (10YR4/4 厚さ10～30cm)

耕作土。縮まりがなく、崩れやすい。耕作により削平および搅乱を受けており、下位層の粒子の混入が多い。

#### II 層 暗褐色土層 (10YR3/3 厚さ10cm以下)

耕作土。やや縮まりがあり、ローム粒を含む。

#### III 層 黒褐色土層 (10YR2/3 厚さ5～30cm)

粘性・湿性があり、やや縮まる。

#### IVa 層 黑褐色土層 (10YR3/2 厚さ10cm以下)

粘性・湿性があり、縮まる。斜面下側に向かって層厚を増し、ローム粒目立つ。

#### IVb 層 黑褐色土層 (10YR2/3 厚さ10cm以下)

粘性・湿性があり、斜面下側にのみ薄く見られる。

#### V 層 暗褐色土層 (10YR3/4 厚さ10～25cm)

焼土粒・炭化物を含み、VI層との境に黄灰白色火山灰層 (B-Tm) がブロック状に混入する。

#### VI 層 黑褐色土層 (10YR2/3 厚さ10～20cm)

平安時代の包含層。焼土粒・炭化物を含む。

#### VII 層 黑色土層 (10YR2/1 厚さ10cm以下)

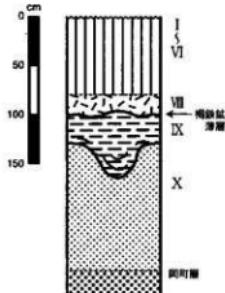


図1 柱状図

粘性・湿性があり、腐植質である。Ⅶ層とは漸移関係である。

#### VII層 黄褐色軽石質火山灰層 (10YR5/6 厚さ20~30cm)

層厚15~20cm。粘性が高く、軽石粒を含み、やや砂質で細礫が混入する。弘前大学理工学部において本層に含まれる火山ガラスの化学組成分析を行った結果、十和田一八戸テフラ (To-H : Machida, 1999; 青木・新井, 2000) に同定された。層内にできた隙間から水が湧き出ることが多く、井戸のほとんどがこの層から水の供給を受けているようである。

遺跡地内で確認できた層序は以上であるが、重機で削られてできた遺跡東端の小露頭では、以下に示すこれらの下位の地層が観察できた。

#### IX層 灰色砂質粘土層 (7.5YR6/1)

層厚 25~30 cm。粘性が高く締まりがあるが、両錐型石英が多い中粒サイズ以下の砂粒を含み、細礫が散在するが特に下部に目立つ。Ⅶ層との境に薄い褐鉄鉱層が発達し、地形面に沿って緩くうねりながら東に向かって傾斜する。

#### X層 にぶい黄橙色粘土質砂層 (10YR6/4)

層厚約 130 cm。やや粘性があり、粗粒サイズ以下の両錐型石英が多い砂粒や細礫を含み、それらがレンズ状の薄い層を成している部分もある。また、東に向かって傾斜するように見えるラミナや、IX層によって掘り込まれたような地質構造が見られる。このような構造は、水流の影響があったことを示すと考えられる。さらに層内には、鉄分が沈積したと考えられるクラックや斑紋が見られる。

さらに下位には、岡町層と考えられる青灰色砂と同色シルトの互層が厚く発達する。

地形および地質から、本遺跡の位置する丘陵地東端は岡町層を基盤とし、その上に形成された海成段丘面を崖錐性と考えられる堆積物 (IX・X層) が覆い、さらにその上位に火山灰層 (VII層) が重なっていると推定される。IX・X層は両錐型石英を多く含むことから、八甲田凝灰岩を起源にしていると考えられ、水流の影響があったことを示す複雑な堆積構造を持つことから崖錐性堆積物と判断した。海成段丘面は、北側からの連続性や標高から中位段丘面である可能性が高く、段丘面形成後は常に崖錐性堆積物の供給を受けて傾斜地となったことが考えられる。VII層より上位は黒色を呈するが、佐瀬 (1994) は、黒ボク土はローム化火山灰を母材として黒色の腐植が著しく集積した土壤であると述べ、その生成には草原植生が深く関わっており、土色、腐植の性質の違いは植生履歴の違いに起因している。のことから、I~VII層の黒ボク土の土色の違いの原因として植生の変化が考えられる。しかし、本遺跡における黒ボク土の層厚が他地域に比べて厚いことから、黒ボク土形成過程においても崖錐性堆積物や火山灰などの供給を受け続け、その供給量の違いが土色の違いに関係していることも考えられる。

#### 《引用文献》

- 青木かおり・新井房夫 (2000) 三陸沖海底コア KH94-3, LM-8の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究, 39 : 107-120
- 飯塚保五郎 (1930) 青森油田の地質に就いて. 地質学雑誌, 38 : 727-732
- 今泉力蔵 (1949) 弘前盆地東縁の地質. 地質学雑誌, 55 : 182

- 岩井武彦（1984）青森地区周辺地域の温泉調査報告書、青森県環境保健部、1-52
- 加藤磐雄・田口一雄・齊藤俊明（1958）青森県油田調査報告書—青森市西部地区の地質—、青森県商工課、青森、6-20
- Machida, H (1999) Quaternary Widespread Tephra Catalog in and around Japan : Recent Progress. *The Quat. Res.*, 38 : 194-201
- 箕浦幸治・柴正敏・根本直樹（1998）IV地質年代と層序対比及び古地理の復元 1 地質年代と地層の対比放射年代、青森県の地質、青森県、111-113
- 水野裕・福田報誠（1982）I 地形分類図、土地分類基本調査 青森西部、青森県、11-15
- 村岡洋文・高倉伸一（1988）10万分の1八甲田地熱地域地質説明書、特殊地質図、地質調査所、つくば、27
- 中川久夫（1972）第二部 青森県の第四系、青森県の地質、青森県、71-120
- 根本直樹・山口義伸（1998a）II 地質各論 1 津軽地域 第四系、青森県の地質、青森県、44-59
- 根本直樹・山口義伸（1998b）II 地質各論 3 三八上北地域 第四系、青森県の地質、青森県、87-97
- 佐瀬 隆（1994）12章 3 黒ボク土と人為、新版地学教育講座 9 地表環境の地学—地形と土壤、地学団体研究会編、東海大学出版会、185-187
- 山口義伸（1993）第Ⅲ章 遺跡の環境 第1節 遺跡周辺の地形及び地質について、青森県埋蔵文化財調査報告書 第152集 朝日山遺跡Ⅱ、青森県教育委員会、11-18

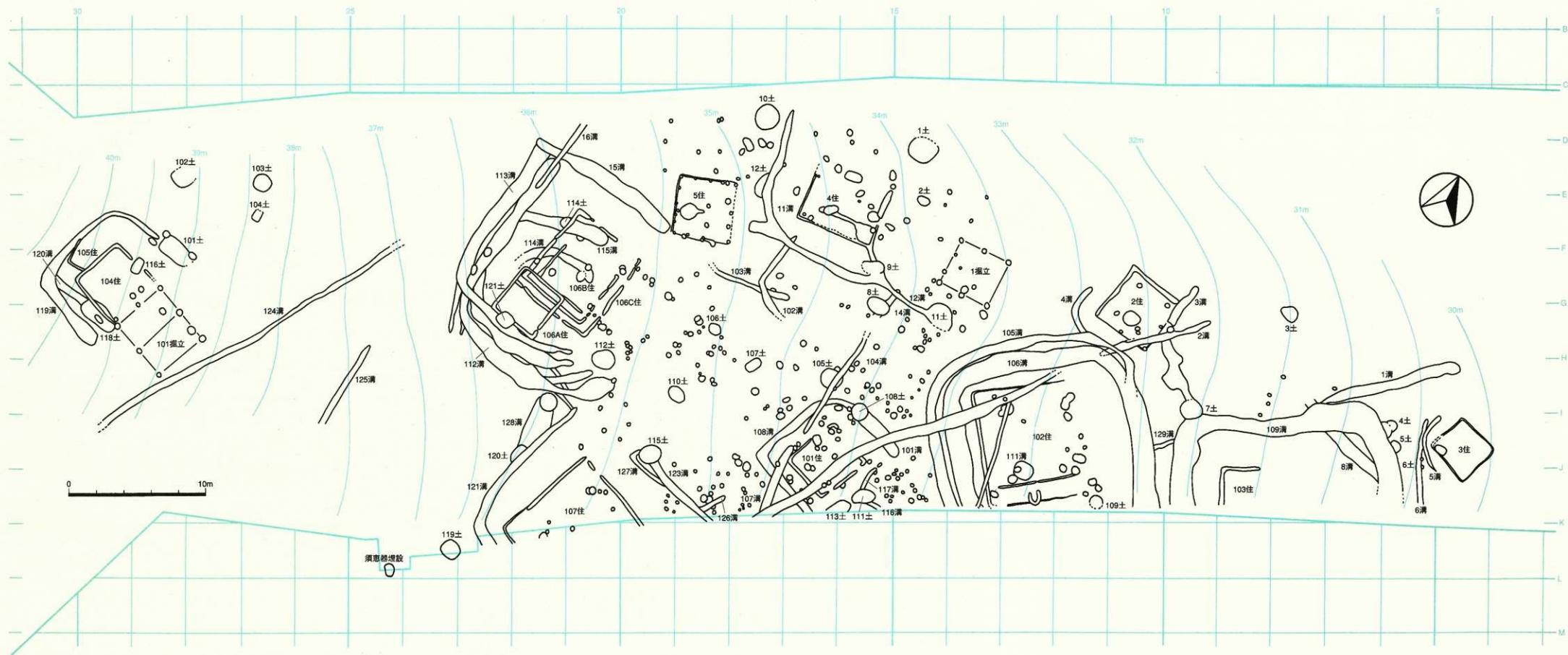


図3 遺構配置図

## 第3章 古代の遺構と出土遺物

### 第1節 検出遺構と出土遺物

(平成10年度の調査)

#### 1 壺穴住居跡（含外周溝）

##### 第1号壺穴住居跡

擾乱であったため欠番。

##### 第2号壺穴住居跡（図4）

[位置] E・F-9・10グリッドに位置している。外周溝（第4号溝跡）を伴う住居である。

[重複] 壺穴住居部分は第2号溝跡、第3号溝跡と重複し、これらの溝跡よりも古い。また、外周溝は第105号溝跡、第106号溝跡と重複しているが、これらよりも古い。

[平面形・規模] 上部が削平されているが、内周溝から東西4.50m、南北4.35mのほぼ方形を呈している。床面積は19.80m<sup>2</sup>で、主軸方位はN-100°-Eである。

[壁・床面] 壁は確認できなかった。床面は南側の部分が確認できた。貼り床が施されている。

[内周溝] 東側と南側半分を除いて確認できた。幅15~30cm、深さ10~15cmである。

[ピット] 住居内から6個、内周溝から9個検出した。ピット4がやや西側へ位置する点がやや疑問であるものの、ピット1~4が主柱穴と思われる。また、内周溝内のピットは四隅と各壁辺の中間に位置しており、補助柱穴である可能性が高い。住居内の中央からやや南壁寄りに検出したピット5は短軸55cm、長軸60cmの円形の床下土坑で、深さ22cmである。

[カマド] 東壁の中央からやや北よりのところに火床面と考えられる焼土を、壁辺から約40cm離れた場所には煙出孔と考えられる焼土を伴うピットを検出した。ここにカマドが存在していたものと考えられる。

[堆積土] ほとんど確認できなかった。南壁よりの中央付近では第3層（ピット5の堆積土でもある）の上部に黒色土の薄い層が確認され、床の一部分であった可能性がある。

[外周溝] 住居外の南西側で本住居跡を囲むように第4号溝跡を検出した。住居跡から1m20cmほど離れている。溝の幅約40~50cm、深さ5~15cmで東側がやや深く掘り込まれており、底面は西から東へと低くなっている。検出部分の長さは約3m70cmで、東側で第105号溝跡、第106号溝跡により壊されている。

[出土遺物] 南側の床面から少量の土器の破片が出土した。

##### 第3号壺穴住居跡（図5）

[位置] I-4グリッドに位置している。外周溝（第5号溝跡）を伴う住居である。

[重複] 本住居に伴う外周溝が第6号溝跡と重複し、これよりも新しい。

[平面形・規模] 東西3.45m、南北3.36mのほぼ方形を呈している。床面積は10.66m<sup>2</sup>で、主軸方位はN-109°-Eである。

[壁・床面] 壁高は南・西壁が10cm前後、東・北壁は2~6cm前後である。床面はほぼ平坦で、堅緻で

あるが、東側がやや低い。

[内周溝]検出されなかった。

[ピット]住居内から1個検出した。北側を搅乱によって破壊されているが、短軸約70cm、長軸約90cmの楕円形の土坑で、深さ14cmである。柱穴は検出されなかった。

[カマド]北東隅近くに円形の火床面と考えられる焼土面を検出した。煙道部は検出できなかったが、東壁のやや北よりで、壁辺の約三分の一ほどのところにつくられていたものと考えられる。

[堆積土]5層に分層できたが、ほとんどがローム粒や焼土粒を含んだ黒褐色土で覆われている。

[外周溝]本住居の南西隅の部分を囲むように第5号溝跡を検出した。幅16~25cmの狭い溝で、深さ6~22cm、検出した溝の長さは4m80cmである。住居からの距離は南西隅の部分で35cmと最も接近しているが、他では80cmから1mほど離れている。

[出土遺物]カマドの南側の付近から少量の土師器や須恵器(甌)の破片、敲石が出土した。

#### 第4号竪穴住居跡(図6・7)

[位置]D・E-15・16グリッドに位置している。外周溝(第11号溝跡)を伴う住居である。

[重複]外周溝は第12号土坑、第12号溝跡、第13号溝跡と重複している。第12号土坑よりも新しいが、他の遺構との新旧関係は不明である。

[平面形・規模]北側の部分が確認できなかったが、南壁は6.00mである。方形の住居跡とすると、床面積は36m<sup>2</sup>前後と推定される。主軸方位はN-87°-Eである。

[壁・床面]削平が激しいため、南側の部分しか確認できなかった。この部分の壁高は2~5cmで、床面は堅緻である。

[内周溝]南側の部分しか確認できなかった。幅10~15cm、深さ10~20cmである。

[ピット]住居跡内外から若干のピットを検出したが、ピット1~4が主柱穴と思われる。また、ピット5は短軸60cm、長軸1m23cmの長方形の浅い土坑である。確認面からの深さは5cmであるが、削平された部分を勘案すると、30cmほどの深さになる。

[カマド]遺存状況は悪いが、東壁辺のやや南寄りのところに火床面を、また壁外へ1mほど離れたところに煙出孔の底部が検出された。

[堆積土]確認できなかった。

[外周溝]住居跡西側のC-16グリッドから南側のF-15グリッドにかけて、住居跡を囲むように第11号溝跡を検出した。住居跡から約2~2.5m離れており、南東端では第12号溝跡と繋がっている。溝の幅50cm前後、深さ20~25cm、検出した長さは17m80cmである。溝底面は第12号土坑の南側の辺りを境として、北側と南西方向へ低くなっている。また、第12号溝跡は住居跡南東隅の内周溝からはじまり、南東端の第11号土坑へとつながっている。第11号溝跡と第12号溝跡との新旧関係は不明であるが、同時存在の可能性も考えられる。

[出土遺物]南東隅の床面及び掘り方から少量の土師器の破片と自然礫、敲石が出土した。また、外周溝からは、少量の土師器の破片と口縁部を欠損した須恵器の壺が出土した。

**第5号竪穴住居跡（図8・9）**

[位置] D・E-17・18グリッドに位置している。火災により焼失した住居跡である。

[重複]なし。

[平面形・規模] 東西約4m40cm、南北約4m35cmのほぼ方形を呈している。床面積は18.45m<sup>2</sup>で、主軸方位はN-70°-Eである。

[壁・床面] 壁高は、南壁と西壁が20cm前後、北壁4cm前後である。東壁は検出できなかった。また、確認できた床面はおおむね堅緻であるが、不整形に焼けた部分が数カ所見られた。

[内周溝] 検出されなかった。

[ピット] 住居内から22個のピットを検出した。このうち、壁際に検出したピットは壁柱穴と思われ、おおむね1m間隔で並んでいる。また、中央西よりのところに検出したピットは径1m20cmのほぼ円形の土坑で、東側には幅20cm、長さ60cm、深さ4cmほどの溝状に掘り込まれた部分が付随している。

[カマド] 東壁の北側寄りの場所に火床面を検出した。カマド本体及び煙道部は検出できなかった。

[堆積土] 4層に分層できた。上部に白頭山火山灰の堆積が見られた。

[出土遺物] 土師器や須恵器（壺）の破片のほか、砥石、円礫、角礫が出土した。また、1層から縄文時代の石鏃1点が出土した。なお、床面から炭化材が出土したが、住居の構造を推定できる状況にはなかった。

**2 土坑（含井戸跡）****第1号土坑（図10）**

[位置] C・D-14グリッドに位置している。

[形態・規模] 短軸1.83m、長軸2.24mの楕円形を呈し、深さ70cmである。壁の一部に袋状に掘り込まれている部分がある。また、東壁よりの底面は10cmほど深く掘り込まれている。

[堆積土] 12層に分層できた。人為堆積で、上部と下部に焼土ブロックも見られた。

[出土遺物] 覆土から、やや多量の土師器の破片が出土した。

**第2号土坑（図10）**

[位置] D・E-14グリッドに位置している。

[形態・規模] 短軸58cm、長軸92cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。

[堆積土] 締まりの強い暗褐色土が見られた。

[出土遺物] なし。

**第3号土坑（図10）**

[位置] G-7グリッドに位置している。

[形態・規模] 短軸92cm、長軸1.26cmの不整楕円形を呈し、深さ16cmである。

[堆積土] 5層に分層できた。大半が暗褐色土と黒褐色土であり、最下部に黄褐色土が見られた。

[出土遺物] なし。

#### 第4号土坑（図10）

[位置] I - 5 グリッドに位置している。第5号土坑と重複し、これよりも古い。

[形態・規模] 直径87cm前後の円形を呈すると思われる。深さ17cmである。

[堆積土] 2層に分層できたが、ほとんど暗褐色土で占められている。

[出土遺物] 覆土から、土師器の破片17点と須恵器（甕）の破片1点が出土した。

#### 第5号土坑（図10）

[位置] I - 5 グリッドに位置している。第4号土坑よりも新しく、第109号溝跡よりも古い。

[形態・規模] 第109号溝跡に破壊されて全体の形状は不明であるが、確認した部分から推定して、短軸90cm前後、長軸110cmの楕円形を呈すると思われる。深さ32cmである。

[堆積土] 6層に分層できた。底部付近に焼土の堆積が見られた。

[出土遺物] 須恵器（甕）の破片が1点出土した。

#### 第6号土坑（図10）

[位置] I - 5 グリッドに位置している。第109号溝跡と重複し、これよりも古い。

[形態・規模] 第109号溝跡に破壊されてはいるが、直径90cmほどの円形を呈する。深さ26cmである。

[堆積土] 暗褐色土のみを確認した。

[出土遺物] なし。

#### 第7号土坑（図10）

[位置] H - 9 グリッドに位置している。第3号溝跡と第109号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

[形態・規模] 短軸1m36cm、長軸1m50cmの隅丸方形を呈し、深さ40cmである。

[堆積土] 確認していない。

[出土遺物] なし。

#### 第8号土坑（図10）

[位置] H - 15 グリッドに位置している。第14号溝跡と重複し、これより古い。

[形態・規模] 短軸1m13cm、長軸1m65cmの楕円形を呈し、深さ35cmである。

[堆積土] 黒褐色土のみを確認した。

[出土遺物] 覆土から、土師器の破片1点と拳大の礫が出土した。

#### 第9号土坑（図10）

[位置] F - 15 グリッドに位置している。第12号溝跡と重複し、これよりも新しい。

[形態・規模] 短軸1m、長軸1m40cmの楕円形を呈すると思われる。西壁は袋状に掘り込まれており、深さ36cmである。

[堆積土] 5層に分層された。暗褐色土、黒褐色土が主体である。

[出土遺物] 覆土から、土師器の破片が2点出土した。

#### 第10号土坑（図11）

[位置] C-17グリッドに位置している。井戸跡である。

[形態・規模] 確認面では長軸1.7m、短軸1.62mのほぼ円形を呈する。深さは2.22mで、底部に近づくにつれて狭くなる。底面は短軸37cm、長軸48cmの楕円形を呈し、やや北側に寄っている。そのため、北壁は急な立ち上がりであるが、南側はそれよりも幾分緩やかに立ち上がっている。

[堆積土] 1.5mの深さまでしか確認することができなかったが、ここまでには13層に分層できた。1層上部に白頭山火山灰が堆積している。

[出土遺物] 覆土中から炭化した箆状木製品と、底面直上から礫2個が出土した。

#### 第11号土坑（図11）

[位置] G・H-13・14グリッドに位置している。第12号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

[形態・規模] 短軸1m64cm、長軸2m18cmの不整楕円形を呈し、深さ15cmである。

[堆積土] 2層に分層できたが、黒色土が主体である。

[出土遺物] 覆土から、土師器の破片が2点出土した。

#### 第12号土坑（図11）

[位置] D-1・7グリッドに位置している。第11号溝跡と重複し、これよりも古い。

[形態・規模] 短軸1m15cm、長軸1m70cm前後の不整楕円形を呈し、深さ24cmである。

[堆積土] 暗褐色土と黒褐色土が主体である。第3層には、川砂を多少含んでいる。

[出土遺物] 覆土から、拳大の礫と焼礫が出土した。

### 3 溝跡

#### 第1号溝跡（図12）

[位置] H-4グリッドからH-6グリッドかけて位置している。西端で第109号溝跡及び第8号溝跡と近接している。新旧関係は不明であるが、おそらく重複している可能性がある。

[形態・規模] 北東から南西にかけてほぼ直線状に延びている。幅70~80cm、深さ30~35cmで、長さ10m60cmほどを検出した。

[堆積土] 7層に分層できたが、大半は第2層の暗褐色土と第5層の黒褐色土である。

[出土遺物] なし。

#### 第2号溝跡（図12）

[位置] G-9グリッドからH-10グリッドかけて位置している。第3号、9号、10号溝跡と重複している。新旧関係は第3号溝跡よりも新しく、第9号、10号溝跡よりも古い。

[形態・規模] 北東から南西にかけて直線状に延びている。幅50~60cm、深さ20cmで、6m50cmほど検

出した。

[堆積土] 2層に分層できたが、ほとんど黒色土で覆われている。

[出土遺物] 覆土から、土師器の破片4点が出土した。

#### 第3号溝跡（図12）

[位置] F-9グリッドからH-9グリッドにかけて位置している。第2号溝跡より古く、第2号住居跡より新しい。南端に第7号土坑があるが新旧関係は不明。なお、第7号土坑の南側には第109号溝跡が連続している。

[形態・規模] 東方に向いて弧状に延びている。幅70cm前後であるが、1m50cmほど広くなっている部分がある。深さ15~20cmである。長さ9mほど検出した。

[堆積土] 第2号住居跡との重複部分では褐色土が、それ以外では黒色土が主体である。

[出土遺物] なし。

#### 第4号溝跡（図4）

第2号住居跡の「外周溝」の項で記述している。

#### 第5号溝跡（図5）

第3号住居跡の「外周溝」の項で記述している。

#### 第6号溝跡（図12）

[位置] I-5グリッドからJ-5グリッドにかけて位置している。第5号溝跡と重複し、これよりも古い。

[形態・規模] いくぶん弧状を呈しながらも、ほぼ直線状に延びている。幅40cm前後、深さ5~10cm、長さ6m30cmほどを検出した。溝底面は北から南へ低くなっている。

[堆積土] 褐色土のみを確認した。

[出土遺物] なし。

#### 第7号溝跡

平成11年度調査の第109号溝として記述している。

#### 第8号溝跡（図12）

[位置] K-6グリッドからI-6グリッドにかけて位置している。第109号溝跡と重複し、これよりも古い。新旧関係は不明だが、第1号溝跡と重複している可能性がある。

[形態・規模] 北西から南西にかけてほぼ直線状にのびている。幅90cm、深さ35~40cmで、長さ5m20cmほどを検出した。溝底面は西から東へ低くなっている。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土が主体である。中程に、白頭山火山灰が堆積している。

[出土遺物] 覆土から少量の土師器の破片が出土した。

**第9号・第10号溝跡**

それぞれ、平成11年度調査の第105号、第106号溝跡として記述している。

**第11号溝跡（図7）**

第4号住居跡の「外周溝」の項で記述している。

**第12号溝跡（図7）**

【位置】G-14グリッドからE-15グリッドに位置し、第4号住居跡の内周溝と第11号土坑との間から検出された。第4号住居跡及び第11号土坑との新旧関係は不明である。

【形態・規模】いくぶん東側に向いた弧状を呈している。幅30cm前後、深さ20cm前後で、長さ6m80cmほどを検出した。溝底面は住居跡内周溝から第11号土坑に向かって低くなっている。

【堆積土】黒色土、暗褐色土の堆積が見られた。

【出土遺物】覆土から、少量の土師器や須恵器（壺）の破片のほか、台石と思われる石器が出土した。

**第13号溝跡**

平成11年度調査の第102号溝跡として記述している。

**第14号溝跡（図10・12）**

【位置】F-14グリッドの第12号溝跡と第8号土坑との間に位置している。新旧関係は、第12号溝跡よりも古く、第8号土坑よりも新しい。平成11年度調査の第104号溝跡と同じ溝跡の可能性がある。

【形態・規模】幅35~50cm、深さ18cmで、長さ90cmほどを確認した。

【堆積土】黒褐色土のみ確認した。

【出土遺物】なし。

**4 挖立柱建物跡****第1号掘立柱建物跡（図11）**

【位置】E・F-13グリッドに位置している。

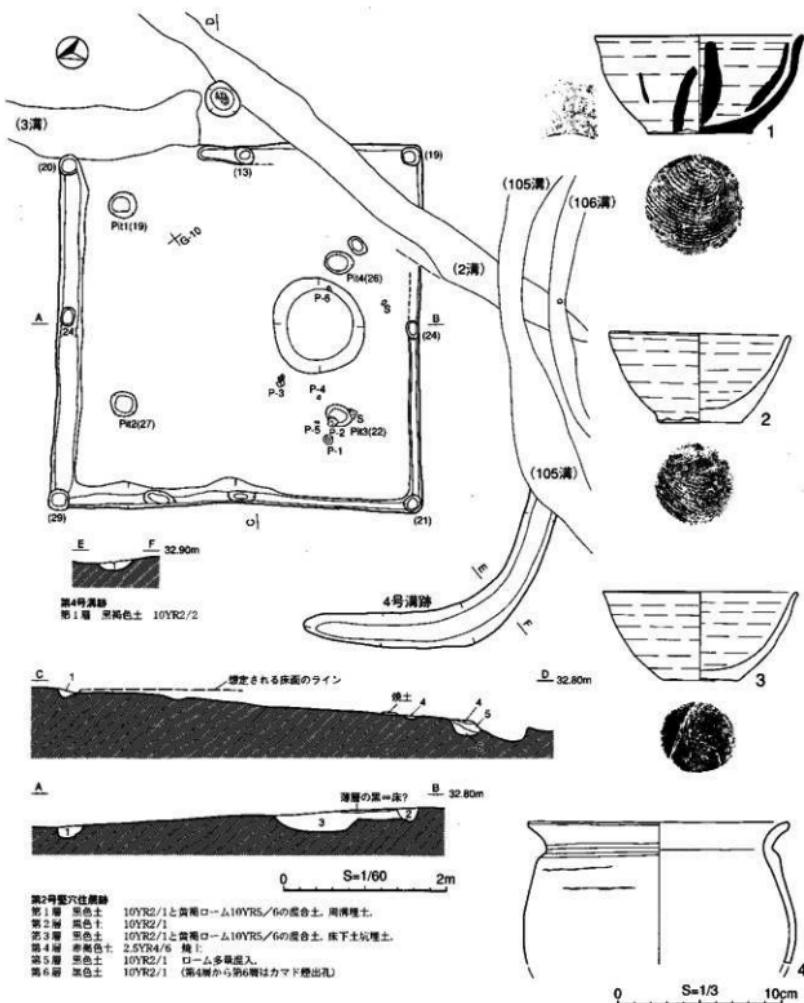
【形態・規模】南北方向柱列が1間、東西方向柱列が2間の建物跡で、平面形は長方形である。南北方向柱列はほぼ真北（座標北）を向いている。

【柱穴】柱穴掘り方は径が30~40cmで、平面形は梢円形である。深さは20~30cmである。

【柱間寸法】総長で見ると、東西方向柱列のうち北側列が4.00m、南側列が3.90mであり、南北方向柱列は東側が3.57m、西側が3.53mである。整った長方形を呈している。

【出土遺物】なし。

（崩山 異）



第2号堅穴住居跡  
 第1層 黒色土 10YR2/1と青褐色ローム10YR5/6の混合土。周溝埋土。  
 第2層 黒色土 10YR2/1  
 第3層 黒色土 10YR2/1と青褐色ローム10YR5/6の混合土。底下土灰埋土。  
 第4層 黒色土 2.5%の砂を含む10YR2/1  
 第5層 黒色土 10YR2/1 ローム多量入。  
 第6層 黒色土 10YR2/1 (第4層から第6層はカマド焼出孔)

固有 番号	種類	基盤	出土層位	計 面 積 (cm)			外 壁 調 整		内 壁 調 整		底面調整	分類	備考	
				口 径	岩 高	表 面	口縫部	体部上半	体部下半	口縫部	体部上半	体部下半		
1	堅窓跡	环	2往床頭	(12.7)	6.1	6.4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	P-2 2段式火炉、内燃室切引、窓頭(?)
2	上縫跡	环	2往床頭	11.1	5.6	5.1	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	P-1 内燃室切引
3	上縫跡	环	2往床頭	(12.0)	5.5	4.6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	P-6 内外燃室切引
4	上縫跡	窓	2往床頭	(16.0)	-	-	窓頭	窓頭	窓頭	窓頭	窓頭	窓頭	窓頭	P-7 窓頭、窓頭(?) S=1/3-1/4部分

図4 第2号堅穴住居跡

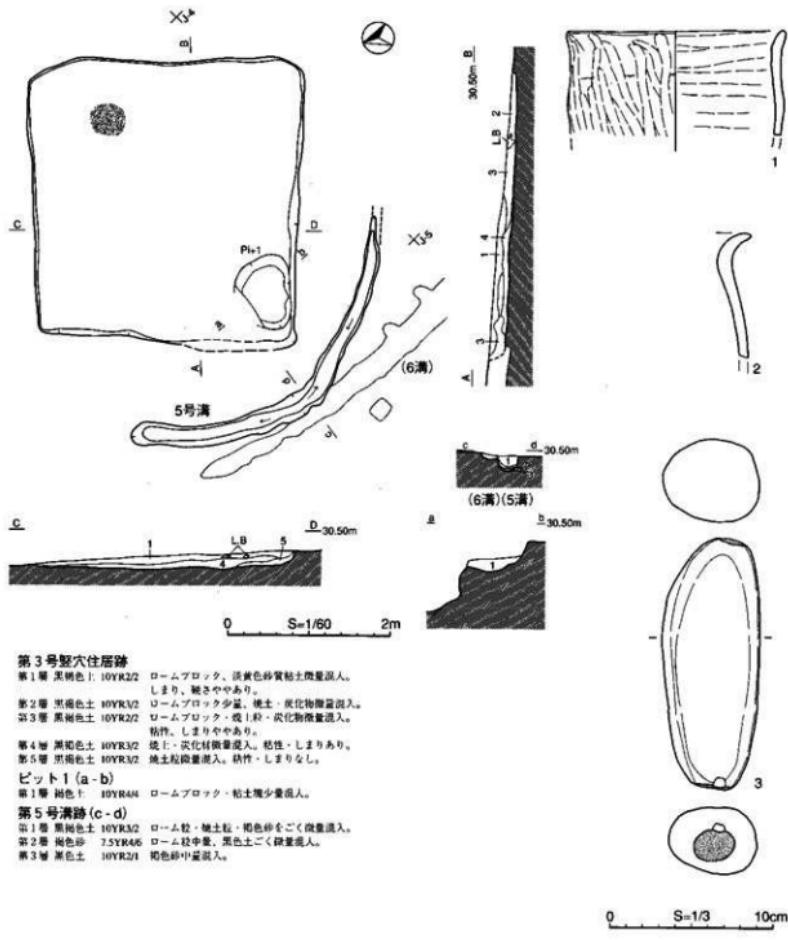
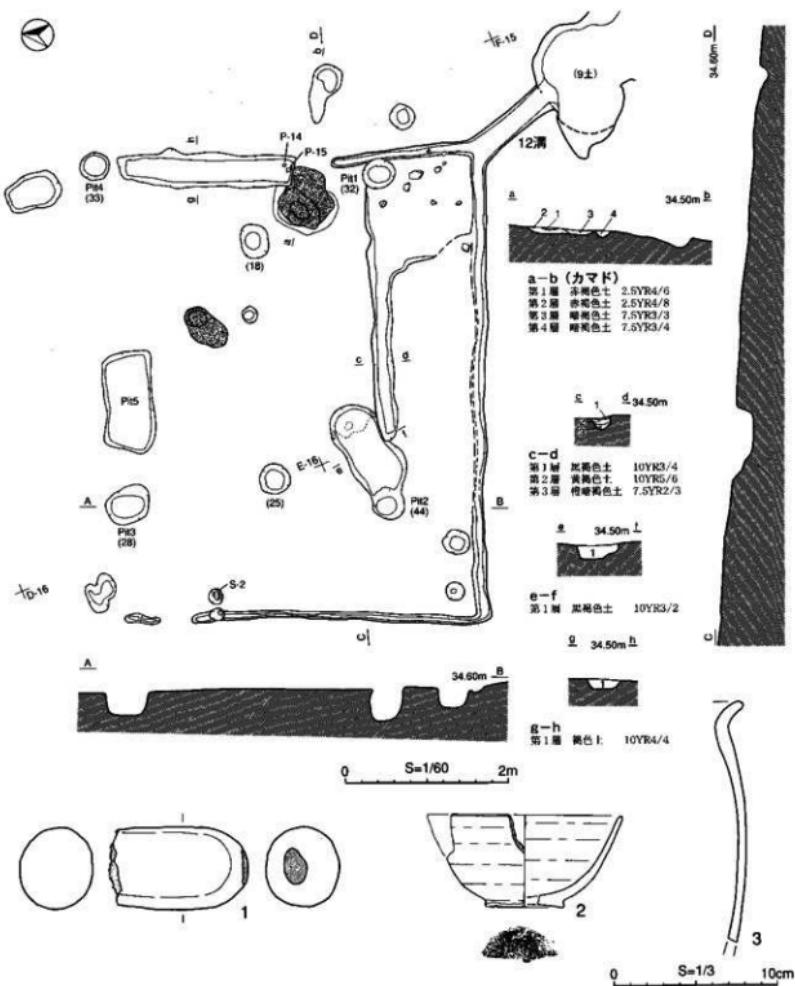


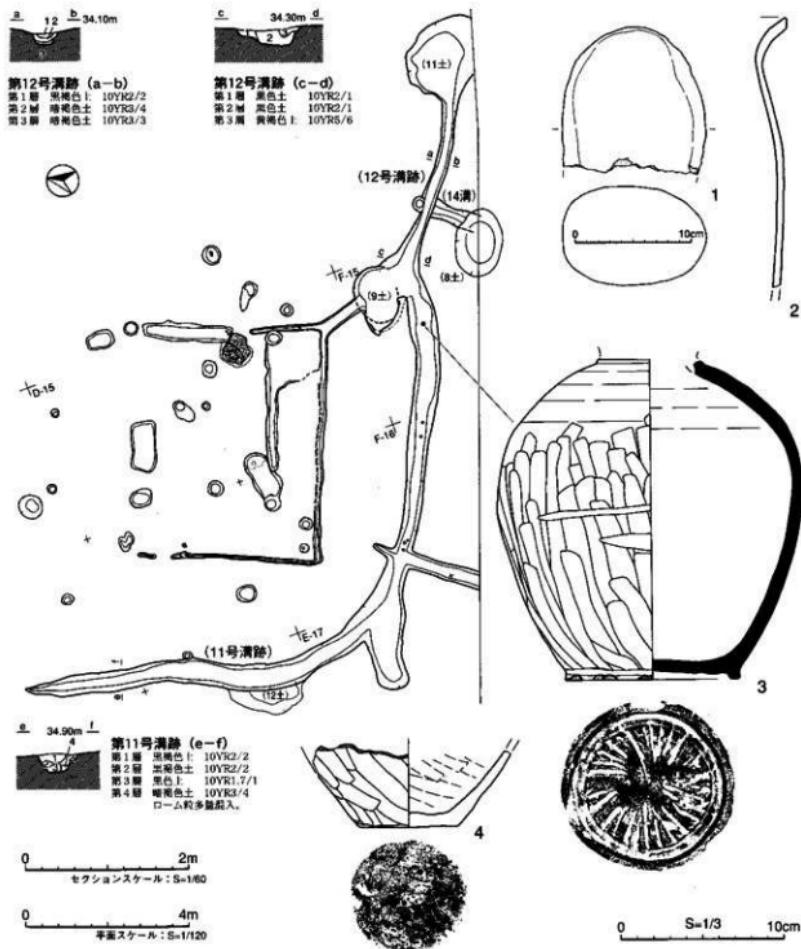
図5 第3号堅穴住居跡

固形 番号	種類	容積	出土層位	計測値(cm)			外 壁 計 算			内 壁 計 算			造出調整	分類	備考	
				口 径	壁 厚	底 厚	口神部	体壁上下	体壁下下	口径形	各部上下	体壁下下				
1	土結構	要	3往 2往	(13.0)	-	-	ヘラナダ	ヘラナダ	-	ヘラナダ	ヘラナダ	-		A	外周面積 P-2, 3, 4	
2	土結構	要	3往 2往	-	-	-	ヨコナダ	ヘラナダ	-	ヨコナダ	ヘラナダ	-		A	P-6, P-19	
3	出土層位	計 測 値(cm)		奥さ	幅	深さ	重量(kg)	石	質	分類						備考
3	3往 1往	15.5	6.0	5.1	720.0		凝灰岩	麻痺	S-1							



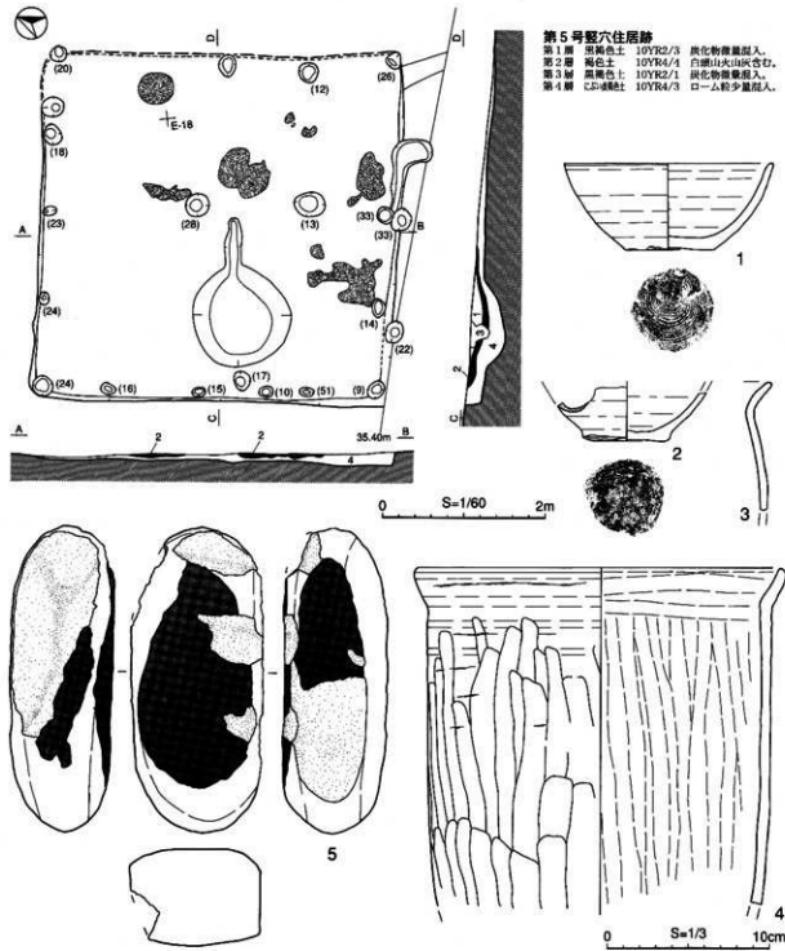
出土地番号	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	分類	備考		
		長さ	幅	厚さ						
1	4往 桶の方	(8.6)	5.1	4.4	(283.0)	武政青	瓶壺形	S-3		
2	上部器 壺	4往 桶の方	(12.0)	5.7	(4.6)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	外表面磨削 内面剥離
3	上部器 壺	4往 桶の方	-	-	-	ヨコナギ	ハラナギ	-	-	A 外表面付着

図6 第4号竪穴住居跡



図版 番号	出土場所	計面積(cm)			重量(g)	石質	分類	備考		
		長さ	幅	厚さ				石器	骨器	分類
1	12号 フカ上	(12.1)	12.4	8.7	(1674.0)	安山岩	台石	S-2欠損		
2	土師器 蓋	12清 覆土	—	—	ロクロ	口縁部	体盤上半	体盤下半	口縁部 ハラケズリ	—
3	復元器 蓋	11清 覆土	—	(19.8)	19.8	—	ロクロ	ハラケズリ	不明	明文
4	土師器 蓋	11清 覆土	—	—	6.0	—	ハラケズリ	—	ハラケズリ	b P-17 内外細密織

図7 第4号竪穴住居跡・第11号・第12号溝跡

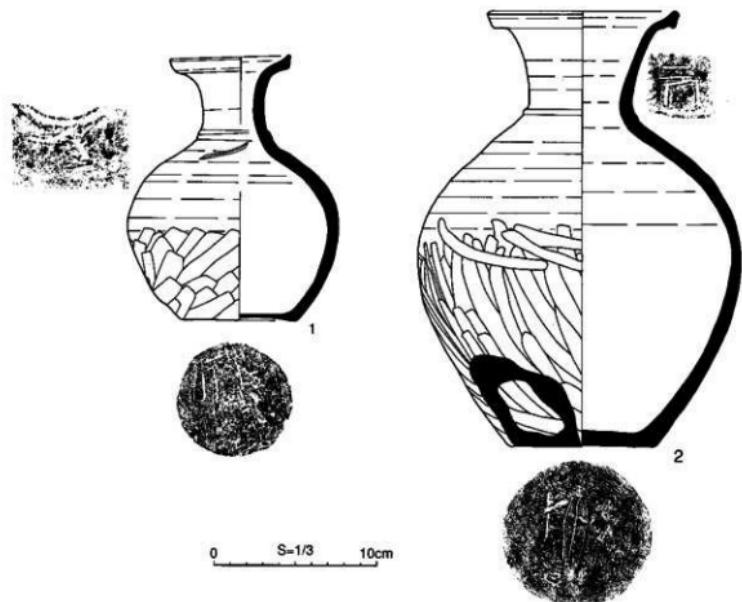


国版 番号	種類	計測値(cm)	外 壁 固 定			内 壁 固 定			底面調整	分類	備考	
			口 径	器 高	底 径	口縫部	底部上半	底部下半				
1	土器器	环	5往 底直	12.9	5.4	5.4	ロクロ	ロクド	ロクロ	ロクロ	目輪孔切り B II b	
2	土器器	环	5往 底直	-	-	5.4	-	-	磨滅 (ロクロ)	-	磨滅 (ロクロ) P-6	
3	土器器	束	5往 底直	-	-	-	ヨコナデ	ハラケズリ	ヨコナデ	ハラナデ	-	B II P-5
4	土器器	束	5往 底直	(23.0)	-	-	ロクロ	ハラケズリ	ヨコナデ	ハラナデ	-	P-17, 1, 7, 10, 19 外側縫隙

国版 番号	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石 質	分類	備 考		
		長さ	幅	厚さ						
5	5往 底直	14.9	(8.1)	6.0	(1133.0)	流紋岩	硬石	S-1		

図8 第5号竪穴住居跡(1)



図版 番号	種 類	器 種	出土層位	計測 値 (cm)			外 形 調 査			内 部 調 査			分 類	備 考
				口 径	深 さ	底 径	口部	体部上半	体部下半	口部形	体部上半	体部下半		
1	吸溜器	長頸瓶	5住 中層	7.4	16.5	7.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	小明	ナデツケ	B-c	P-29 ヘラ記号「ノ」
2	吸溜器	長頸瓶	5住 中層	(11.8)	27.1	9.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	不明	ナデツケ	B-c	P-39 ヘラ記号「丶」

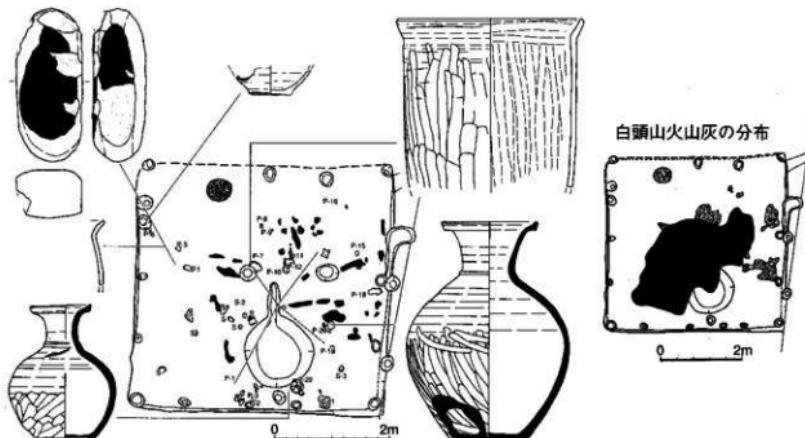
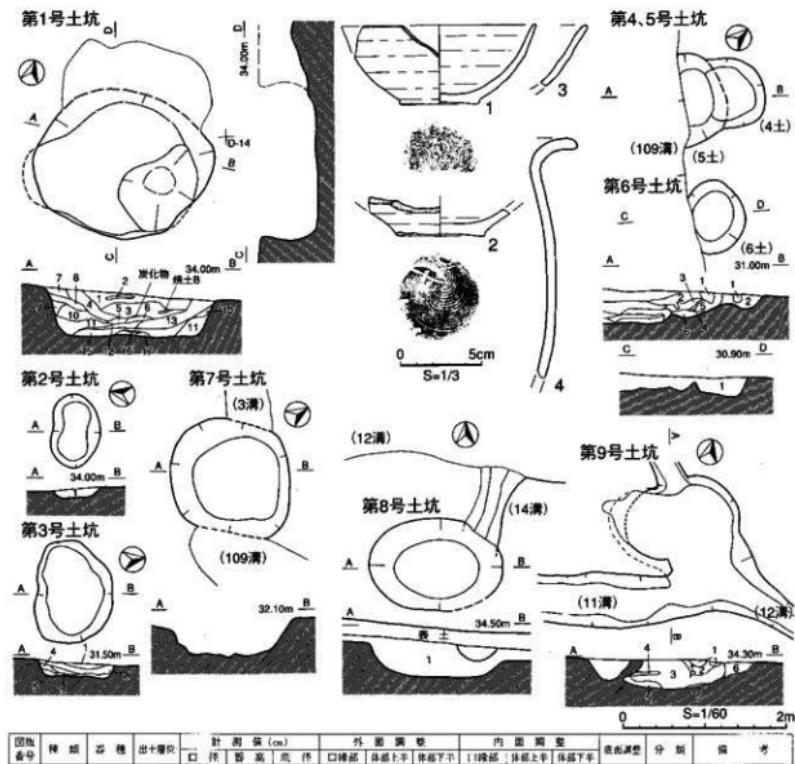


図9 第5号竪穴住居跡(2)



番号	種類	基盤	出土深度	計測深度(cm)			外 因 球 壓			内 因 球 壓			底面形状	分類	備考
				口	井	壁	高	底	件	口	底部	体積	下	口	ロクロ
1	土器部	环	1土	12.0	4.9	(5.0)	17クロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	日輪模写	B II b	内外差幅	
2	土器部	环	2土	-	-	5.4	-	ロクロ	-	-	ロクロ	日輪模写	B II	側面切りの系の有り	
3	土器部	环	3土	-	-	-	ロクロ	-	ロクロ	-	-	-	-	B II	
4	土器部	壳	4土	-	-	-	ロコナデ	ヘラナデ	-	ロコナデ	ヘラナデ	-	-	A	

## 第1号土坑

第1層 暗褐色土 10YR3/3 第10層 反灰褐色土 10YR4/2  
 第2層 赤褐色土 SYR4/6 第11層 黄褐色土 10YR5/6  
 第3層 黄褐色土 10YR4/3 第12層 黑褐色土 10YR3/2  
 第4層 暗褐色土 10YR3/2 第13層 黑褐色土 10YR3/2  
 第5層 黄褐色土 10YR5/2 第14層 黑褐色土 10YR4/6  
 第6層 黄褐色土 10YR5/6 第15層 黑褐色土 10YR4/6  
 第7層 黄褐色土 10YR4/3 第16層 反灰褐色土 SYR3/6  
 第8層 黄褐色土 10YR5/6 第17層 黑褐色土 10YR3/1  
 第9層 明黄褐色土 10YR6/8

## 第2号土坑

第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量混入。粘性無し。

## 第3号土坑

第1層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土10YR5/6微量混入。  
 第2層 黄褐色土 10YR2/2 黄褐色土10YR5/6微量混入。  
 第3層 黑色土 10YR2/1  
 第4層 黑色土 10YR2/1 しまり無し。  
 第5層 黄褐色土 10YR5/6

## 第4号土坑

第1層 黄褐色土 10YR4/6 ローム質上。砂粒混入。  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 砂粒・小石混量混入。

## 第5号土坑

第1層 黄褐色土 10YR4/6 ローム質上。砂粒混入。  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量混入。粘性あり。  
 第3層 黄褐色土 10YR2/2 黄褐色土微量混入。粘性あり。  
 第4層 黑褐色土 7.5T/4/4 粘土質上。しまりあり。  
 第5層 黑褐色土 10YR3/4 反灰褐色土微量混入。しまりあり。  
 第6層 にごい黄褐色土 10YR4/3 砂粒中量混入。しまりあり。

## 第6号土坑

第1層 黄褐色土 10YR4/6 砂粒混入。しまりなし。

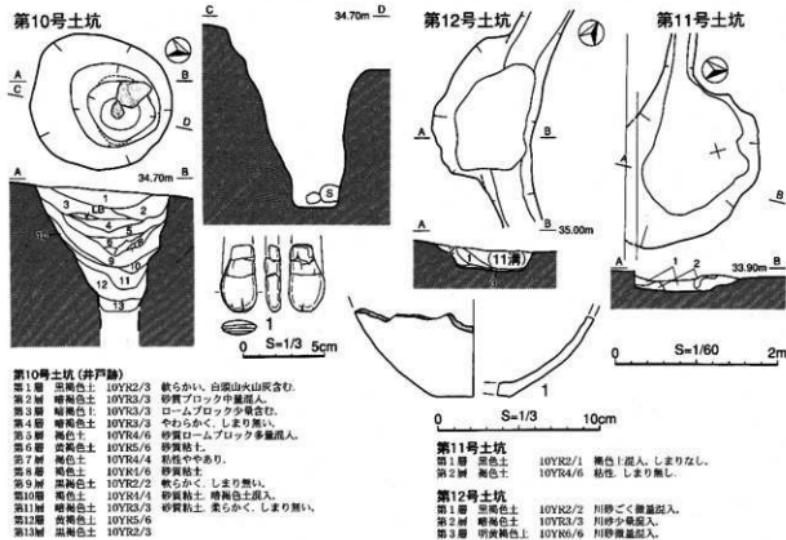
## 第8号土坑

第1層 黄褐色土 10YR2/3 ローム粒少量混入。しまりあり。

## 第9号土坑

第1層 黄褐色土 10YR4/4 第4層 黑褐色土 10YR2/1  
 第2層 黑褐色土 10YR2/2 第5層 黑褐色土 10YR2/2  
 第3層 黑褐色土 10YR3/3 第6層 暗褐色土 10YR3/3

図10 第1号～第9号土坑



図版 番号	基 種	出 土 層 位	計 測 値 (cm)			木 取 り	開 拓	備 考		
			長 さ	幅	厚 さ					
I	木製品	10+ 墓上	(4.1)	2.2	0.8	無孔	不明	炭化		
II	土器	11+ 墓上	—	—	(4.8)	—	—	開拓	—	—

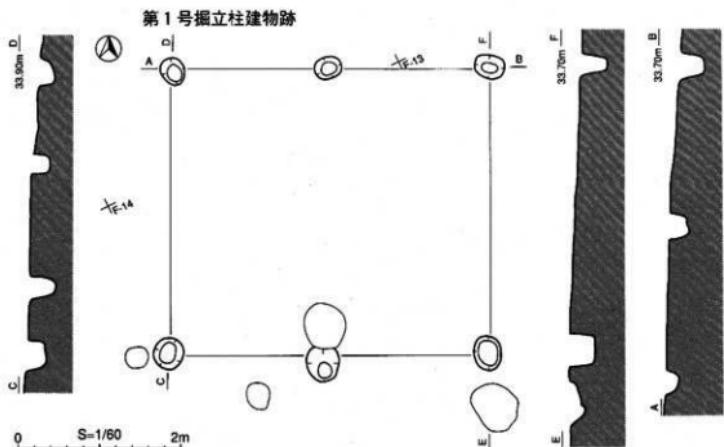


図11 第10号～第12号土坑・第1号掘立柱建物跡

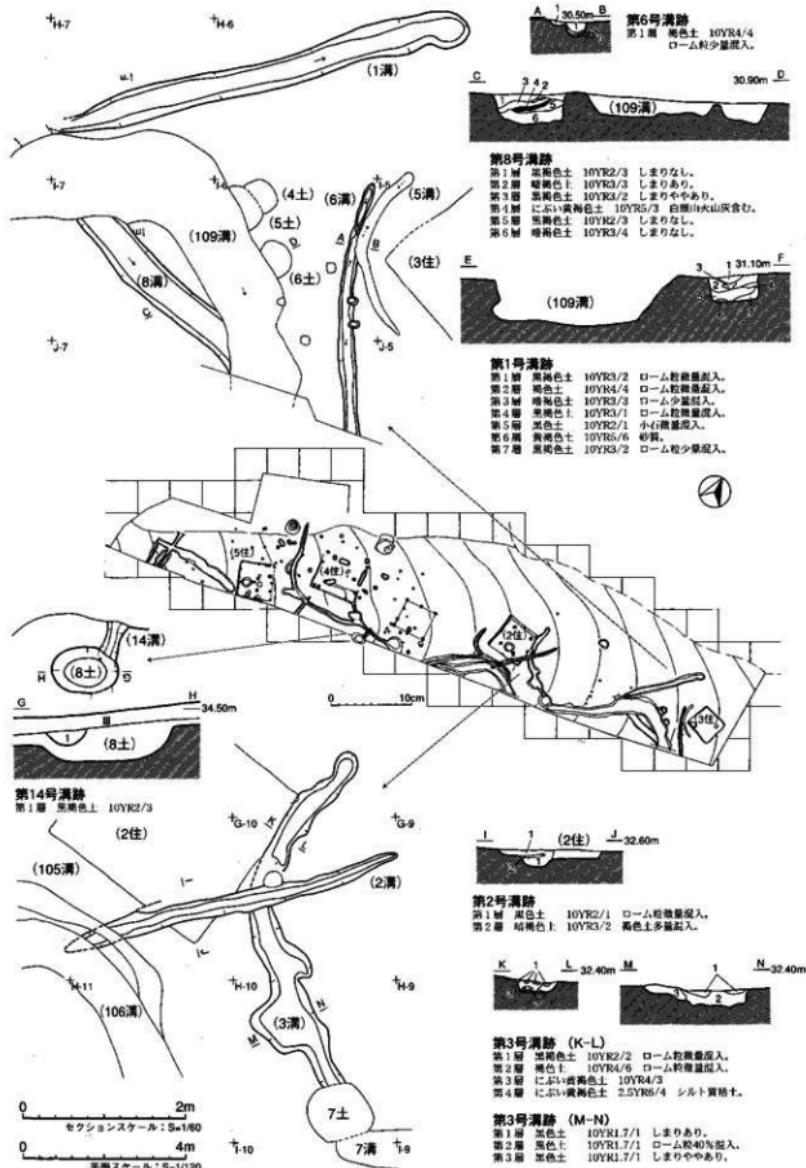


図12 第1号～第3号・第6号・第8号・第14号溝跡

(平成11年度調査)

## 1 穹穴住居跡(含外周溝)

### 第101号竪穴住居跡（図13）

[位置] I・J-15・16グリッドに位置し、外周溝（第108号溝跡）を伴う住居跡である。

[重複]堅穴住居跡部分は第101号溝跡と重複し、溝跡より古い。外周溝（第108号溝跡）は第108号土坑、第101号・第104号・第107号溝跡と重複しており、いずれの遺構より古い。

101住・108溝（外周溝）

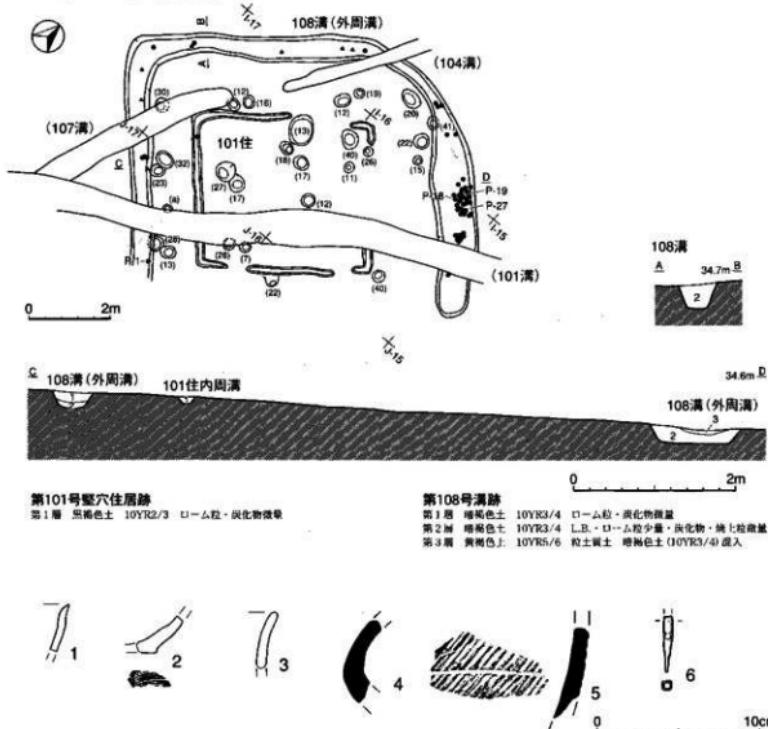


図13 第101号竪穴住居跡・第108号溝跡

102住・105溝・106溝(外周溝)

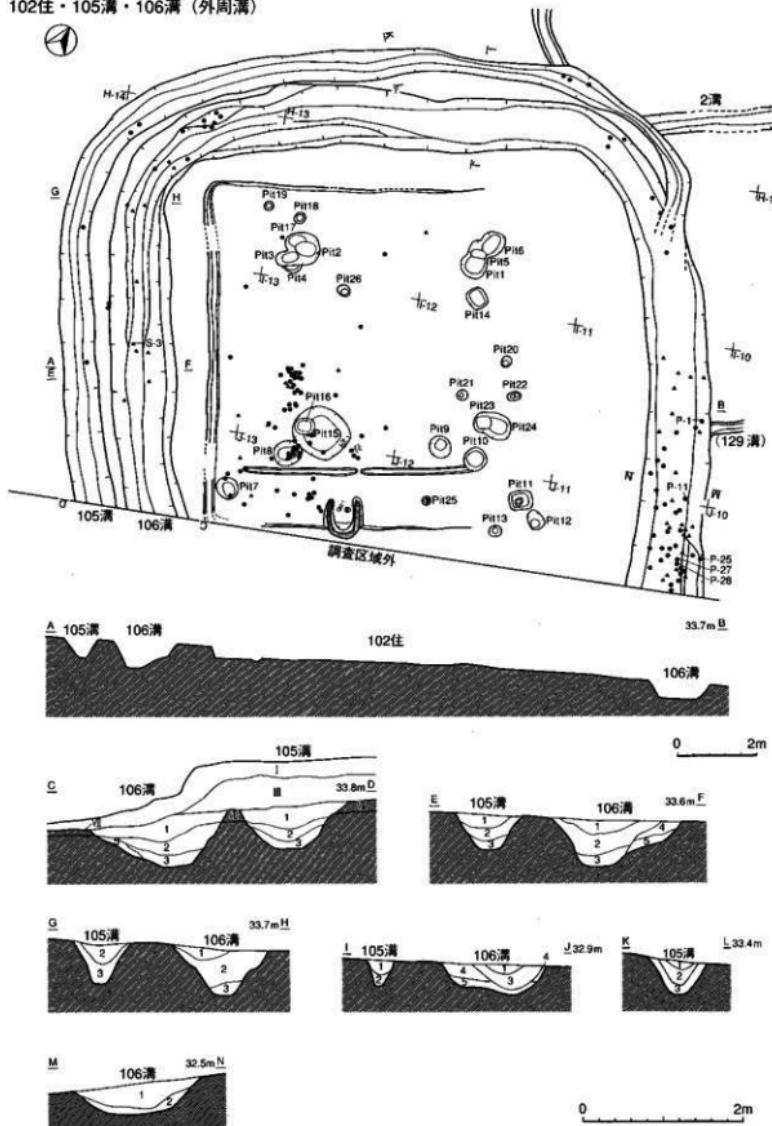


図14 第102号竪穴住居跡・第105号・第106号溝跡

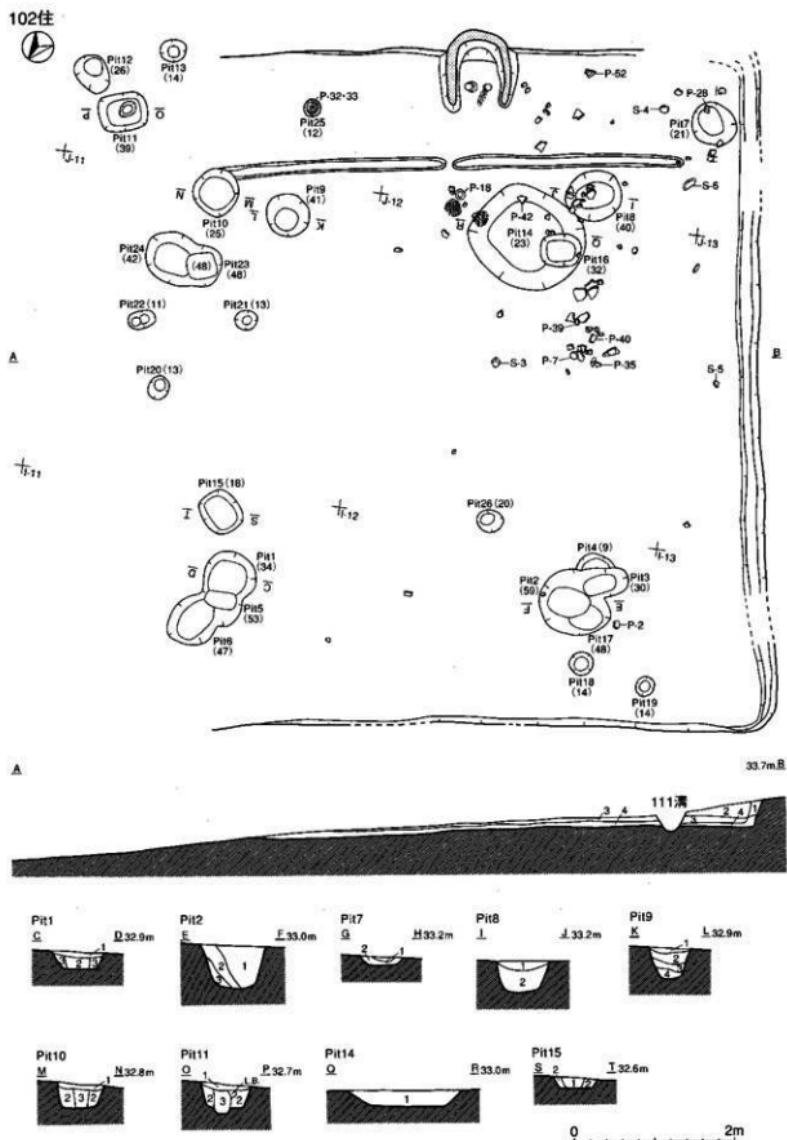


図15 第102号竖穴住居跡

## 第105号溝跡

第1層 噴褐色土 10YR3/4 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第2層 黒褐色土 10YR2/3 L.B.・ローム粒少量  
第3層 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒微量

## 第102号堅穴住居跡

第1層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第2層 噴褐色土 10YR3/4 ローム粒・中量  
第3層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第4層 噴褐色土 10YR3/4 ローム粒・炭化物・焼土粒微量

## Pit1

第1層 噴褐色土 10YR3/4 ローム粒少量・炭化物・焼土粒微量  
第2層 黑褐色土 10YR5/6 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第3層 黑褐色土 10YR2/3 ローム粒・焼土粒・炭化物少量

## Pit2

第1層 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒微量  
第2層 黑褐色土 10YR2/3 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第3層 黑褐色土 10YR4/4 ローム粒・L.B.少量

## Pit4

第1層 黑褐色土 10YR2/3 ローム粒・炭化物・焼土粒微量

## Pit15

第1層 黑褐色土 10YR2/2 ローム粒微量  
第2層 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒・炭化物・焼土粒微量

## 第106号溝跡

第1層 黑褐色土 10YR2/3 L.B.・ローム粒少量・炭化物・焼土粒微量  
第2層 噴褐色土 10YR3/4 ローム粒微量  
第3層 噴褐色土 10YR2/3 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第4層 海色土 10YR4/4 L.B.・ローム粒少量  
第5層 黑褐色土 10YR2/3 ローム粒・炭化物・焼土粒微量

## Pit9

第1層 海色土 10YR4/4 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・L.B.少量・炭化物・焼土粒微量  
第3層 黑褐色土 10YR2/2 ローム粒・炭化物・小礫微量  
第4層 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒・小礫微量

## Pit10

第1層 海色土 10YR4/4 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・L.B.少量・炭化物・焼土粒微量

## Pit11

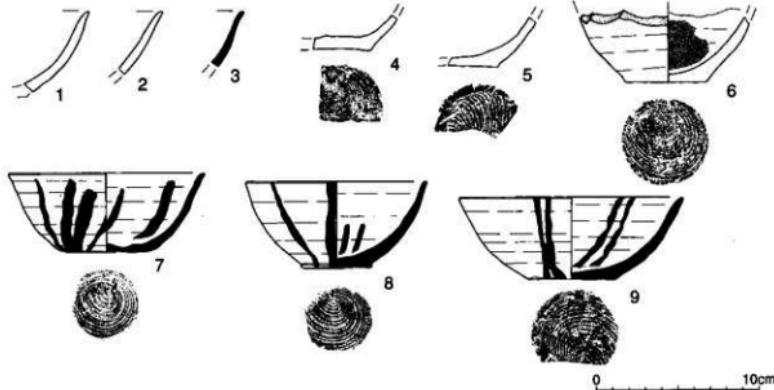
第1層 海色土 10YR4/4 ローム粒・炭化物・焼土粒微量  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・L.B.少量・炭化物・焼土粒微量  
第3層 黑褐色土 10YR2/2 ローム粒・炭化物・小礫微量

## Pit7

第1層 黑褐色土 10YR2/2 ローム粒微量  
第2層 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒・炭化物・焼土粒微量

## Pit8

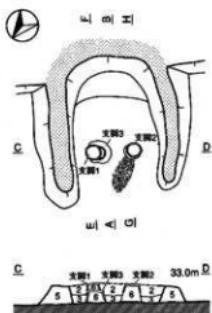
第1層 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒・炭化物・焼土粒少量  
第2層 黑褐色土 10YR3/2 ローム粒・L.B.少量



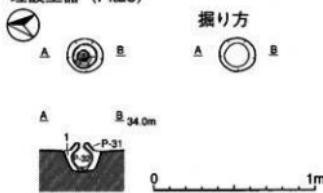
回復番号	種類	計種	出土部位	計径	剖面	外観	内観	底面	分類	備考
				(m)	径	高さ	径	径	形	
1	土器部	坏	10件 粘土	-	-	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	- B II b
2	土器部	坏	10件 粘土	-	-	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	- B II
3	須恵器	坏	10件 灰土	-	-	ロクロ	-	ロクロ	-	- ヘラ記号「」
4	土器部	坏	10件 灰土	-	-	ロクロ	-	ロクロ	ロクロ	[鉢底] B II b P-5
5	七輪器	坏	10件 灰土	-	-	ロクロ	-	ロクロ	ロクロ	[鉢底] B II b
6	七輪器	坏	10件 灰土	-	-	5.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	[鉢底] B II b P-7 内側炭化物付有
7	須恵器	坏	10件 灰土	(12.0)	4.9	4.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	P-42 水ヶ瀬スキ痕 ヘラ記号「」
8	須恵器	坏	10件 灰土	(11.0)	6.3	5.2	ロクロ	ロクロ	ロクロ	P-3
9	須恵器	坏	10件 灰土	13.8	5.1	5.3	ロクロ	ロクロ	ロクロ	P-3 大ダメスキ痕 [鉢底]と括弧(P-3)

図16 第102号堅穴住居跡・第105号・第106号溝跡出土遺物(1)

## 102住カマド



## 埋設土器 (Pit25)



## 埋設土器 (Pit25 掘り方)

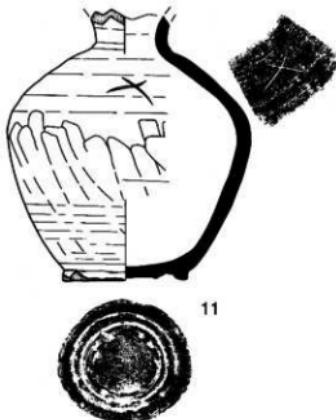
第1層 増粘土色 10YR3/3 ローム粒・焼土粒・炭化物少量



## 第102号竪穴住居跡カマド

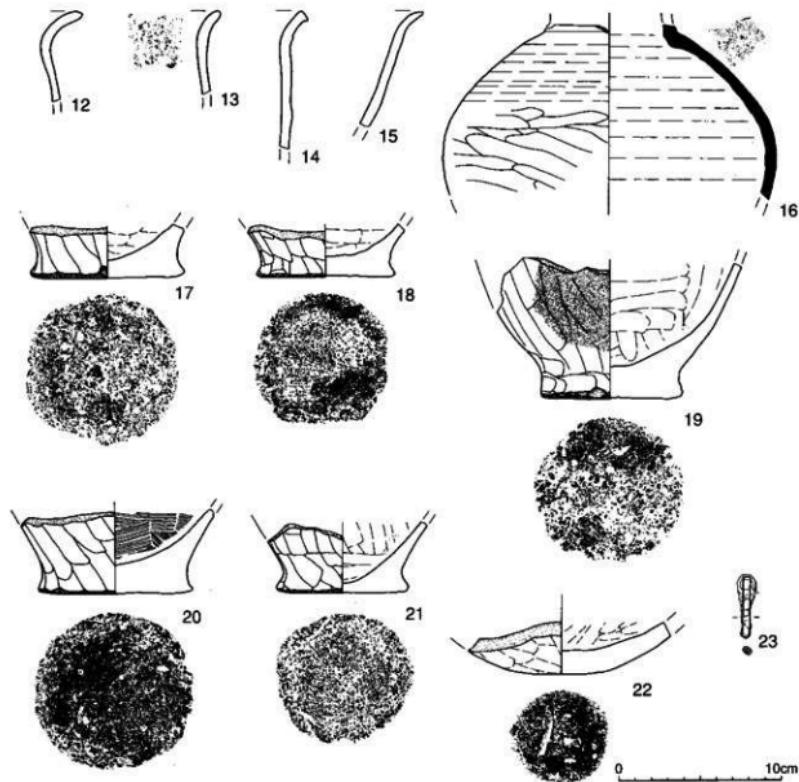
- 第1層 水褐色土 10YR4/6 (堆土部) ローム粒・L.B.・砂質土少量  
 第2層 増粘土色 10YR3/4 ローム粒・炭化物・燒土粒・少量  
 第3層 黄褐色土 10YR4/4 ローム粒・炭化物微量・燒土粒少量  
 第4層 黑褐色土 10YR2/3 ローム粒・燒土粒・炭化物微量  
 第5層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (堆土質土) 燃土粒・炭化物微量  
 第6層 黑褐色土 10YR2/2 ローム粒・炭化物少量

第105号竪穴住居跡



番号	種類	器種	出上層位	計 厚 値 (cm)			外 囲 調 整		内 囲 調 整		底面調整	分類	備考
				口	径	高	底	部	高	底	部		
10	土器器	環(里)	102住 貼土	13.6	—	—	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	—	B II
11	埴輪器	長頭柵	102住 貼土	—	(16.3)	7.6	ロクロ	ヘラケヅリ	—	ロクロ	不明	ヘラケヅリ	a P-記号「×」

図17 第102号竪穴住居跡・第105号・第106号溝跡出土遺物(2)



国宝 番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			外観調整			内観調整			表面調整	分類	備考		
				長さ	幅	高さ	底径	口縁部	底部上半	底部下半	口縁部	底部上半	底部下半				
12	土器部	甕	102住 覆土	-	-	-	-	ヨコナゲ ハラナギ	-	-	ヨコナゲ ハラナギ	-	-	-	A		
13	土器部	甕	102住 底面	-	-	-	-	ヨコナゲ ハラナギ	-	-	ヨコナゲ ハラナギ	-	-	-	A	内面へり記号「三」	
14	土器部	甕	102住 覆土	-	-	-	-	ロクロ	ハラナギ	-	ヨコナゲ 南波	-	-	B	内面横溝底		
15	土器部	甕	102住 覆土	-	-	-	-	ヨコナゲ ハラナギ	-	-	ハラナギ ハラナギ	-	-	-	-		
16	須恵器	壺	102住 底面	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	P-33, 39, 40 へり記号「三」			
17	土器部	甕	カットド	-	-	9.4	-	ハラナギ	-	-	ハラナギ 鉢底	-	-	A	支脚P-1		
18	土器部	甕	102住 覆土	-	-	8.6	-	-	ハラナギ	-	-	ハラナギ 鉢底	-	-	A		
19	土器部	甕	カットド	-	-	9.6	-	-	ハラナギ	-	-	ハラナギ 鉢底	-	-	A	支脚P-3	
20	土器部	甕	102住 カットド	-	-	9.4	-	-	ハラナギ	-	-	ハケメ 鉢底	-	-	A	支脚P-2	
21	土器部	甕	102住 底面	-	-	8.2	-	-	ハラナギ	-	-	ハラナギ 鉢底	-	-	A		
22	土器部	甕	102住 覆土	-	-	5.3	-	-	ハラナギ	-	-	ハラナギ ナダツケ	-	-	P-18		

国宝 番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
23	陶製品	棒狀	102住 底面	3.5	0.4	0.4	27	

図18 第102号竪穴住居跡・第105号・第106号溝跡出土遺物(3)

[平面形・規模]上部が削平されているため内周溝のみの確認であるが、東西が4m30cm、南北が4mで、ほぼ方形と考えられる。床面積は約16.5m<sup>2</sup>と推定される。主軸方位はN-25°-Eである。

[壁・床面]削平されているため確認できなかった。

[内周溝]幅約15~20cm、深さ約6~12cmで北側を除いて確認できた。

[ピット]住居跡内外からいくつかのピットを検出したが、住居跡に伴うかは不明である。

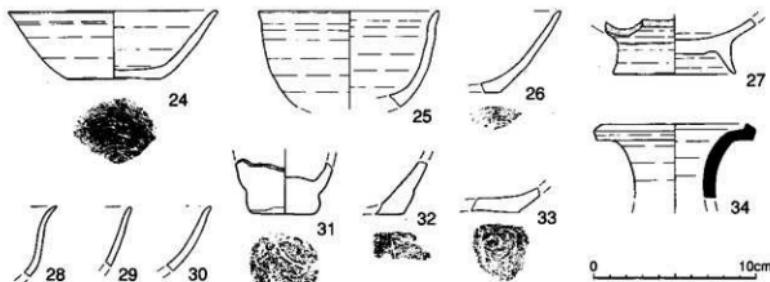
[カマド]検出されなかった。

[堆積土]内周溝の黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝]北側のE-14グリッドから南側のJ-16グリッドにかけて住居跡を囲むように検出した。堅穴住居跡から、1~1m50cmほど離れてつくられている。溝は幅40cm~1m、深さ9~43cmである。溝底面のレベルは西から東に向かって低くなっている。

[出土遺物]堅穴住居跡からは出土しなかったが、外周溝から土師器や須恵器の破片、礫などが出土している。

[時期]出土遺物から、9世紀後半と考えられる。



段階 番号	種類	存・候	出土層位	計 高 度(cm)			外 周 溝			内 周 溝			表面判定	分類	備考
				口	井	底	11号	体部	底部下	11号	体部上	底部上			
24	土師器	坏	内周溝 壁土	(12.8)	(5.2)	(5.6)	11号	体部	底部下	11号	体部上	底部上	凹凸あり	B II	P-11 外周口縁に沿いコクロ
25	土師器	坏	11号 壁土	11.0	-	-	ロクロ	ロクロ	-	ロクロ	ロクロ	-	-	-	P-25
26	土師器	坏	11号 壁土	-	(5.0)	-	11号	体部	底部下	11号	体部上	底部上	滑減	滑減	滑減
27	土師器	坏	11号 壁土	-	(3.4)	7.4	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	切妻後 窓台部位	B II c
28	土師器	坏	10号 壁土	-	-	-	11号	体部	底部下	11号	体部上	底部上	滑減	滑減	-
29	土師器	坏	10号 壁土	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	-	-	B II
30	土師器	坏	11号 壁土	-	-	-	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ヘタリ有り	ヘタリ有り	-	-	-	D I 内山墨色処理
31	土師器	小型土器	11号 壁土	-	-	3.8	-	-	-	滑減	-	-	滑減	滑減	P-1 P-27, P-28
32	土師器	坏	11号 壁土	-	-	-	-	-	-	滑減	-	-	滑減	滑減	-
33	土師器	坏	11号 壁土	-	-	-	-	-	-	滑減	-	-	滑減	滑減	-
34	埴生器	長筒型	11号 壁土	(9.0)	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	-	-	T

図19 第102号堅穴住居跡・第105号・第106号溝跡出土遺物(4)

## 第102号竪穴住居跡(図14~図20)

[位置] K~J-11~13グリッドに位置し、外周溝(第105号溝跡)を伴う住居跡である。

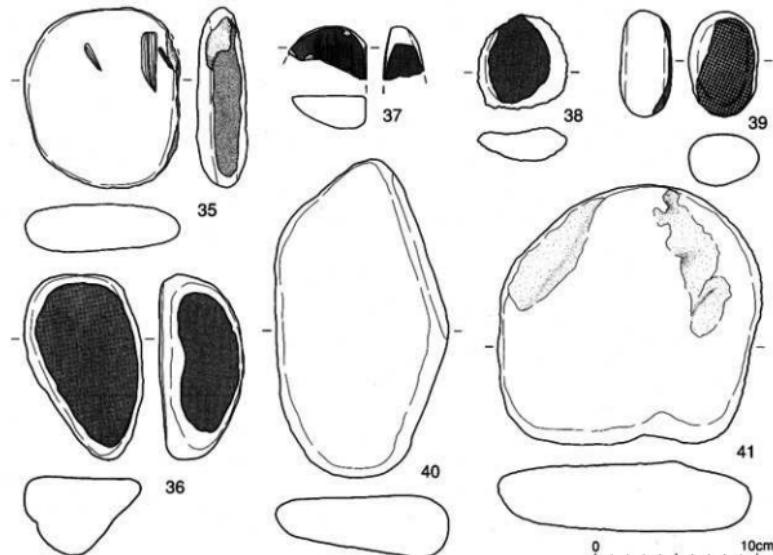
[重複] 竪穴住居跡部分は第101号・第111号溝跡と重複し、いずれの溝跡より古い。外周溝(第105号溝跡)は第106号溝跡と重複しこれより新しいが、第106号溝跡も第102号竪穴住居跡の構築前の外周溝と考えられる。外周溝は第101号溝跡と重複して、これより古い。

[平面形・規模] 東側の部分が削平されているため確認できなかったが、西壁は8m50cmである。主軸方位はN-34°-Eである。

[壁・床面] 残存する西壁の壁高は約30cmで、床面から約10cmの段差が認められた。床面は堅く締まっている。

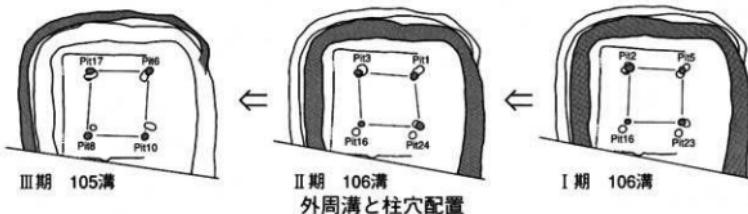
[内周溝] 住居跡に伴う内周溝は検出されなかったが、貼床下から幅約15~20cm、深さ約5~15cm、長さ約6mの周溝を南側に確認でき、拡張以前の住居跡のものと考えられる。

[ピット] 住居跡内外から多くのピットを検出したが、ピット6・8・10・17が主柱穴と思われる。ま



図版 番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
35	敲砸器	102住 床面	11.1	(9.5)	2.8	(454)	砂岩	S-4
36	敲砸器	106溝 面上	11.3	7.2	4.8	488	安山岩	S-3
37	台石	102住 床面	(13.1)	9.7	8.0	(1437.0)	安山岩	S-3
38	敲砸器	102住 床面	5.8	5.5	2.0	44	多孔質 安山岩	
39	敲砸器	105溝 面上	6.5	4.3	3.2	84	泥岩	
40	台石	102住 床面	19.6	10.7	3.8	1183	安山岩	S-6
41	台石	110溝 1層	15.7	16.1	4.3	1903	安山岩	被熱処

図20 第102号竪穴住居跡・第105号・第106号溝跡出土遺物(5)



た、ピット2・5・16・23、ピット1・3・16・24も主柱穴と考えられ、柱穴と外周溝の関係は図のようになると思われる。カマド東側のピット25には土器が埋設されており、須恵器の壺に土師器の皿を被せた状態で検出された。(図17)

[カマド]カマドは南壁西側に粘土を用いて構築されている。焚口部には土師器壺の底部を用いた支脚が2基つくられている。

[堆積土]3層に分層できた。ピット10からの火山灰は、蛍光X線分析の結果不明の火山灰であった。[外周溝]南側は調査区域外のため不明だが、西側のJ-13グリッドから東側のJ-10グリッドにかけて竪穴住居跡をほぼ囲むように検出された。竪穴住居跡から、1mほど離れてつくられている。溝は幅50~90cm、深さ40~70cmである。溝底面の堆積土には砂粒がみられ、レベルは西から東に向かって低くなっている。また、西側から北側にかけて外周溝の内側に第106号溝跡を検出した。第102号竪穴住居跡の構築以前につくられた住居跡の外周溝と考えられる。溝の幅は約80cm~1m30cm、深さ45~70cmである。溝底面の堆積土には砂粒がみられ、レベルは西から東に向かって低くなっている。

[出土遺物]竪穴住居跡からは多くの土師器や須恵器の破片および砥石や鉄滓など出土し、外周溝からも土師器や須恵器の破片、礫、羽口、鉄滓など出土している。

[時期]出土遺物から、9世紀中葉から後半と考えられる。

### 第103号竪穴住居跡(図21~図24)

[位置]I・J-7・8グリッドに位置している。外周溝(第109号溝跡)を伴う住居跡である。

[重複]南側は調査区域外のため不明であるが、住居跡に伴うと考えられる外周溝(第109号溝跡)は第4層に白頭山一苦小牧火山灰が堆積する第8号溝跡と重複し、本溝跡が新しい。

[平面形・規模]南側が調査区域外、東側は削平されているため不明である。推定される主軸方位はN-27°-Eである。

[壁・床面]削平されているため、床面の一部のみ確認でき、やや硬く締まっている。

[内周溝]幅約15~20cm、深さ約5~10cmで西側と北側の一部に確認できた。

[ピット]検出されなかった。

[カマド]検出されなかった。

[堆積土]内周溝の黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝]西側のJ-9グリッドから東側のJ-5グリッドにかけて竪穴住居跡を開むよう検出された。竪穴住居跡から、およそ2m離れている。溝の幅は約50cm~1m80cm、深さ50~68cmである。溝底面のレベルは西から東に向かって低くなっている。

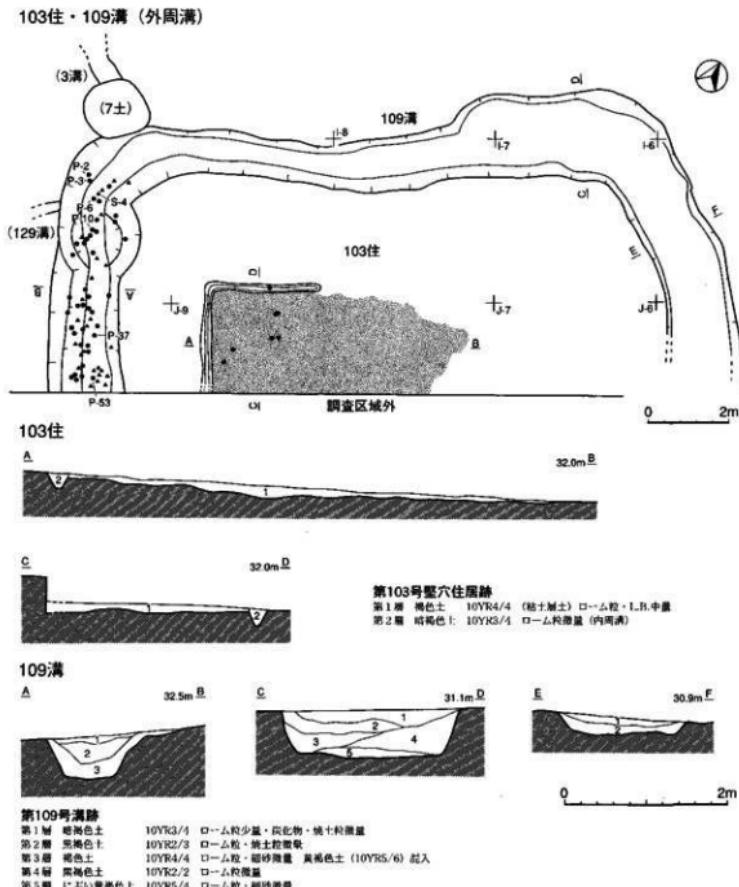
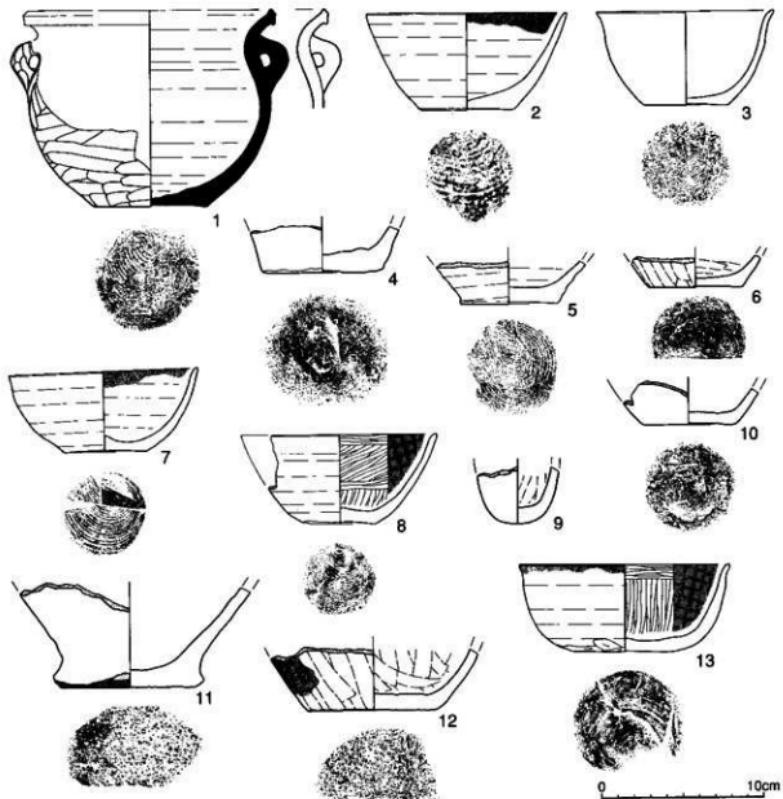


図21 第103号竪穴住居跡・第109号溝跡

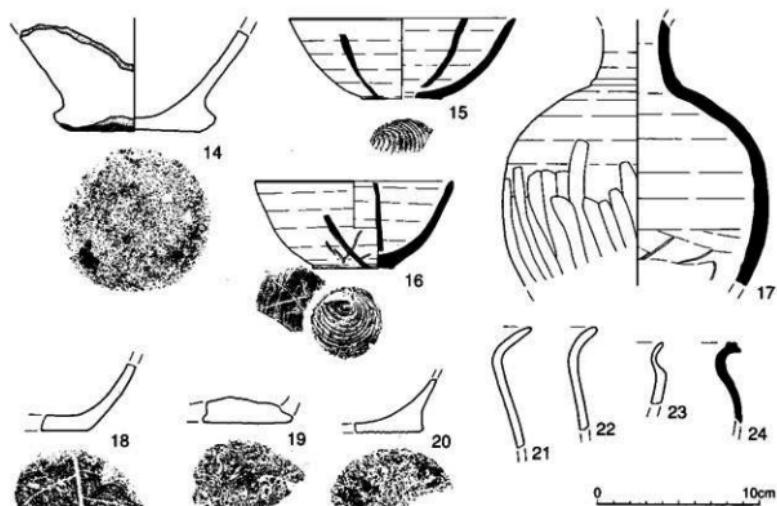
[出土遺物]床面から須恵器の双耳浅鉢のはか土師器の破片、羽口の破片、鐵滓などが出土し、外周溝からも土師器や須恵器の破片、磚、鐵達など出土している。

「時期】遺構の重複と出土遺物から、10世紀初頭以降と考えられる。



図版 番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			外観調査		内部調査		直面調査	分類	備考	
				L	W	H	口縁部	体部上半	体部下半	ロクロ	ロクロ			
1	須恵器	圓筒口壺	103号 1層	15.0	12.1	6.8	ロクロ	ハラズ	ハラズ	ロクロ	ロクロ	内板毛毛 ハラズ	—	
2	土師器	壺	103号 2層	12.3	6.1	5.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	壁止毛毛	B II b	内面口縁部 又太底化物付着
3	土師器	壺	103号 3層	(11.0)	5.8	5.2	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	B II	P 10
4	土師器	壺	103号 4層	—	—	7.4	—	—	—	—	—	直面毛毛 ナラフカ	A	
5	土師器	壺	7層 1層	—	—	6.0	—	ロクロ	—	—	—	ロクロ	直面毛毛	B II
6	土師器	鋤	103号 2層	—	—	5.8	—	—	—	—	—	内板毛毛 ナラフカ	A	P 62
7	土師器	壺	7層 2層	11.6	5.1	5.1	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	内板毛毛	B II b	内面口縁部 又太底化物付着(切刃)
8	土師器	壺	7層 3層	(12.0)	6.5	4.6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	内板毛毛	B II b	内面黑色処理
9	土師器	小型土壺	103号 4層	—	—	2.2	—	磨滅	磨滅	—	—	内板毛毛	—	
10	土師器	鋤	103号 4層	—	—	5.6	—	—	—	—	—	内板毛毛	A	P -2
11	土師器	壺	—	—	(8.6)	—	—	—	—	—	—	内板毛毛	A	
12	土師器	壺	103号 4層	—	—	8.0	—	—	—	—	—	内板毛毛	A	外表面状化物付着
13	土師器	壺	103号 4層	13.0	5.4	6.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	内板毛毛	B II a	内面黑色処理

図22 第103号竪穴住居跡・第109号溝跡出土遺物(1)



図版番号	種類	器種	出土部位	計測値(cm)		外周溝概要		内周溝概要		底面形状	分類	備考	
				口径	底径	高さ	幅	締部	件数	上下手			
14	土器部	甕	下溝上	—	—	8.0	—	堅底	—	—	堅底	A	
15	須恵器	壺	109号溝上	(14.0)	5.0	(5.0)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	b	P-51内側カヌス基 ハラ記号「ノ」
16	須恵器	壺	109号溝上	(12.2)	5.0	(5.4)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	b	P-33、34内側カヌス基 ハラ記号「ノ」
17	須恵器	盆形盤	7号溝上	—	—	—	—	ロクロ	ハラナデ	—	—		ハラ記号「TTU」
18	土器部	甕	—	—	—	—	—	ハラナデ	—	—	木葉痕	A	
19	土器部	甕	109号溝上	—	—	—	—	ハラナデ	—	—	砂底	A	
20	土器部	甕	109号溝上	—	—	—	—	ハラナデ	—	—	砂底	A	P-6
21	土器部	甕	109号溝上	—	—	—	—	堅底	堅底	—	—	A	P-2、3
22	土器部	甕	109号溝上	—	—	—	—	ヨコナデ	ハラナデ	—	—	A	
23	土器部	鉢	109号溝上	—	—	—	—	堅底	—	—	—	A	
24	須恵器	短脚壺	109号溝上	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	b	

図23 第103号竪穴住居跡・第109号溝跡出土遺物(2)

## 第104号竪穴住居跡(図25)

[位置] E・F-28・29グリッドに位置している。外周溝(第119号溝跡)を伴う竪穴住居跡である。

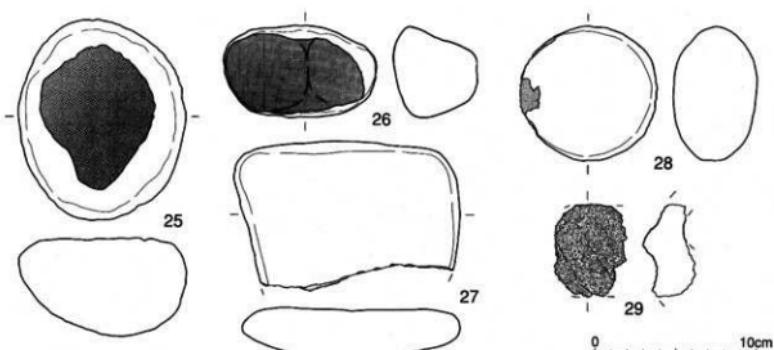
[重複] 竪穴住居跡部分は第105号竪穴住居跡、第116号・第118号土坑と重複し、第116号土坑との新旧関係は不明であるが、そのほかの造構よりは新しい。外周溝(第119号溝跡)は第105号竪穴住居跡、第120号溝跡と重複し、本溝跡が新しい。

[平面形・規模] 東側が削平されているため確認できなかったが、内周溝は南北が4m50cmである。推定される主軸方位はN-23°-Eである。

[壁・床面] 削平されているため西側の壁高は約10cmで、床面は硬く締まっている。

[内周溝] 幅は約12~20cm、深さ約8~18cmで東側を除いて確認された。

[ピット] 検出されなかった。



国版 番号	器種	出土層位	計面積(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
25	磨削器	109号 層土	12.3	10.3	6.0	858	安山岩	
26	磨削器	109号 層土	9.4	5.7	5.1	330	安山岩	S-4
27	台石	109号 層土	(9.1)	13.7	2.9	(632)	安山岩	被熱痕
28	磨削器	109号 層土	8.5	8.3	5.1	437	燧灰岩	被熱痕

国版 番号	器種	出土層位	計面積(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
29	羽口	102号 粘土	(3.8)	不明	不明	(67)	不明	伊賀瓦端部

図24 第103号竪穴住居跡・第109号溝跡出土遺物(3)

[カマド]検出されなかった。

[堆積土]黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝]南側のG-29グリッドから北側のE-28グリッドにかけて竪穴住居跡を囲むように検出された。竪穴住居跡からは、1m50cm~2m離れている。溝の幅は30cm~1m20cm、深さ7~42cmである。溝底面のレベルは西側から東側に向かって低くなっている。

[出土遺物]土師器や須恵器の破片とともに礫が出土している。また、外周溝から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は、1220±40である。

[時期]出土遺物から、10世紀前半と考えられる。

#### 第105号竪穴住居跡（図26）

[位置]E・F-29グリッドに位置している。外周溝（第120号溝跡）を伴う竪穴住居跡である。

[重複]竪穴住居跡部分は第104号竪穴住居跡、第119号溝跡と重複し、本住居跡が古い。外周溝（第120号溝跡）は、第118号土坑、第119号溝跡と重複し、いずれの遺構より古い。

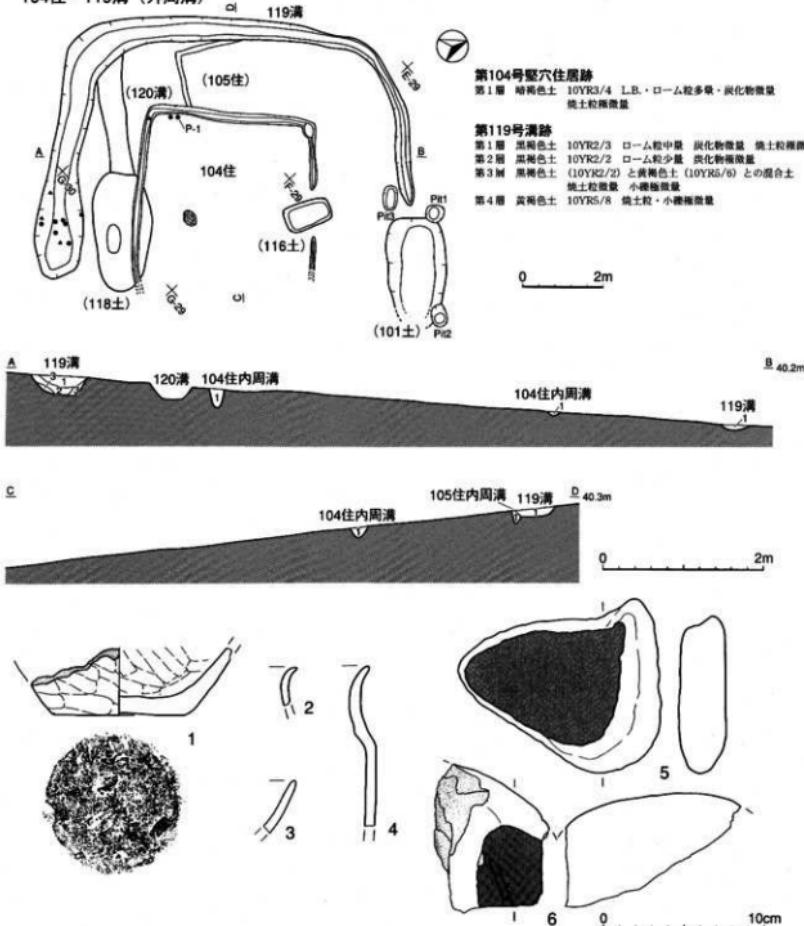
[平面形・規模]削平及び重複のため不明である。推定される主軸方位はN-0°-Eである。

[壁・床面]検出されなかった。

[内周溝]幅約15~20cm、深さ約5~10cmで、南西側のみ確認できた。

[ピット]検出されなかった。

104住・119溝(外周溝)



団体 番号	器種	器種	出土層位	計面積(cm)			外表面形態			内表面形態			底面調整	分類	備考	
				口径	器高	底径	口縁部	体部上半	底部下半	口縁部	体部上半	底部下半				
1	土器部	甕	104住 壁上	—	—	8.4	—	—	ハラナデ	—	—	ハラナデ	ナツツケ	A	P-1	
2	土器部	甕	104住 壁土	—	—	—	唐城	—	—	唐城	—	—	—	—	A	内面口縁部に スヌ状炭化物付着
3	土器部	甕	104住 壁土	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	—	—	B II	P-5
4	土器部	甕	104住 壁土	—	—	—	ヨコナデ	ハラナデ	—	ヨコナデ	ハラナデ	—	—	—	A	P-4
団体 番号	器種	器種	出土層位	計面積(cm)			重量(g)			備考						
				表さ	幅さ	厚さ	重量(g)	石質	—	備考						
5	磁器部	104住 壁上	—	12.6	10.1	2.9	497	泥紋岩	S-2	—			—			
6	磁石	120溝 床底	(7.0)	(9.0)	(10.1)	(677)	泥紋岩	S-2	—			—				

図25 第104号竪穴住居跡・第119号溝跡

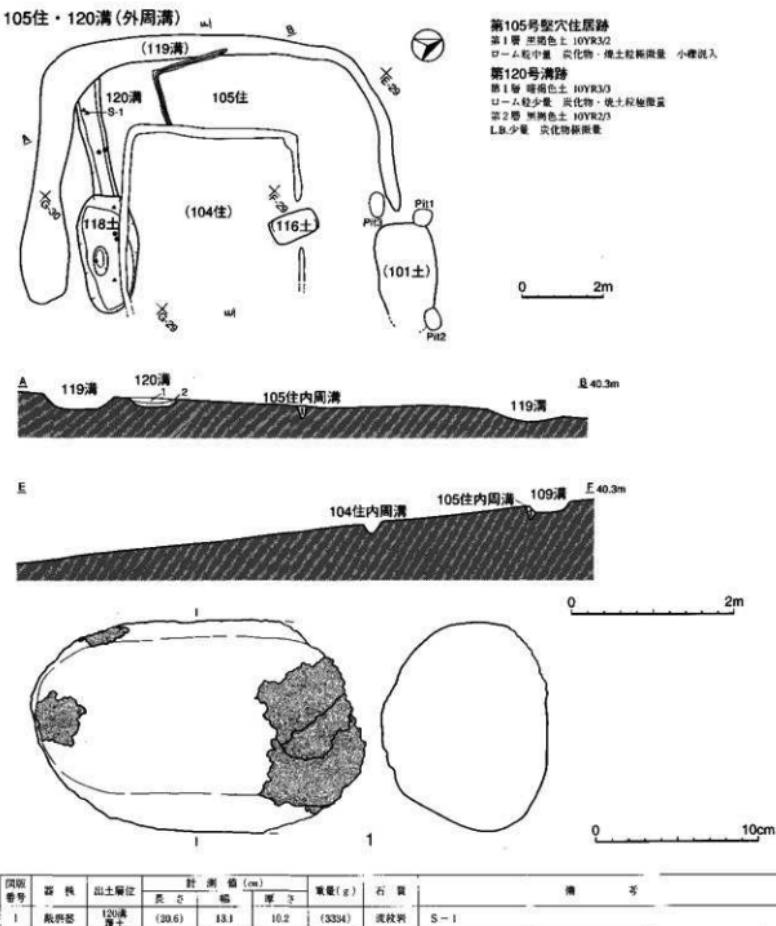


図26 第105号竪穴住居跡・第120号溝跡

[カマド]検出されなかった。

[堆積土]内周溝の黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝]F-29・30グリッドの竪穴住居跡の南側に1m50cm離れて検出した。溝の幅は約50cm、深さ15~17cmである。溝底面のレベルは西から東に向かって低くなっている。

[出土遺物]外周溝から土師器の破片と礫が出土している。

[時期]遺構の重複関係から、10世紀前半以降と考えられる。

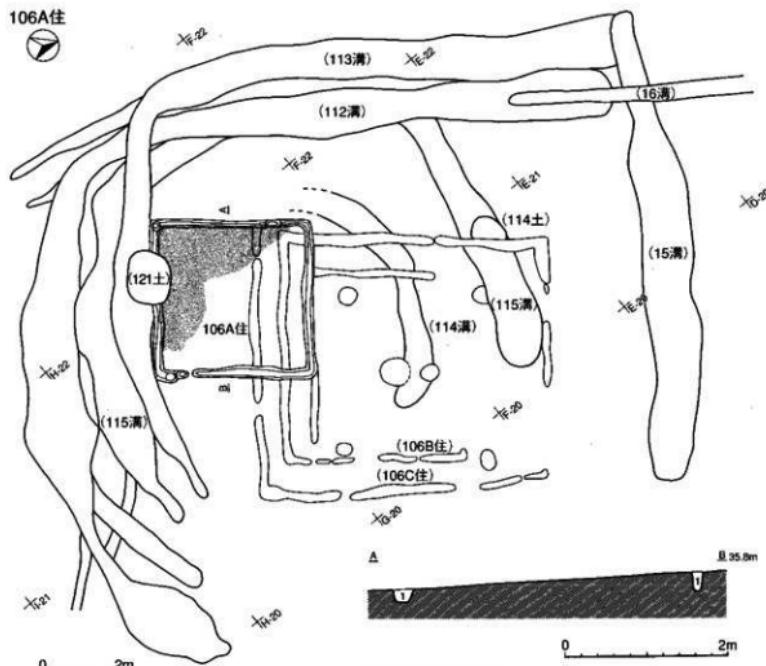


図27 第106号A堅穴住居跡

## 第106号A堅穴住居跡(図27)

[位置]F・G-21・22グリッドに位置している。

[重複]第106号B・第106号A堅穴住居跡、第121号土坑と重複し、堅穴住居跡より新しく、土坑より古い。

[平面形・規模]上面が削平されているが、内周溝から東西約3m80cm、南北3m90cmのほぼ方形で、床面積は約15.6m<sup>2</sup>と推定される。主軸方位はN-13°-Eである。

[壁・床面]削平がされているため壁は確認できなかった。確認された床面の一部は硬く縮まっている。

[内周溝]幅は約15~25cm、深さ約12~28cmではほぼ一巡する。

[ピット]検出されなかった。

[カマド]検出されなかった。

[堆積土]内周溝の黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝]伴うと考えられる外周溝は確認できなかった。

[出土遺物]床面から土師器の破片が出土している。

[時期] 遺構の重複関係から、10世紀前半と考えられる。

#### 第106号B竪穴住居跡（図28～30）

[位置] E～G-20・21グリッドに位置している。外周溝（第113号溝跡）を伴う竪穴住居跡である。

[重複] 竪穴住居跡部分は第106号A竪穴住居跡、第114号土坑、第114号・第115号溝跡と重複し、第106号竪穴住居跡より古く、その他の遺構より新しい。外周溝（第113号溝跡）は第121号土坑、第15号・第112号・第115号溝跡と重複し、第121号土坑と第15号溝跡より古く、その他の遺構より新しい。

[平面形・規模] 上面が削平されているが、内周溝から東西約5m60cm、南北6m60cmの南北に長い長方形で、床面積は約36.9m<sup>2</sup>と推定される。主軸方位はN-14°-Eである。

[壁・床面] 削平されているため、確認できなかった。

[内周溝] 幅は約20～30cm、深さ約12～18cmで北東隅を除いてほぼ一巡する。また、南側と西側に幅約15～25cm、深さ約5～15cmの周溝が確認され、重複する住居跡の可能性が考えられる。

[ピット] 住居跡内からいくつかのピットを検出したが、ピット1～4が主柱穴と思われる。

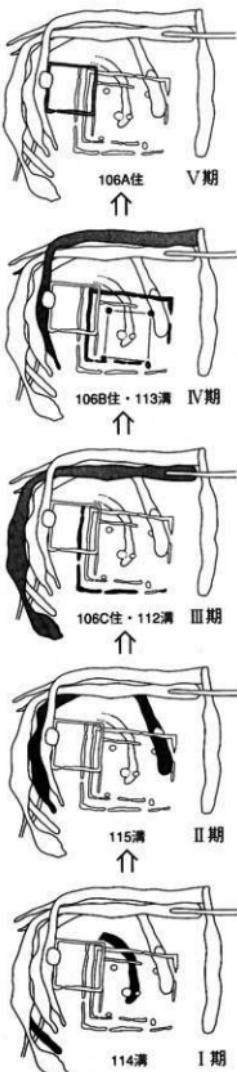
[カマド] 検出されなかった。

[堆積土] 内周溝の黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝] 南側のG-20グリッドから北側のD-21グリッドにかけて竪穴住居跡を南西側を囲むように検出された。竪穴住居跡からは、3m～3m80cmほど離れており、溝の幅は50cm～1m20cm、深さ15～56cmである。溝底面の堆積土には砂粒がみられ、レベルは西から東、南から北に向かって低くなっている。平成10年度に調査した第15号溝跡とつながる可能性が考えられる。

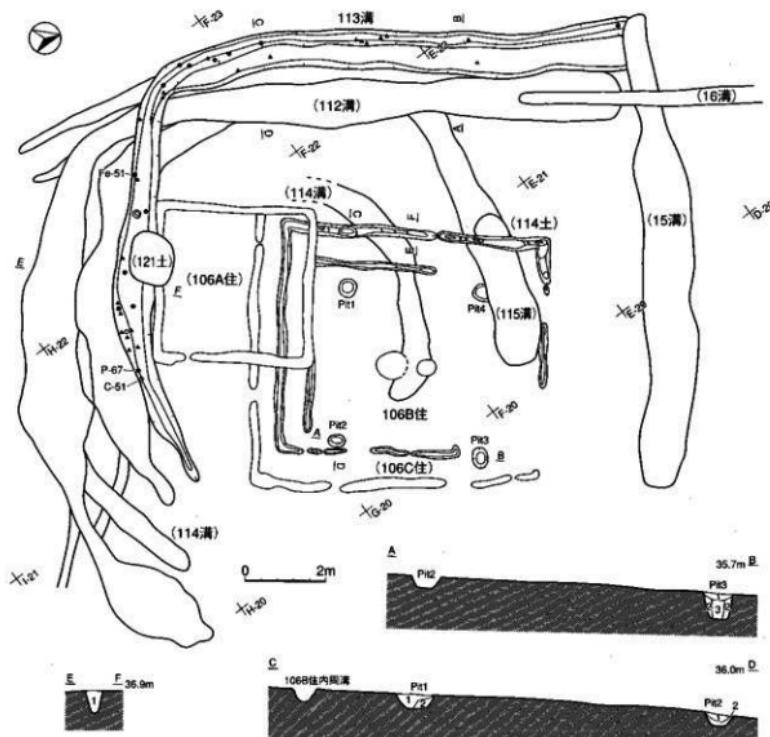
[出土遺物] 外周溝から土師器や須恵器の破片及び礎、羽口の破片、鉄滓が出土している。

[時期] 遺構の重複関係と出土遺物から、10世紀初頭と考えられる。



外周溝と内周溝との関係

## 106B住・113溝(外周溝)



## 第106号B竪穴住居跡

第1層 咸褐色土 10YR3/3 ローム粒・炭化物・施土粒少量

## Pt1

第1層 咸褐色土 10YR3/4 ローム粒・炭化物・施土粒微量  
第2層 咸褐色土 10YR5/6 粘土質土

## Pt2

第1層 咸褐色土 10YR3/4 ローム粒・炭化物・施土粒微量  
第2層 黄褐色土 10YR5/6 粘土質土

## Pt3

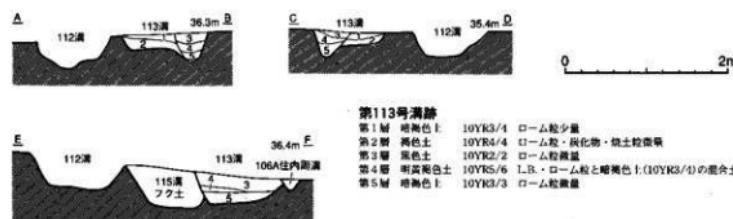
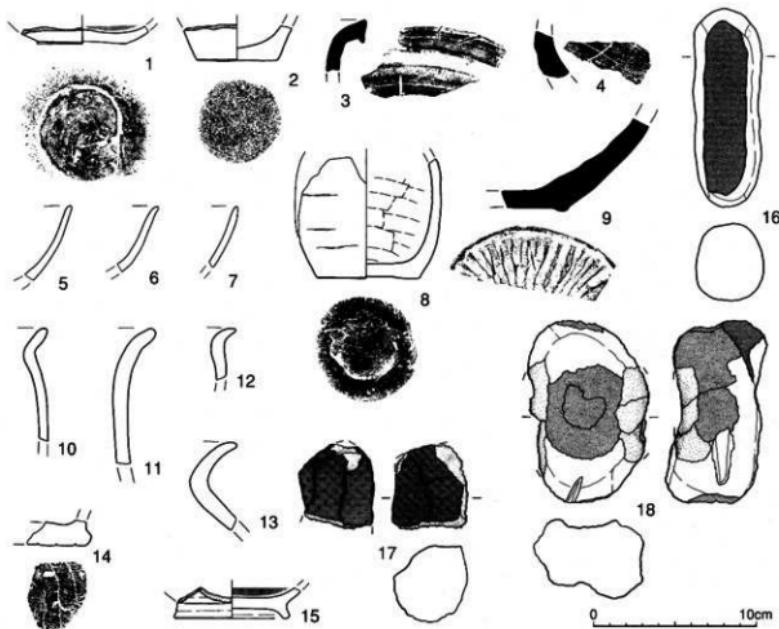
第1層 咸褐色土 10YR3/4 ローム粒・炭化物・施土粒微量  
第2層 黄褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 L.B.混入  
第3層 咸褐色土 10YR2/3 ローム粒・炭化物・施土粒微量

図28 第106号B竪穴住居跡・第113号溝跡

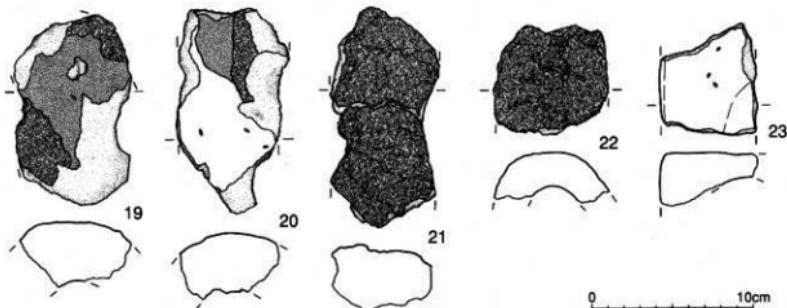


測定 番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			外観調査		内観調査		底面調整	分類	備考		
				口径	體高	底径	口縫部	体部上半	体部下半	口縫部	体部上半				
1	土器器	壺	118溝 壁上	—	—	5.4	—	—	磨滅	—	—	—	B II	内面黒色処理	
2	土器器	壺	118溝 壁上	—	—	5.0	—	—	磨滅	—	—	磨滅	磨耗	A	
3	須恵器	中壺	106住 壁土	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	—	b	ヘラ記号「/」
4	須恵器	大壺	113溝 壁上	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ヘラナダ	—	—	—	ヘラ記号「X」
5	土器器	壺	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	D II	内面黒色処理
6	土器器	壺	106住 壁土	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	B I	内面黒色処理
7	土器器	壺	106住 壁土	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	—	B II	
8	土器器	鉢	113溝 壁上	—	—	6.2	—	—	磨滅	—	—	ヘラナダ	ナツケ	A	
9	須恵器	壺	113溝 壁上	—	—	—	—	—	ヘラナダ	—	—	ロクロ	菊花文	b	
10	土器器	壺	113溝 壁土	—	—	—	ヨコナダ	ヘラナダ	—	ヨコナダ	ヘラナダ	—	—	A	
11	土器器	壺	113溝 壁土	—	—	—	ヘラナダ	—	—	ヘラナダ	—	—	—	A	
12	土器器	壺	106住 壁土	—	—	—	磨滅	—	—	磨滅	—	—	—	A	内面白地板 スヌ状模様化付着
13	土器器	壺	113溝 壁土	—	—	—	ロクロ	—	—	ヘラナダ	—	—	—	A	P-67
14	土器器	壺	113溝 壁土	—	—	—	—	—	—	ヘラナダ	—	—	—	A	
15	土器器	高台付壺	106住 壁土	—	—	7.0	—	—	ロクロ	—	—	ヘラナダ	新井番号	D II c	内面黒色処理

測定 番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	外観調査			分類	備考
			長さ	幅さ	厚さ			底面	側面	側面		
16	鐵鋤器	106住 壁土	12.2	4.1	4.8	324	安山岩	—	—	—	—	—
17	石臼	113溝 (5.0)	—	(4.6)	(4.6)	(84)	多孔質 安山岩	—	—	—	—	—
18	熊摺器	113溝 壁土	11.2	(7.2)	(4.9)	(316)	多孔質 安山岩	—	—	—	—	—

図29 第106号B竪穴住居跡・第113号溝跡出土遺物(1)



回収番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	調査	備考
			長さ	幅	厚さ			
19	羽口	113号溝上	(11.5)	(7.2)	(4.0)	(242.0)	不明	横直
20	羽口	113号溝上	(12.3)	(6.8)	(3.7)	(268.0)	不明	Pb-51標準
21	羽口	113号溝土	(18.4)	(6.3)	(4.1)	(223.0)	不明	
22	羽口	113号溝土	(6.5)	(7.1)	(2.6)	(117.0)	不明	C-51炉側先端部
23	羽口	113号溝上	(6.8)	(5.9)	(3.2)	(106.0)	ナデ	苗頭圧痕、斜直

図30 第106号B竪穴住居跡・第113号溝跡出土遺物(2)

## 第106号C竪穴住居跡(図31・32)

[位置] E～G-19～21グリッドに位置している。外周溝(第112号溝跡)を伴う竪穴住居跡である。

[重複] 竪穴住居跡部分は第106号A竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。外周溝(第112号溝跡)は第16号・第113号・第114号溝跡と重複し、第16号・第113号溝跡より古く、その他の溝跡より新しい。

[平面形・規模] 上部が削平されているため平面形・規模ともに不明である。確認された内周溝より推定される主軸方位はN-11°～Eである。

[壁・床面] 削平されているため、確認できなかった。

[内周溝] 幅は約20～30cm、深さ約6～16cmで西側と南側のみ確認された。

[ビット] 住居跡内からいくつかのビットを検出したが、伴うものかは不明である。

[カマド] 検出されなかった。

[堆積土] 内周溝の黒褐色土のみ確認できた。

[外周溝] 南側のH-20グリッドから北側のD-21グリッドにかけて竪穴住居跡を南北側を囲むように検出された。竪穴住居跡からは、2m～4mほど離れており、溝の幅は40cm～1m80cm、深さ12～46cmである。溝底面の堆積土には砂粒がみられ、レベルは西から東、南から北に向かって低くなっている。平成10年度に調査した第15号溝跡とつながる可能性が考えられる。

[出土遺物] 外周溝から土師器や須恵器の破片及び礫、羽口の破片、鉄滓が出土している。

[時期] 遺構の重複関係と出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

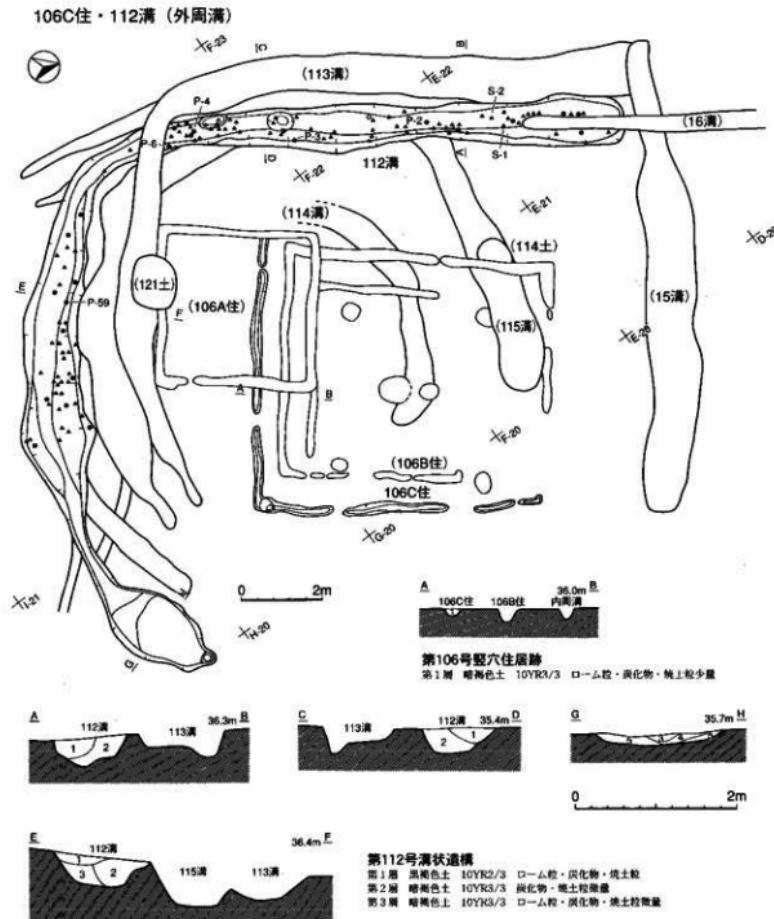
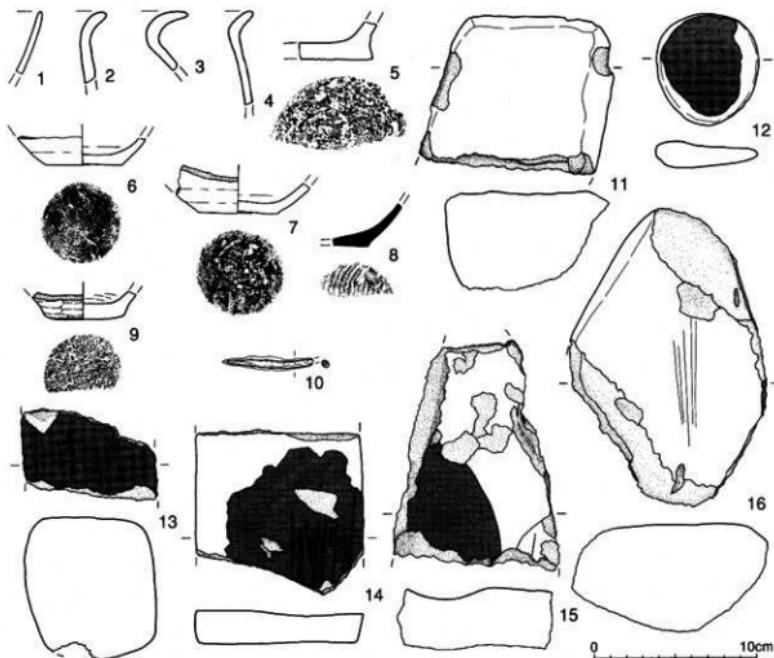


図31 第106号C竪穴住居跡・第112号溝跡



図版番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			外 围 墓 墓		内 围 墓 墓		底面調整	分類	備考	
				口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半		
1	土師器	壺	112号溝 覆土	-	-	-	17.12	ロクロ	-	ロクロ	ロクロ	-	B II	
2	土師器	壺	112号 覆土	-	-	-	ヨコナデ ハラタズリ	-	ヨコナデ ヘラナデ	-	-	-	A	
3	土師器	壺	112号 覆土	-	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ	-	-	-	A	P-4
4	土師器	壺	112号 覆土	-	-	-	ヨコナデ ハラナデ	-	ヨコナデ ヘラナデ	-	-	-	A	P-3
5	土師器	壺	112号 覆土	-	-	-	-	磨滅	-	磨滅	砂粒	A	P-59	
6	土師器	壺	112号 覆土	-	-	-	4.7	-	(ヨコロ)	-	磨滅 (ヨコロ)	B II	P-2	
7	土師器	壺	112号 覆土	-	-	5.0	-	-	(ヨコロ)	-	磨滅 (ヨコロ)	B II	P-6	
8	須磨器	壺	112号 覆土	-	-	-	-	ロクロ	-	ロクロ	目詰等	-	火ダスク痕	
9	土師器	壺?	112号 覆土	-	-	4.8	-	-	ヘラナデ	-	ヘラナデ	砂粒	-	

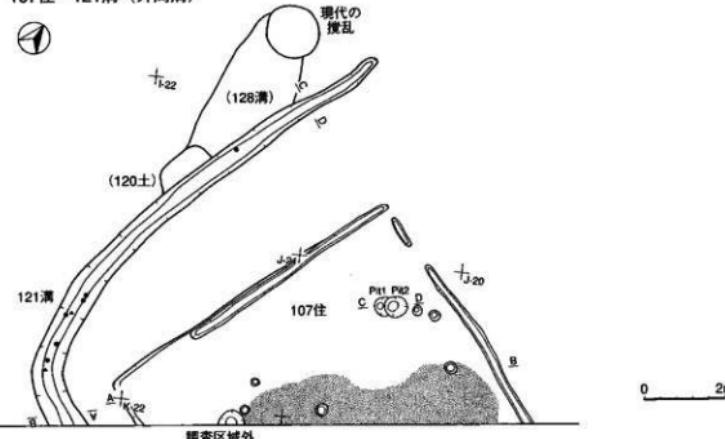
図版番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
10	鉄製品	棒状	112号 覆土	(5.6)	0.7	0.6	(3.1)	

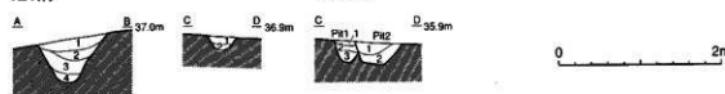
図版番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
11	石器		112号 覆土	(9.5)	11.0	(6.0)	(905)	砂岩
12	磁器部		112号 覆土	6.9	6.3	1.6	95	泥岩 被熱板
13	磁器部		112号 覆土	(5.5)	2.9	(6.8)	(358)	泥灰岩 S-2
14	磁石		112号 覆土	(9.9)	10.4	2.0	(432)	安山岩 被熱板
15	石器		112号 覆土	(13.7)	(10.1)	(3.6)	(645)	凝灰岩
16	台石		112号 覆土	(18.1)	(12.0)	(6.6)	(1458.0)	安山岩 S-1

図32 第106号C竪穴住居跡・第112号溝跡出土遺物

## 107住・121溝（外周溝）



## 121溝



## 第107号竪穴住居跡

第1層 黄褐色土 10YR4/6 ローム粒少量 硫化物・塗土粒微量 L.B.混入  
第2層 帽褐色土 10YR3/4 ローム粒少量 L.B.混入  
第3層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒中量 硫化物・塗土粒微量 L.B.混入  
第4層 褐色土 10YR4/4 ローム粒 L.B.混入 帽褐色土(10YR3/3)混入  
(内周溝)

## 第121号溝跡

第1層 深褐色土 10YR4/6 L.B.・ローム粒・硫化物微量  
第2層 褐色土 10YR4/4 ローム粒・硫化物・塗土粒微量  
第3層 帽褐色土 10YR3/4 ローム粒微量  
第4層 帽褐色土 10YR3/3 塗土質上

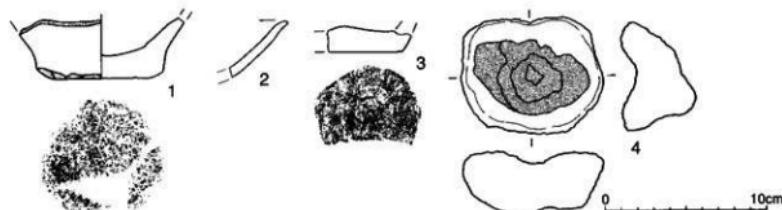
## Pit1

第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒・硫化物微量  
第2層 帽褐色土 10YR3/4 ローム粒微量  
第3層 棕褐色土 10YR4/5 ローム粒微量

## Pit2

第1層 帽褐色土 10YR3/4 ローム粒・硫化物微量  
第2層 黑褐色土 10YR2/3 ローム粒微量

図33 第107号竪穴住居跡・第121号溝跡



因縁 番号	種類	基盤	出土層位	計測値(cm)			外周溝調査			内周溝調査			底面調整	分類	備考
				口径	壁厚	底深	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
1	土器器	甕	107住 復元	-	-	7.7	-	-	-	表層 削減	-	-	削減	甕底	A
2	土器器	坪(眞)	107住 復元	-	-	-	口クロ	口クロ	-	ロクロ	ロクロ	-	-	-	BII
3	土器器	甕	107住 復元	-	-	-	-	-	-	削減	-	-	削減	ナゲツケ	A
4	蔽體器	121床 復元	7.3	8.7	4.2	196	多孔質 安山岩								

図34 第107号竪穴住居跡・第121号溝跡出土遺物

## 第107号竪穴住居跡（図33・34）

[位置] I-J-19-21グリッドに位置している。外周溝（第121号溝跡）を伴う竪穴住居跡である。

[重複] 南側は調査区域外のため不明だが、外周溝（第121号溝跡）は第121号土坑、第128号溝跡と重複し、いずれの遺構より新しい。

[平面形・規模] 南側が確認できなかったが、南北は約8mである。推定される主軸方位はN-24°-Eである。

[壁・床面] 東側は削平されているが、調査した南東隅の壁高は40cmほどあり、やや急に立ち上がっていいる。床面の一部が硬く締まっていた。

[内周溝] 幅約20~30cm、深さ約5~18cmで西側と北側に検出した。

[ピット] 住居跡内からいくつかのピットを検出したが、柱穴と思われるピットは検出されなかった  
[カマド] 検出されなかった。

[堆積土] 3層に分層され、第1層と第3層に炭化物と焼土粒が含まれている。

[外周溝] 西側のH-20グリッドから南側のK-22グリッドにかけて竪穴住居跡を閉むように検出された。竪穴住居跡から、1m~3m 50cm離れており、溝の幅は30~70cm、深さ10~68cmである。溝底面の堆積土には砂粒がみられ、レベルは南から北に向かって低くなっている。

[出土遺物] 竪穴住居跡及び外周溝から土師器や須恵器の破片、礫が出土している。

[時期] 出土遺物から、9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

## 2 土坑（含井戸跡・焼成遺構）

### 第101号土坑(図35)

[位置]E・F-27グリッドに位置している。

[形態・規模]東側が削平されており、短軸1m40cmの不整梢円形で、深さは約20cmである。

[堆積土]2層に分層され、炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物]覆土から礫が出土している。

### 第102号（焼成遺構）土坑(図35・39・41)

[位置]D-27・28グリッドに位置している。

[形態・規模]北側が削平されており、直径1m50cmの不整円形で、深さは約20cmである。

[堆積土]3層に分層され、炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物]覆土から土師器や羽口の破片が出土している。

### 第103号（井戸跡）土坑(図35)

[位置]C-26グリッドに位置している。

[形態・規模]直径1m20cmのはば円形で、深さは約1m30cmである。壁は急に立ち上がる。

[堆積土]5層に分層され、第1層に炭化物と焼土粒が含まれる。

[出土遺物]覆土から土師器の破片が出土している。

### 第104号（焼成遺構）土坑(図35)

[位置]E-26グリッドに位置している。

[形態・規模]長軸75cm、短軸60cmの長方形で、深さは約10cmである。

[堆積土]2層に分層され、第2層に多量の炭化物を含んでいる。

[出土遺物]遺物は出土しなかったが、炭化材の放射性年代測定の結果では $1150 \pm 40$ である。

### 第105号（井戸跡）土坑(図36・39)

[位置]H-15・16グリッドに位置している。第104号溝跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模]開口部は長軸1m80cm、短軸1m40cmの梢円形で、深さは2m15cmである。底部に近づくにつれて狭くなり、坑底部では直径約60cmの円形である。壁はやや急に立ち上がる。

[堆積土]5層に分層でき、第1層と第2層に炭化物と焼土粒が含まれる。

[出土遺物]覆土から土師器の破片が出土している。

### 第106号土坑(図36・39)

[位置]G-18グリッドに位置している。

[形態・規模]長軸95cm、短軸80cmの梢円形で、深さは約25cmである。

[堆積土]2層に分層され、第1層に炭化物・焼土粒を含んでいる。

[出土遺物]覆土から土師器の破片と礫が出土している。

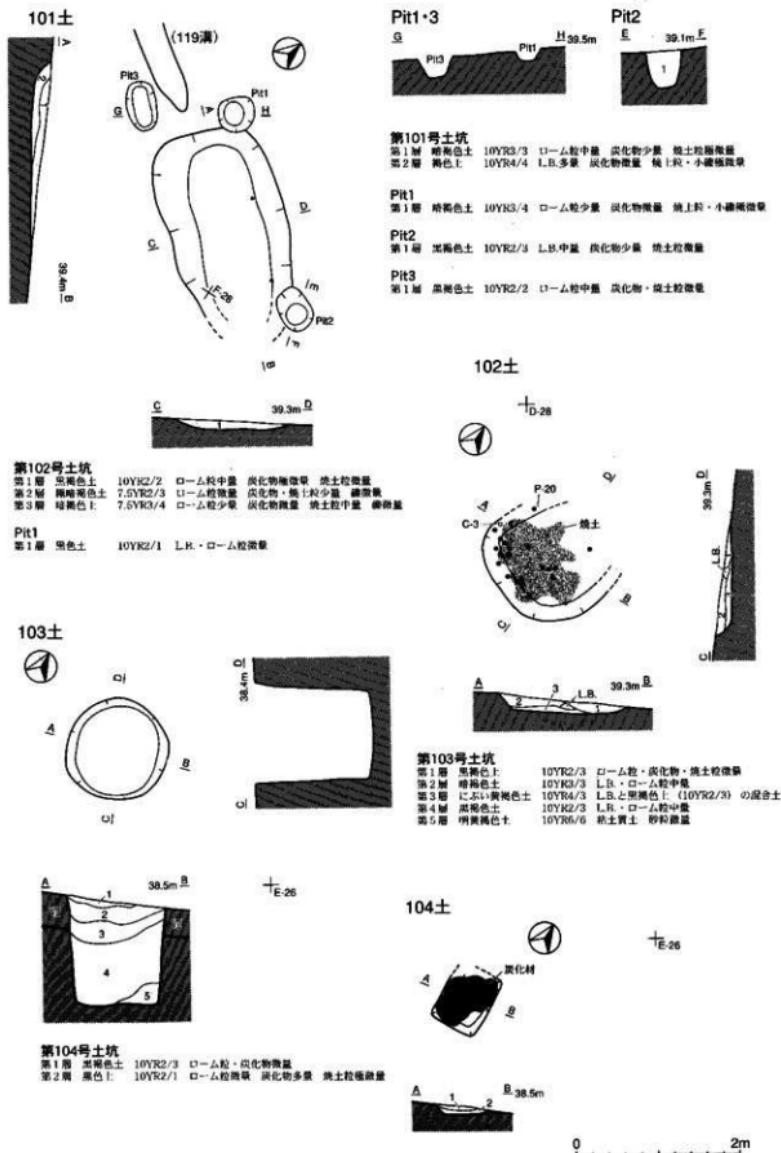


図35 第101号～第104号土坑

**第107号土坑(図36)**

[位置] G・H-17グリッドに位置している。

[形態・規模] 長軸 1m25cm、短軸72cmの楕円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 黒褐色土に炭化物を含んだ層である。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

**第108号(焼成遺構) 土坑(図36)**

[位置] I-15グリッドに位置している。第108号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] 長軸 1m30cm、短軸 1m20cmのほぼ円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 3層に分層され、第1層には炭化材が多く含まれ、第2層が焼土層である。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。また、炭化材の放射性年代測定の結果では1230±40である。

**第109号土坑(図36・39)**

[位置] J-11グリッドに位置している。

[形態・規模] 直径90cmのほぼ円形で、深さは約50cmである。

[堆積土] 3層に分層され、第1層に炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

**第110号土坑(図36)**

[位置] H-18グリッドに位置している。

[形態・規模] 長軸 1m30cm、短軸 1mの楕円形で、深さは20cmである。

[堆積土] 黒褐色土に炭化物と焼土粒を含んだ層である。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

**第111号土坑(図37・40)**

[位置] J-15グリッドに位置している。第116号・第117号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] 長軸 1m70cm、短軸 1mの不整楕円形で、深さは20cmである。

[堆積土] 2層に分層され、第1層に炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片や礫が出土している。

**第112号土坑(図37)**

[位置] G-20グリッドに位置している。

[形態・規模] 長軸 1m60cm、短軸 1m40cmの楕円形で、深さ約30cmである。

[堆積土] 黒褐色土に炭化物と焼土粒を含んだ層である。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片と礫が出土している。

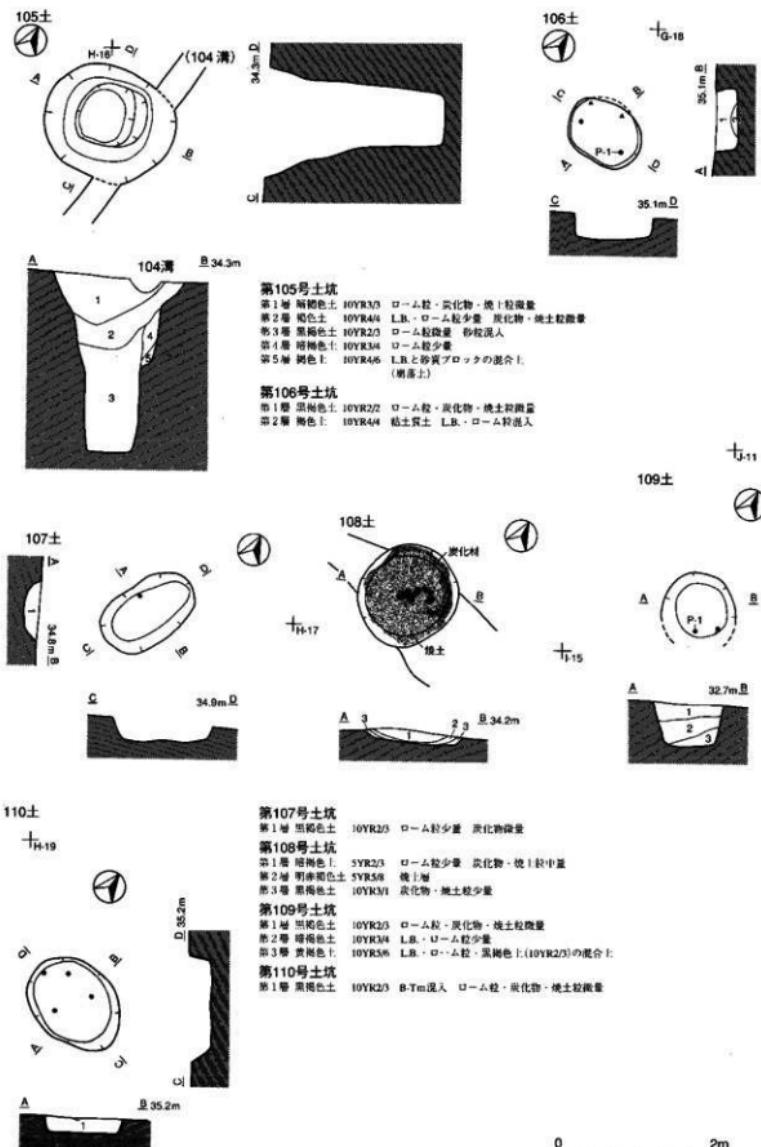


図36 第105号～第110号土坑

**第113号土坑(図37)**

【位置】J-15グリッドに位置している。

【形態・規模】南側が調査区域外にかかるため平面形及び規模は不明である。調査部分の深さは約30cmである。

【堆積土】暗褐色土に炭化物と焼土粒を含んだ層である。

【出土遺物】覆土から土師器の破片と礫が出土している。

**第114号土坑(図37・39・40)**

【位置】E-20グリッドに位置している。第115号溝跡と重複し、本遺構が古い。

【形態・規模】第115号溝跡に上部が削平されているが、長軸1m、短軸70cmの楕円形で、溝跡の底面からの深さは約20cmである。

【堆積土】4層に分層され、第2層から第4層に炭化物や焼土粒が含まれる。

【出土遺物】覆土から土師器の破片や礫が出土している。

**第115号(井戸跡)土坑(図37・39-41)**

【位置】I-19グリッドに位置している。第123号・第127号溝跡と重複し本遺構が新しい。

【形態・規模】開口部は長軸1m55cm、短軸1m30cmの不整円形で、深さは約2mである。底部に近づくにつれて狭くなり、坑底部では長軸85cm、短軸75cmの楕円形である。壁は急に立ち上がる。

【堆積土】6層に分層され、2層上面に白頭山一苦小牧火山灰が堆積している。

【出土遺物】火山灰の下層から土師器の甕、薦幢や板材などのほか砥石や台石、羽口の破片、鉄滓などが出でている。

**第116号土坑(図37)**

【位置】E・F-28グリッドに位置している。第104号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

【形態・規模】長軸1m15cm、短軸65cmの隅九長方形で、深さ約10cmである。

【堆積土】2層に分層され、炭化物や焼土粒を含んでいる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

**第117号土坑**

風倒木痕のため欠番。

**第118号土坑(図38)**

【位置】F・G-29グリッドに位置している。第104号竪穴住居跡、第120号溝跡と重複し、本遺構は第104号竪穴住居跡より古く、第120号溝跡より新しい。

【形態・規模】長軸2m90cm、短軸1m45cmの不整楕円形で、深さは約30cmである。

【堆積土】3層に分層され、第2層と第3層に炭化物・焼土粒を含んでいる。

【出土遺物】覆土から土師器の破片や礫が出土している。

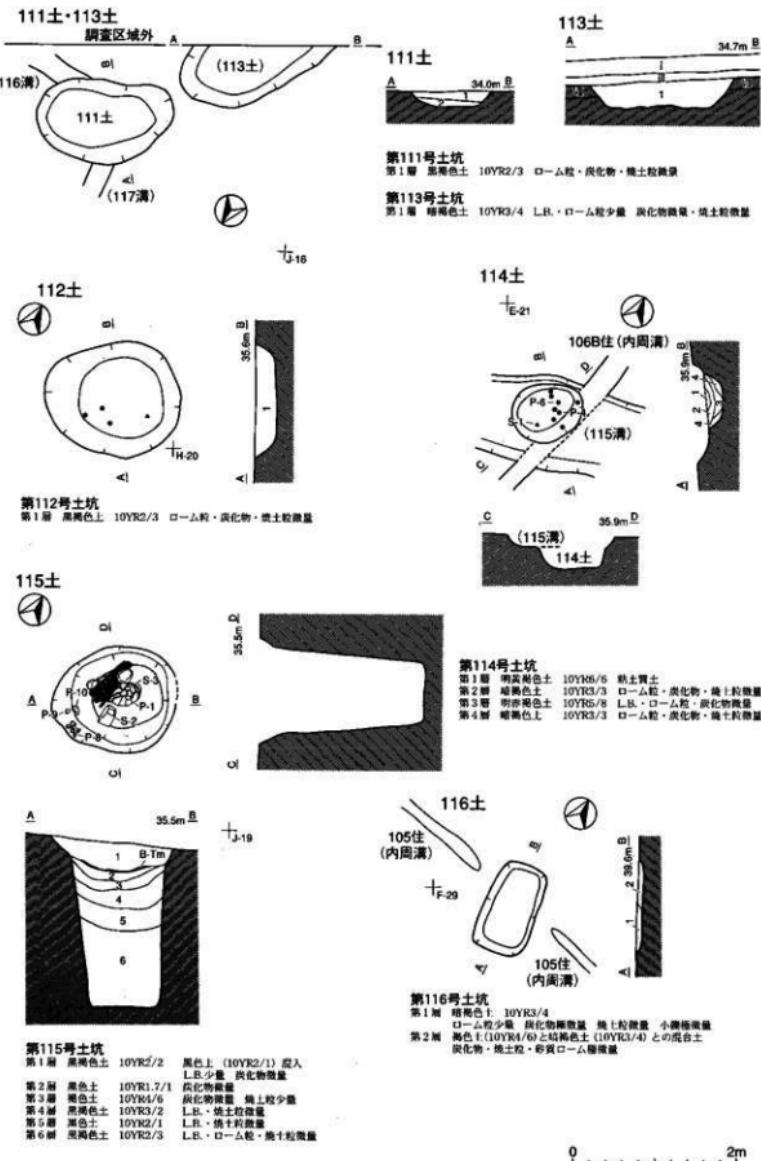


図37 第111号～第116号土坑

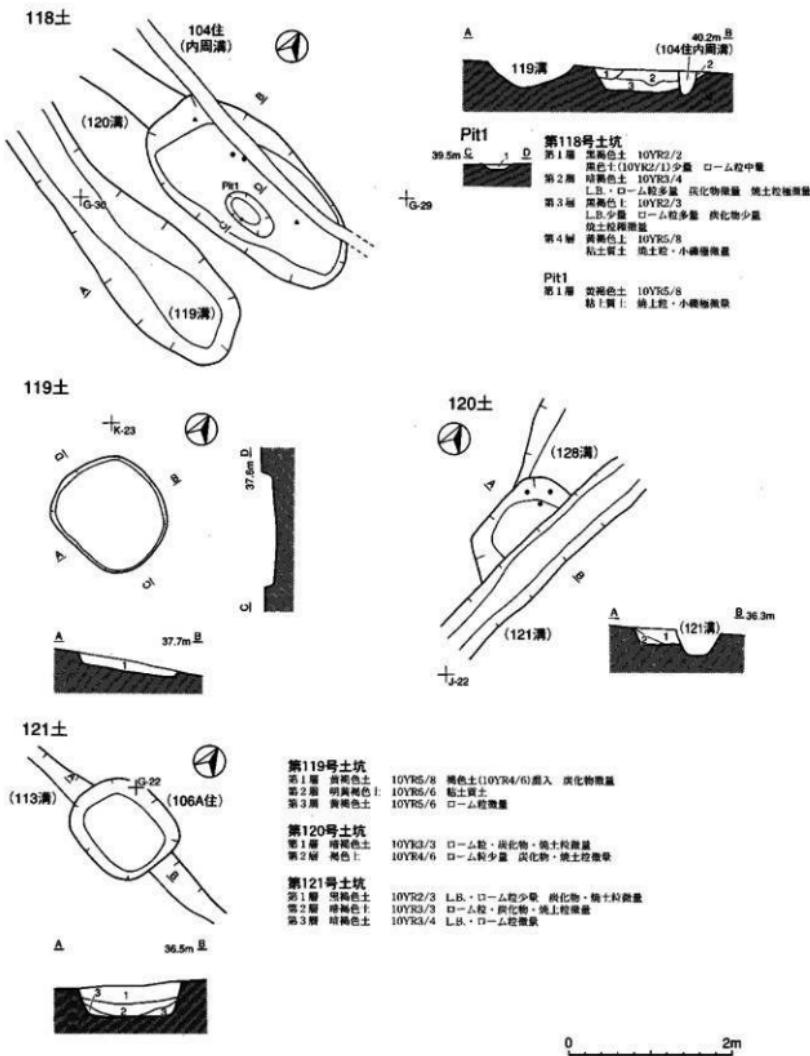
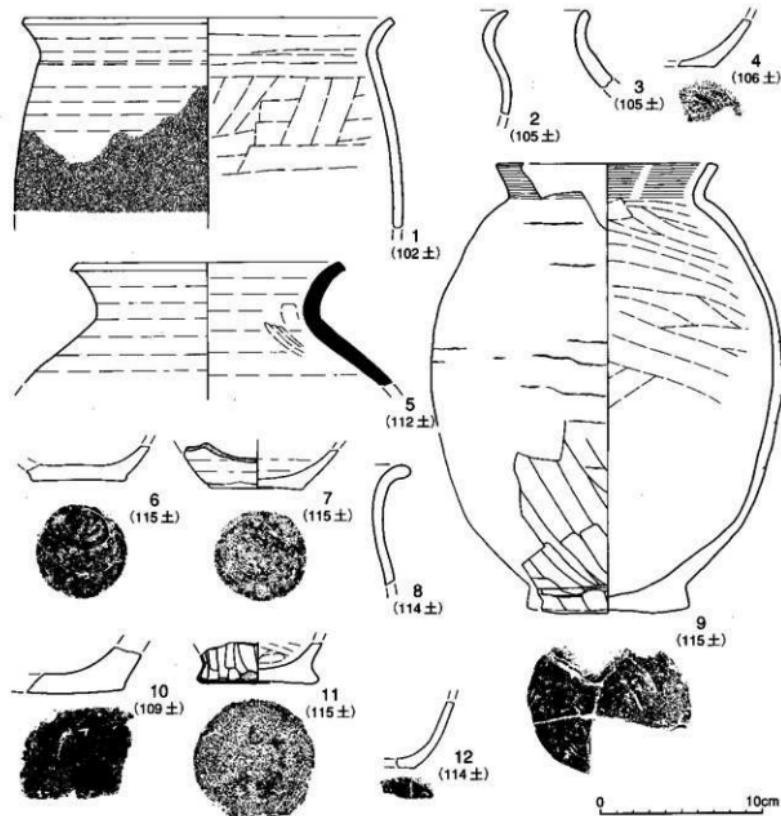


図38 第118号～第121号土坑



図版番号	種類	器種	出土場所	計測値(cm)			外観調査			内面調査			底面調査	分類	備考
				口径	基部高	底径	口縁部	底部下付	口縫部	底部上付	底部下付				
1	土器	甕	105土 覆土	(22.8)	-	-	ロクロ	ロクロ	-	ロクロ	ヘラナギ	-	-	B	P-20 内面毛小付有 内外面滑
2	土器	甕	105土 覆土	-	-	-	ヨコナギ	壺底	-	ヨコナギ	ヘラナギ	-	-	A	
3	土器	甕	105土 覆土	-	-	-	ヨコナギ	-	-	ヨコナギ	-	-	-	A	
4	土器	甕	105土 覆土	-	-	-	-	-	壺底	-	ロクロ	壺底	II B		P-1 内面ス状炭化物
5	須恵器	甕	115土 覆土	(16.0)	-	-	ロクロ	-	ヘラナギ	ヘラナギ	-	-	-	I	
6	土器	甕	115土 B-Tm下	-	-	5.8	-	壺底 (ロクロ)	-	-	(ロクロ)	壺底 (ロクロ)	II B		
7	土器	甕	115土 B-Tm上	-	-	5.6	-	壺底 (ロクロ)	-	-	(ロクロ)	壺底 (ロクロ)	II B		
8	土器	甕	115土 覆土	-	-	-	壺底	-	壺底	-	-	-	A	P-6	
9	土器	甕	115土 B-Tm下	(13.0)	22.8	-	ヨコナギ	壺底	ヘラナギ	ヨコナギ	ヘラナギ	ナシケ	A I b	P-8・9・10	
10	土器	甕	105土 覆土	-	-	-	-	-	壺底	-	-	壺底	A	P-1	
11	土器	甕	115土 B-Tm上	-	-	7.5	-	-	ヘラナギ	-	ヘラナギ	ヘラナギ	A		
12	土器	甕	115土 覆土	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	ヘラナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	B I	P-4 内面毛小付有 内面壺底	

図39 土坑出土遺物(1)

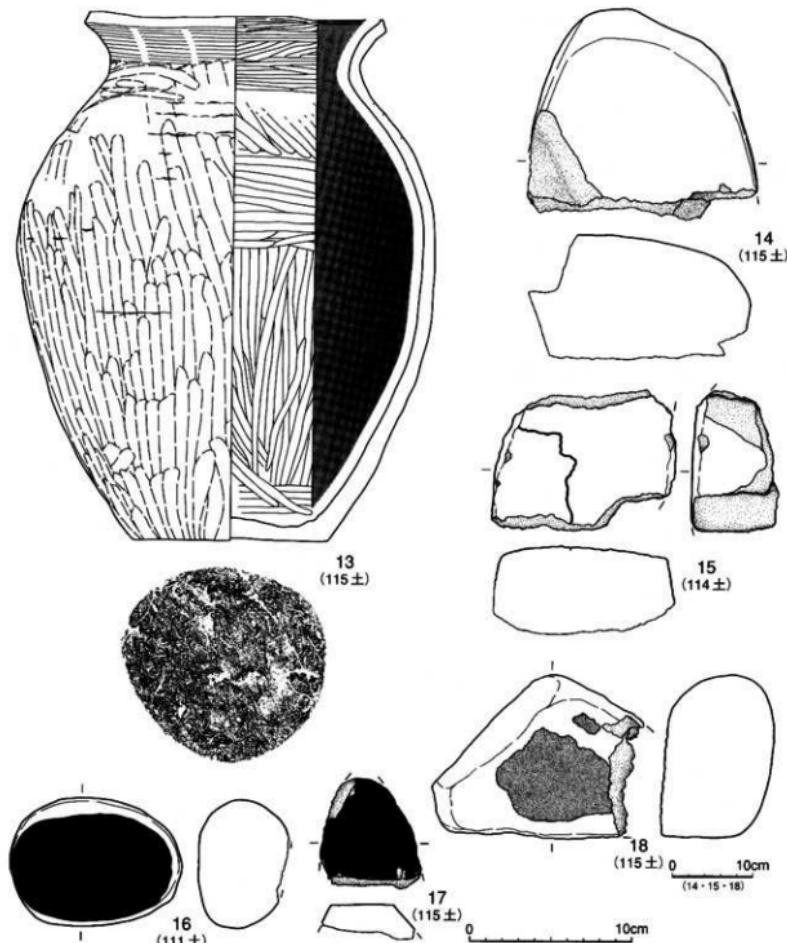
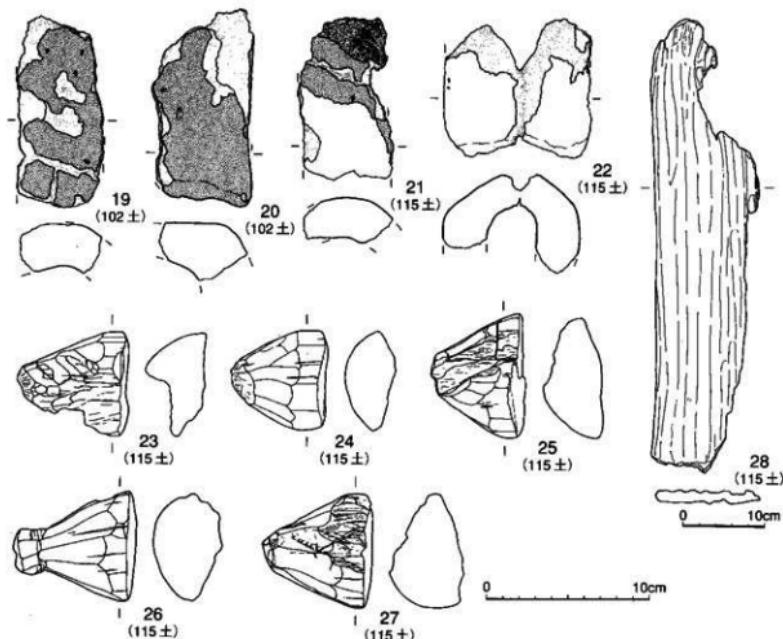


図40 土坑出土遺物(2)

図版 番号	種類	器種	出土層位	計測値(cm)			外面測量			内面測量			底面測量	分類	備考	
				口徑	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半				
13	土器器	壺	115土 B-Tm下	18.1	32.3	12.0	ヨコナメ	ヘラナメ	ヘラナメ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ナデツカ	A I b	P-1 内面黒色処理	
14	石	台石	115土 B-Tm下	(12.3)	(14.3)	(7.5)	(2002)	流紋岩	S-2							
15	石	台石	115土 壁上上面	(16.5)	(22.5)	10.8	(3400)	凝灰岩	S-1							
16	散器器		115土 壁上	10.6	7.9	(5.6)	(495)	凝灰岩								
17	石	砾石	115土 壁上	6.6	(6.0)	(2.0)	(172)	褐灰質泥岩								
18	石	台石	115土 B-Tm下	(230.0)	30.2	13.4	(9400)	安山岩	S-3被熱痕							



国版 名号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
19	鉢	102土 層上	(11.4)	(5.2)	(2.5)	(175.0)	ナデ	C-3斜直
20	鉢	102土 層上	(12.2)	(6.1)	(3.5)	(246.0)	ナデ	C-3吹子側光端部斜直
21	皿	115土 B-TmT	(9.7)	(5.6)	(2.7)	(132.0)	不明	伊衛先端部斜直
22	羽口	115土 B-TmT	(8.6)	(8.9)	(5.2)	(287.0)	ナデ	吹衛先端部斜直

国版 名号	器種	出土層位	計測値(cm)			木取り	樹種	備考
			長さ	幅	厚さ			
23	瓶	115土 B-TmT	(6.7)	(6.4)	(3.6)	丸木	不明	
24	瓶	115土 B-TmT	(5.8)	(6.1)	(3.0)	丸木	不明	
25	瓶	115土 B-TmT	(5.7)	(7.6)	(3.6)	丸木	不明	
26	瓶	115土 B-TmT	(7.5)	(6.7)	(4.2)	丸木	不明	
27	瓶	115土 B-TmT	(6.7)	(7.0)	(4.5)	丸木	不明	
28	瓶	115土 B-TmT	(27.6)	(6.4)	(9.8)	柱	不明	

図41 土坑出土遺物(3)

**第119号土坑(図38)**

[位置] K-22・23グリッドに位置している。

[形態・規模] 長軸 1m40cm、短軸 1m25cm の不整円形で、深さは約15cmである。

[堆積土] 暗褐色土の層に炭化物が含まれている。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第120号土坑(図38)**

[位置] I-21グリッドに位置している。第121号・第128号溝跡と重複し、第121号溝跡より古く第128号溝跡より新しい。

[形態・規模] 第121号溝跡に削半されているため形態及び規模は不明である。

[堆積土] 2層に分層され、炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

**第121号土坑(図38)**

[位置] G-21・22グリッドに位置している。第106号竪穴住居跡、第113号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] 長軸 1m25cm、短軸 1m10cm の隅丸方形で、深さは約40cmである。

[堆積土] 3層に分層され、第1層と第2層に炭化物・焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

**3 溝 跡****第15号溝跡(図42)**

[位置] E-19グリッドからC-21グリッドにかけて位置している。第16号・第113号溝跡と重複し、第16号溝跡より古く、第113号溝跡より新しい。

[形態・規模] 西から東へほぼ直線状に延びている。幅60cm～1m20cm、深さ16～33cmを確認した。溝底面は西から東へ低くなっている。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を主体とし、第1層と第3層に炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片や礫が出土している。

**第16号溝跡(図42)**

[位置] C-21グリッドからD-21グリッドにかけて位置している。第15号・第112号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] 南から北へほぼ直線状に延びている。幅30～45cm、深さ6～22cmを確認した。溝底面は南から北に向かって緩やかに低くなっている。

[堆積土] 黒褐色土の層に炭化物と焼土粒が含まれている。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

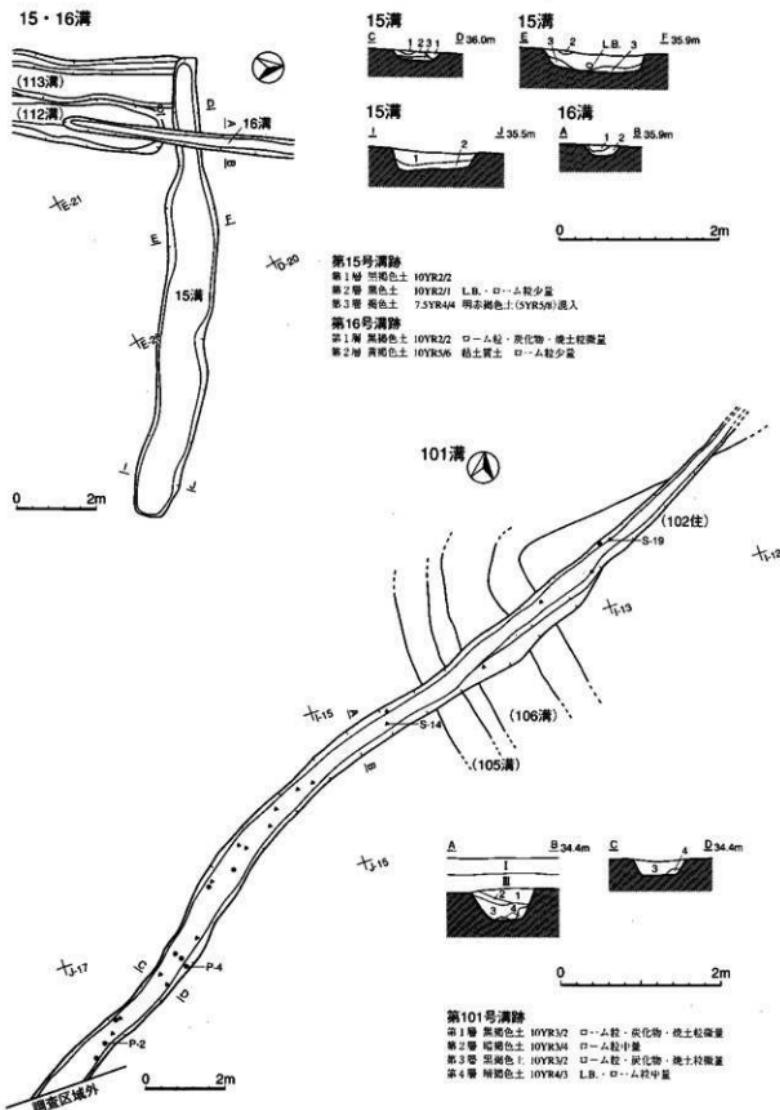


図42 第15号・第16号・第101号溝跡

**第101号溝跡（図42・48・49）**

【位置】H-11グリッドからJ-17グリッドにかけて位置している。第101号・第102号竪穴住居跡、第104号・第105号・第106号・第108号・第111号溝跡と重複し、いずれの遺構より新しい。また平成10年に調査した第2号溝跡とつながる可能性がある。

【形態・規模】南西から北東へほぼ直線状に延びている。幅60cm～1m、深さ20～40cm、長さ24mほど確認した。溝底面は西から東へ低くなっている。

【堆積土】4層に分層できた。暗褐色土を主体とし、第1層と第3層に炭化物と焼土粒を含んでいる。

【出土遺物】覆土から土師器の破片や砥石、礫、鉄滓などが出土している。

**第102号溝跡（図43・48）**

【位置】E-16グリッドからG-18グリッドにかけて位置している。第11号・第103号溝と重複し、第1号溝より古く、第103号溝より新しい。

【形態・規模】西側が膨らむ弧状で、幅30～50cm、深さ10～15cm、長さ約6mを確認した。溝底面は西から東に向かって緩やかに低くなっている。

【堆積土】黒褐色土の層に炭化物と焼土粒が含まれている。

【出土遺物】覆土から土師器の破片、鉄滓が出土している。

**第103号溝跡（図43）**

【位置】F-16グリッドからF-18グリッドにかけて位置している。第102号溝跡と重複し、本遺構が古い。

【形態・規模】西から東にはほぼ直線状に延びている。幅30～40cm、深さ10～15cm、長さ約6mを確認した。溝底面は西から東へ低くなっている。

【堆積土】黒褐色土の層が堆積する。

【出土遺物】覆土から土師器の破片が出土している。

**第104号溝跡（図43）**

【位置】G-15グリッドからI-16グリッドにかけて位置している。第105号土坑、第108号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

【形態・規模】南から北に向かってほぼ直線状に延びている。幅約40cm、深さ約10cm、長さ約8m50cmを確認した。溝底面は南から北へ低くなっている。

【堆積土】2層に分層され、黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】覆土中から土師器の破片が出土している。

**第105号溝跡**

第102号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。本溝跡は平成10年度に調査した第9号溝跡とつながっている。

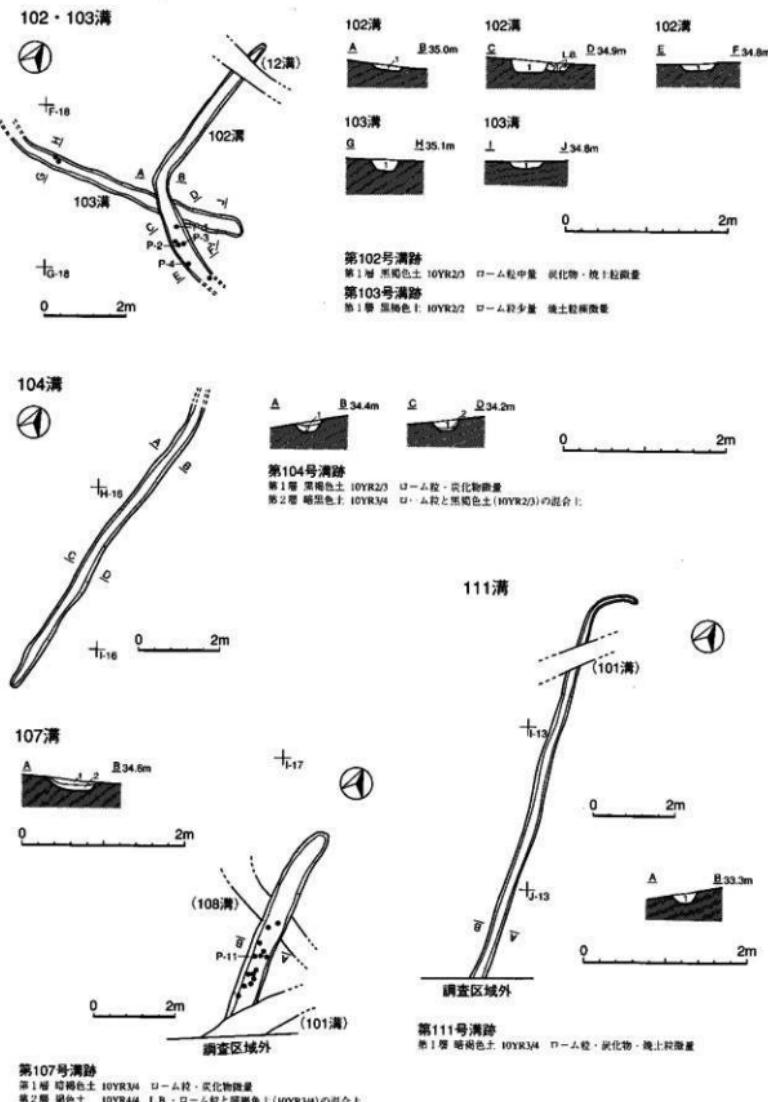


図43 第102号～第104号・第107号・第111号溝跡

**第106号溝跡**

第102号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。本溝跡は平成10年度に調査した第10号溝跡、平成11年度に調査した第109号溝跡とつながっている。

**第107号溝跡（図43・48）**

[位置] I-16グリッドから J-17グリッドにかけて位置している。第101号・第108号溝跡と重複し、本遺構は第101号溝跡より古く、第108号溝跡より新しい。

[形態・規模] 南から北にはば直線状に延びている。幅約60cm、深さ約20cm、長さ約5mを確認した。溝底面は南から北へ低くなっている。

[堆積土] 2層に分層され、暗褐色土を主体として堆積している。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片が出土している。

**第108号溝跡**

第101号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。

**第109号溝跡**

第103号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。本溝跡は平成10年度に調査した第10号溝跡、平成11年度に調査した第106号溝跡とつながっている。

**第110号溝跡**

第102号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。本溝跡は平成10年度に調査した第7号溝跡とつながっている。

**第111号溝跡（図43）**

[位置] H-12グリッドから J-13グリッドにかけて位置している。第102号竪穴住居跡、第101号・第106号溝跡と重複し、本遺構は第101号溝跡より古く、その他の遺構より新しい。

[形態・規模] 南から北にはば直線状に延び、先端で東側に曲がっている。幅30~40cm、深さ約10cm、長さ約10mを確認した。溝底面は南から北へ低くなっている。

[堆積土] 暗褐色土に炭化物と焼土粒を含んだ層である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第112号溝跡**

第106号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。

**第113号溝跡**

第106号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。

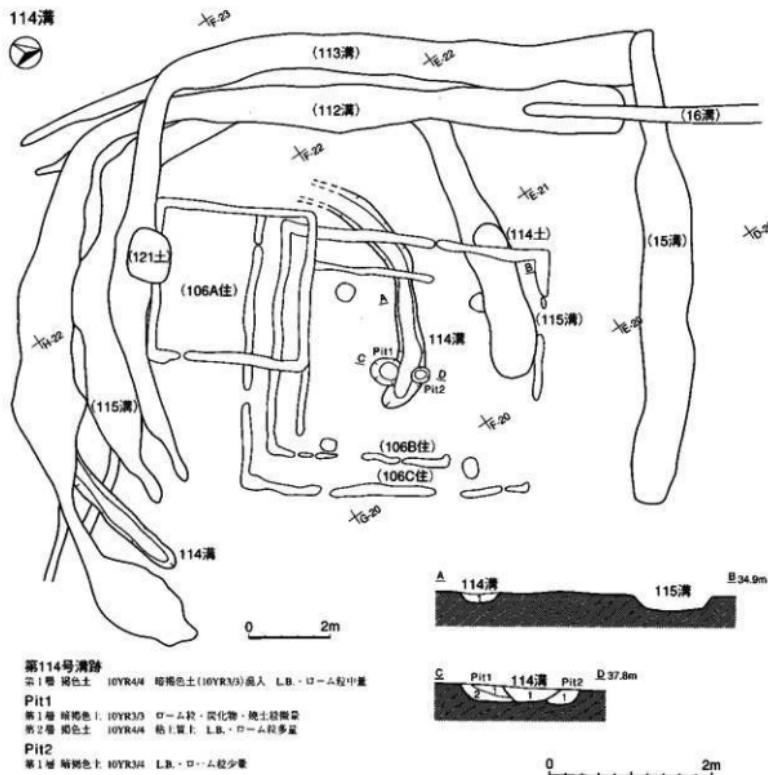


図44 第114号溝跡

## 第114号溝跡(図44)

[位置] F-20グリッドからH-20グリッドにかけて位置する。第106号B・第106号C竪穴住居跡、第112号溝跡と重複し、いずれの遺構より古い。

[形態・規模] 西側が広がる半円状で削平された竪穴住居跡の外周溝の可能性が考えられる。溝の幅は50~70cm、深さ10~16cmである。溝底面のレベルは西から東に向かって低くなっている。

[堆積土] 棕褐色土の層のみ確認した。

[出土遺物] 覆土から土師器や須恵器の片断と礫が出土している。

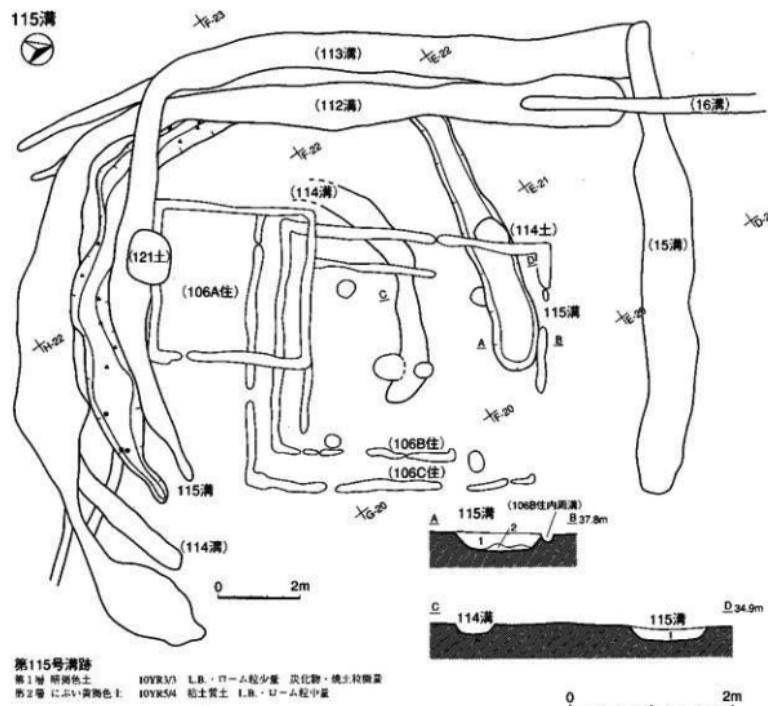


図45 第115号溝跡

## 第115号溝跡（図45・48・49）

【位置】E-20グリッドからG-20グリッドにかけて位置する。第106号B竪穴住居跡、第112号・第113号溝跡と重複し、いずれの遺構より古い。

【形態・規模】西側が広がる半円状で削平された竪穴住居跡の外周溝の可能性が考えられる。溝の幅は70cm~1m20cm、深さ13~23cmである。溝底面のレベルは西から東に向かって低くなっている。

【堆積土】2層に分層され、第1層に炭化物と焼土粒を含んでいる。

【出土遺物】覆土から土師器や須恵器の破片と砾、羽口が出土している。

## 第116号溝跡（図46）

【位置】J-16グリッドにかけて位置している。東側は調査区域外に延びるため不明である。第111号土坑と重複し、本遺構が古い。

【形態・規模】調査した部分は、幅約25cm、深さ約10cm、長さ約1mを確認した。

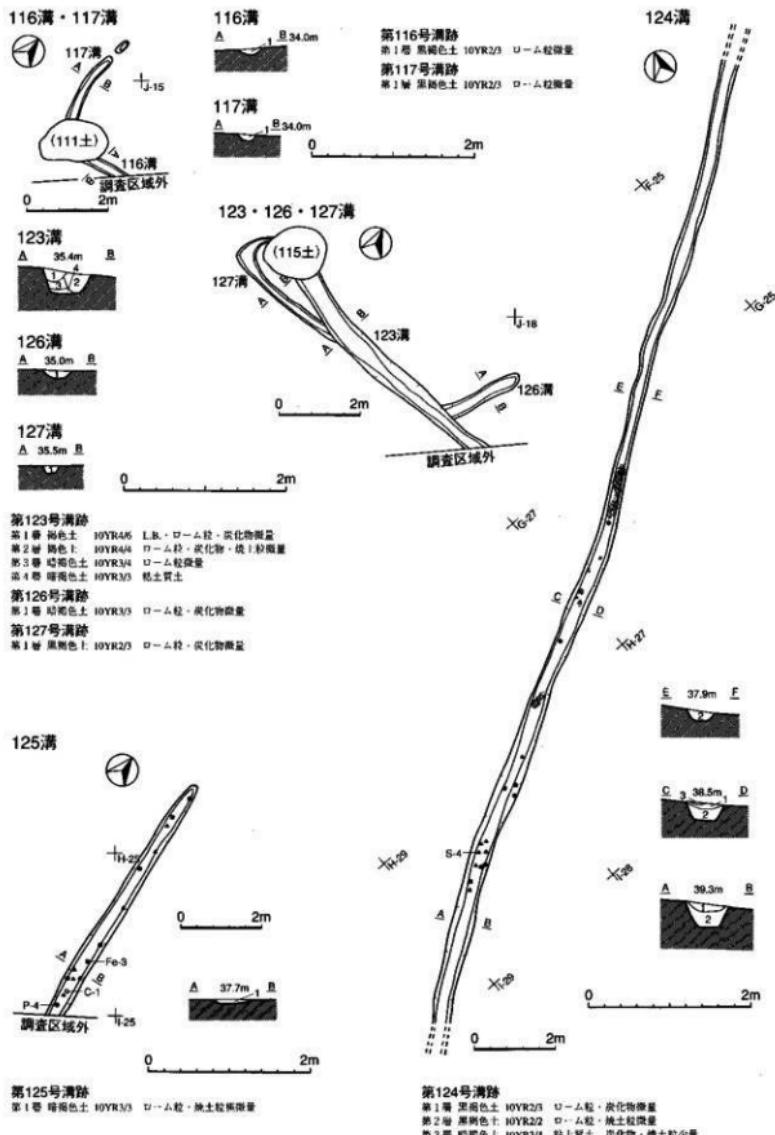


図46 第116号・第117号・第123号～第127号溝跡

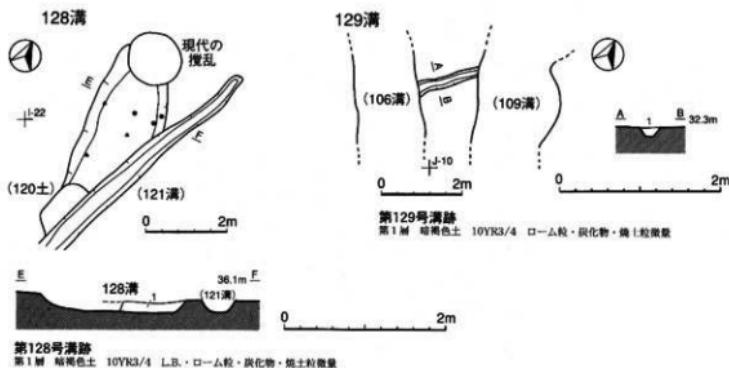


図47 第128号・第129号溝跡

[堆積土]黒褐色土の層のみである。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

#### 第117号溝跡（図46）

[位置] I・J-15グリッドに位置している。第111号土坑と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模]ほぼ直線状に延び、幅約25cm、深さ10cm、長さ約2mを確認した。

[堆積土]黒褐色土の層のみである。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

#### 第118号溝跡

第106号B竪穴住居跡内の周溝のため欠番となった。

#### 第119号溝跡

第104号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。

#### 第120号溝跡

第105号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。

#### 第121号溝跡

第107号竪穴住居跡の「外周溝」の項で記述している。

#### 第122号溝跡

第106号B竪穴住居跡の内周溝のため欠番となった。

#### 第123号溝跡（図46・48・49）

[位置] I-18からJ-19にかけて位置している。第115号土坑、第126号・第127号溝跡と重複し、本遺構は第115号土坑より古く、第126号・第127号溝跡より新しい。

[形態・規模] 西から東にはほぼ直線状に延びている。幅30~60cm、深さ約20cmで、溝底面は西から東へ低くなっている。

[堆積土] 4層に分層され、上部は暗褐色土が主体で、下部は褐色土が主体の層が堆積している。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片と礫、羽口の破片、鉄滓が出土している。

#### 第124号溝跡（図46・48・49）

[位置] E24グリッドからH-29グリッドにかけて位置している。

[形態・規模] 南西から北東にはほぼ直線状に延びている。幅30~60cm、深さ15~30cm、長さ約25mを確認した。溝底面は南西から北東へ低くなっている。

[堆積土] 3層に分層され、上部に黒褐色土、下部に暗褐色土を主体とし、フク土上部及び下部には黒褐色土が堆積する。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片や礫が出土している。

#### 第125号溝跡（図46・48・49）

[位置] G-24・H-28グリッドに位置している。

[形態・規模] 南から北に直線状に延びている。幅約40cm、深さ約5cm、長さ約5m50cm確認した。

[堆積土] 暗褐色土の層に焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片、礫や羽口の破片、鉄滓が出土している。

#### 第126号溝跡（図46）

[位置] J-18グリッドに位置している。第123号溝跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模] 幅約30cm、深さ約10cm、長さ約2mを確認した。

[堆積土] 黒褐色土のみである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第127号溝跡（図46）

[位置] I-18グリッドに位置している。第115号土坑、第123号溝跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模] 幅約20cm、深さ約10cm、長さ約3mを確認した。

[堆積土] 暗褐色土のみである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

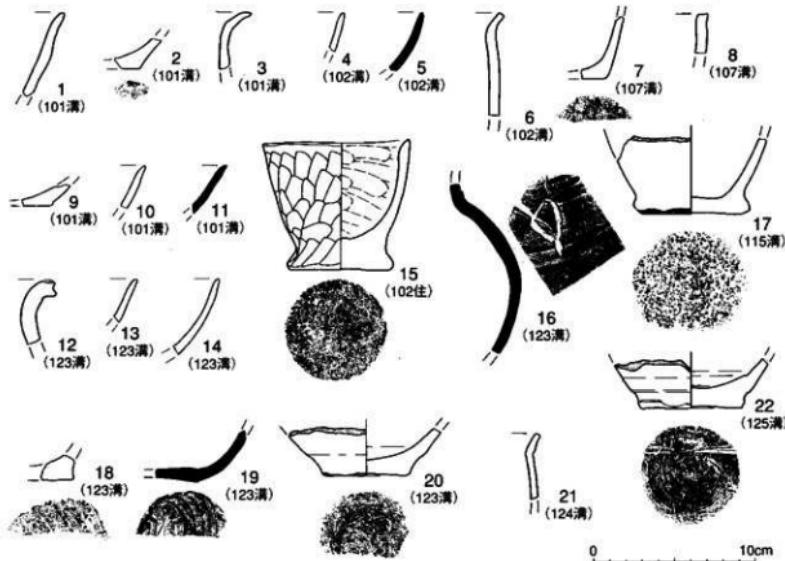
#### 第128号溝跡（図47）

[位置] H・I-21に位置している。第120号土坑、第121号溝跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模] 幅約90cm、深さ約20cmで、溝底面は南から北へ低くなっている。

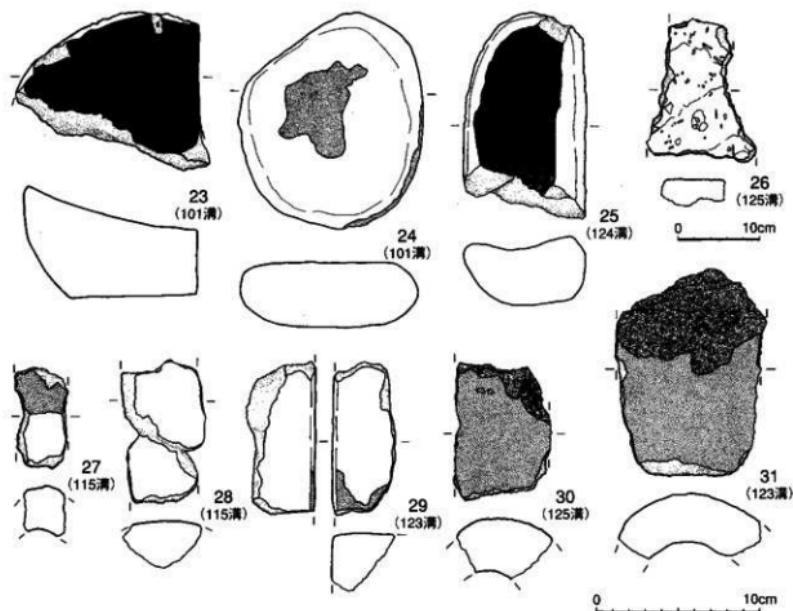
[堆積土] 暗褐色土に炭化物と焼土粒を含んだ堆積土である。

[出土遺物] 覆土から土師器の破片と礫が出土している。



回収 番号	種類	基盤	出土部位	計測 寸法 (cm)			外観調整			内面調整			分類	備考
				II	III	器高	底径	口部部 位(底上半)	底部下半	口部部 位(底上半)	底部下半	底面調節		
1	土師器	壺	101素 質土	—	—	—	—	リコナデ ヘラナデ	—	—	ヘラナデ	—	—	—
2	土師器	环	101素 質土	—	—	—	—	—	底底	—	—	底底	—	B II
3	土師器	壺	102素 質土	—	—	—	—	密底 (コロナ)	—	—	密底	—	—	A P-2
4	土師器	环	102素 質土	—	—	—	—	酒底	—	—	酒底	—	—	B II 内面黒色処理
5	埴輪器	环	102素 質土	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	P-4
6	土師器	壺	102素 質土	—	—	—	—	密底	—	—	密底	—	—	A P-1, 3
7	土師器	壺	102素 質土	—	—	—	—	密底	—	—	密底	密底	A	
8	土師器	鉢	102素 質土	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	B P-11
9	土師器	环	102素 質土	—	—	—	—	密底	—	—	密底	密底	B II	
10	土師器	环	102素 質土	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	B II P-4
11	埴輪器	环	123素 質土	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	
12	土師器	壺	—	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	B
13	土師器	环	123素 質土	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	—	—	B II
14	土師器	环	123素 質土	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	B II
15	土師器	鉢	(102素 質土) (9.0)	8.1	6.3	ヘラナデ ヘラナズ	ヘラナズ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナダツケ	A II	P-55, 66
16	埴輪器	金	123素 質土	—	—	—	—	ロクロ (ロクロ)	—	—	ロクロ	—	—	ヘラ記号「♀」
17	土師器	壺	115素 質土	—	6.0	—	—	密底	—	—	密底	密底	A	
18	土師器	壺	123素 質土	—	—	—	—	密底	—	—	密底	木本漆	A	
19	埴輪器	环	123素 質土	—	—	—	—	ロクロ	—	—	ロクロ	(密底)	—	大ダスク質 ヘラ記号「=」
20	土師器	鉢	123素 質土	—	—	5.2	—	密底 (ロクロ)	—	—	密底 (ロクロ)	密底	B	
21	土師器	壺	124素 質土	—	—	—	—	リコナデ ヘラナデ	リコナデ	—	ヘラナデ	—	A	内面(縁部に スヌ状炭化物付着)
22	土師器	鉢	123素 質土	—	—	6.3	—	ロクロ	—	—	ロクロ	ロクロ	B	P-4

図48 溝跡出土遺物(1)



遺物番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
23	鐵石	101層 骨土	(9.3)	(11.2)	5.7	(418)	多孔質 安山岩	S-19
24	合石	101層 骨土	13.2	11.3	4.1	962	安山岩	S-14側熱痕
25	鶴嘴器	124層 骨土	(12.0)	7.5	3.8	(482)	流紋岩	S-4
遺物番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	調査	備考
			長さ	幅	厚さ			
26	羽口	125層 骨土	(16.7)	(13.2)	(3.3)	(516.0)	不明	C-3表面全体に沿著溝
27	羽口	115層 骨土	(6.1)	(5.2)	(2.7)	(54.0)	不明	
28	羽口	115層 骨土	(8.7)	(4.9)	(3.9)	(107)	ナゲ	
29	羽口	123層 骨土	(9.2)	(3.8)	(3.5)	(185.0)	ナゲ	
30	羽口	125層 骨土	(8.4)	(5.8)	(3.7)	(141.0)	不明	C-1仰衝先端部
31	羽口	125層 骨土	(12.8)	(8.8)	(3.4)	(311.0)	小明	逆側先端部

図49 溝跡出土遺物(2)

## 第129号溝跡(図47)

[位置] H-9・10グリッドに位置している。第109号・第110号溝跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模] 幅20cm、深さ約10cmである。

[堆積土] 暗褐色土の層で炭化物と焼土粒を含んでいる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

## 101号掘立

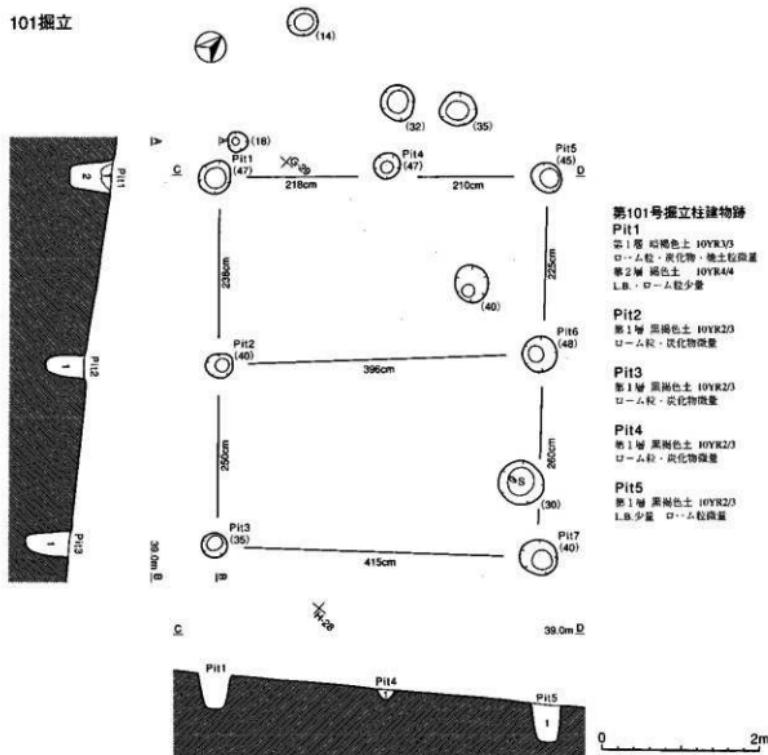


図50 第101号掘立柱建物跡

## 4 掘立柱建物跡

## 第101号掘立柱建物跡(図50)

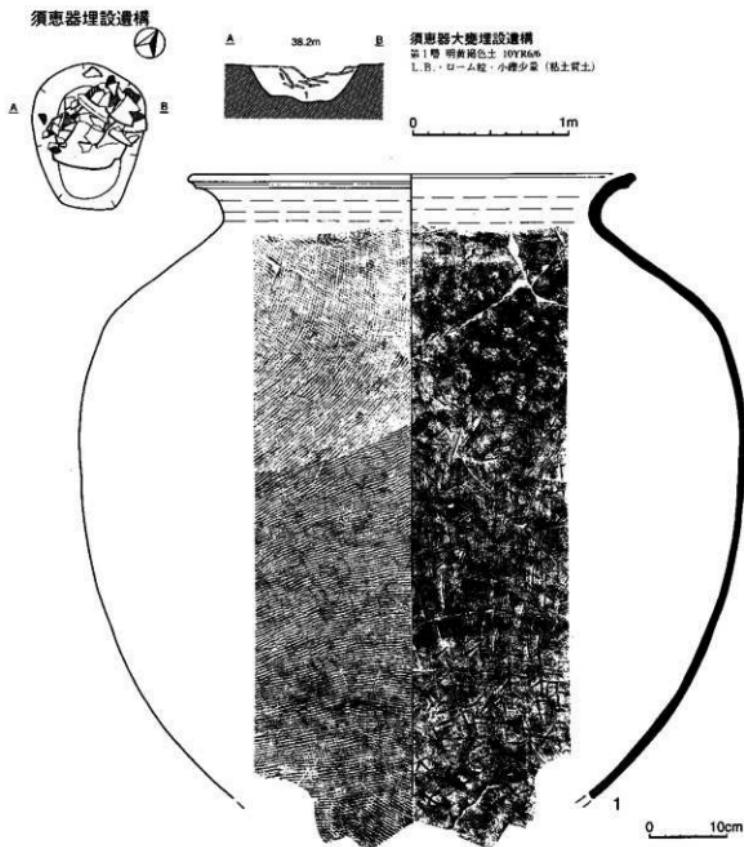
[位置] F・G-27~29グリッドに位置している。

[形態・規模] 南北方向柱列が2間、東西方向柱列が2間の建物跡で、平面形は長方形である。

[柱穴] 柱穴掘り方は直径が30~40cmで、平面形はほぼ円形である。深さは35~48cmである。

[規模] 全長で見ると、東西方向柱列のうち北側列が4m85cm、南側列が4m88cmであり、南北方向柱列は東側が4m15cm、西側が4m28cmである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



国宝 番号	種類	石碑	出土場所	封 墓 体 約 (cm)	外 壁 調 査	内 壁 調 査	底面調査	口縁部調査	備考
1	須恵器	大甕	底面	口 径 49.2 (49.2)	高 度 一 底部上半 ロクロ	体部上半 体部下半 ナタキア	体部上下 底面下半 ロクロ アテ真ア アテ月ア	一 ア	

図51 須恵器大甕埋設遺構

## 5 須恵器大甕埋設遺構（図51）

[位置] K-22・23グリッドに位置する。

[平面形・規模]長軸1m40cm、短軸1m20cmの不整円形で、確認面からの深さは約15cmである。

[堆積土]暗褐色土の層のみである。

[出土状況]須恵器大甕の上半部は内側に崩れ落ち、下半部はピット底面に接している。

[上屋構造]確認できなかった。

[時期]9世紀後半から10世紀初頭と思われる。

(中嶋 友文)

## 第2節 遺構外出土遺物

出土した遺物は、平成10年・平成11年の調査で、段ボール箱に60箱分出土した。

そのうちの大部分が平安時代の遺物である。

### 1 土師器・須恵器

土師器・須恵器の分類にあたって、出土量の大半を占める土師器を主体に、器種、形態、製作技法から細分した。なお、土師器と酸化焼成された須恵器についても色調からの分類は避け、胎土、焼成上の相違から生ずる黒斑、火ダスキ痕等によりいずれかに分類した。

#### 土師器

本遺跡から出土した土師器は、壺（皿・高壺）、甕、壺、鉢、壺（土製のなべ）、製塙土器、小型土器などの器種があり、出土量の大半を壺、甕が占めるため、壺、甕を主に形態・製作技法から次のように分類した。また、破片数は、壺類約670点、甕・壺類（鉢類を含む）約9820点の合わせて約10500点であった。

【壺形土器】壺には皿、椀に近いものも存在するが括して分類する。ロクロ使用の有無から大別し、次に黒色処理からそれぞれ二分、さらに調整技法から細分した。

A類（ロクロ不使用）

A I類（黒色処理するもの）

A I類 内外面共ヘラミガキ調整してあるもの。

A II類（黒色処理しないもの）

A II類 内外面共ヘラナデ調整あるいはヘラミガキ調整してあるもの。

B類（ロクロ使用）

B I類（黒色処理するもの）

B I a類 底部、体部下半に再調整がみられ、内面をヘラミガキ調整してあるもの。

B I b類 底部、体部共に再調整がなく、内面をヘラミガキ調整してあるもの。

B II類（黒色処理しないもの）

B II a類 底部、体部下半に再調整するもの。

B II b類 底部、体部共に再調整がないもの。

B II c類 底部に高台をつけるもの。

調査区内から出土した壺形土器の中で、A類（ロクロ不使用）のものはなかった。また、B類（ロクロ使用）の中には体部が口縁部まで外傾するもの、体部で脹らみ口縁部の外反するもの、そのまま立ちあがるもの、体部から口縁部までそのまま立ちあがるものなどがあるが細分していない。aの再調整はいずれも手持ちヘラケズリ調整で、回転糸切り後再調整しているもので、bの切り離し技法はいずれも回転糸切りである。cの高台は、底面を切り離し後ロクロを用いて高台を付けている。

【甕形土器】甕は、器高により長胴甕と中甕に分け、ロクロ使用の有無から分類し、さらに形態、調整技法から細分した。

A類（ロクロ不使用）

A I類（長胴甕、器高20cm以上）

A I a類 口縁部が外反して、体部はやや直線的で底径が小さくすぼまり、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整しているもの。

A I b類 口縁部が外反し、底径がやや大きく、内面底部が平坦で、外面をヘラケズリ、内面をヘラナデ調整しているもの。

A I c類 口縁部がやや短く外反して、底径がやや大きく、内面底部が平坦で、外面をヘラケズリ、内面をヘラナデ調整しているもの。

A I d類 口縁部が短く、体部上半に最大径があり、調整技法には体部外面をヘラナデ、ヘラケズリ、内面をヘラナデ調整しているもの。

A I e類 口縁部が短く屈曲し、体部の形態から直線的で肉厚なもので、体部外面がヘラケズリ、内面へラナデ調整している。

A II類 (中壺、器高19cm以下)

A II a類 口縁部が外反して、体部はやや直線的で底径が小さくすぼまるもの。外面はヘラケズリ、内面を縦方向や横方向にヘラナデ調整している。

A II b類 口縁部が外反し、底径がやや大きく、内面底部の平坦なもの。外面へラナデ、ヘラケズリ、内面へラナデ調整している。

A II c類 口縁部がやや短く外反して、底径がやや大きく、内面底部の平坦なもの。外面をヘラケズリ、内面をヘラナデ調整している。

A II d類 口縁部が短く、体部上半に最大径のあるもの。体部外面はヘラナデやヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整をしている。

A II e類 口縁部が短く屈曲し、体部の形態がやや直線的なもの。外面をヘラケズリやヘラナデ、内面をヘラナデ調整している。

B類 (ロクロ使用)

B I類 (長削甕、器高20cm以上) 口縁部が外反し、体部内外面をロクロナデ調整している。また、体部外面をヘラケズリ、内面をヘラナデ調整しているものもある。

B II類 (中壺、器高19cm以下) 口縁部が外反し、体部内外面をロクロナデ調整している。

[壺形土器]壺は、形態と調整技法から次のように分類した。

A類 (ロクロ不使用)

A I類 口縁部が長く外反し、体部が球形のもの。内外面ともにヘラナデ調整している。

A II類 口縁部が長く外反し、体部上半で膨らむもの。内外面をヘラナデ調整している。

B類 (ロクロ使用)

B I類 口縁部が長く外反し、体部は球形で、体部内外面をロクロナデ調整している。

B II類 口縁部が長く外反し、体部は上半膨らみ、体部外面をヘラミガキしている。

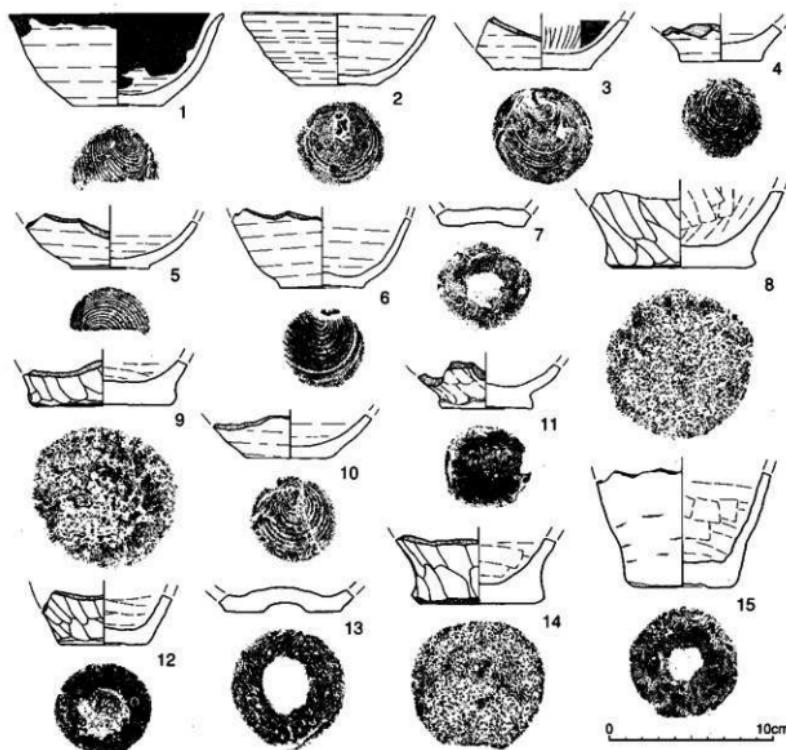
[鉢形土器] 鉢は、ロクロ使用の有無から次のように分類した。

A類 (ロクロ不使用)

A I類 体部が外傾し底部は平底、内外面をヘラナデ調整している。

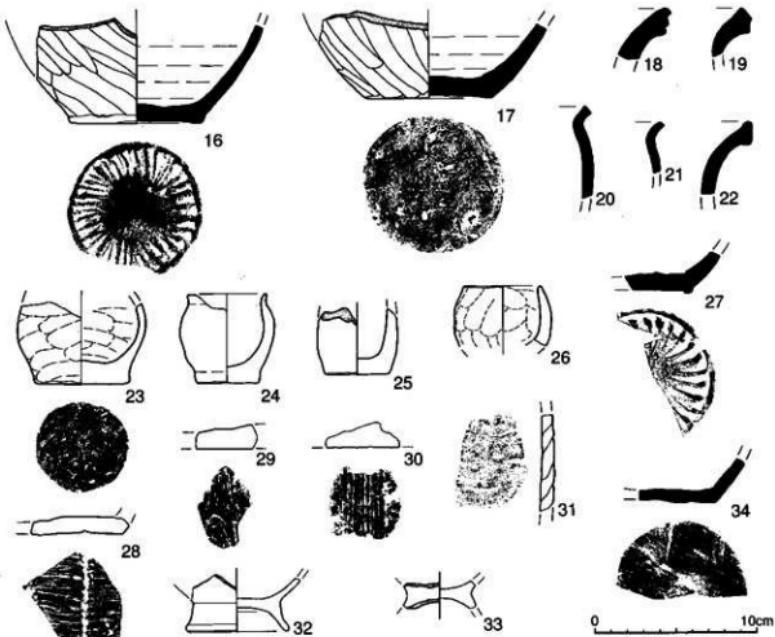
A II類 小型のもので体部がやや外反し、内外面をヘラナデ調整している。

B類 (ロクロ使用)



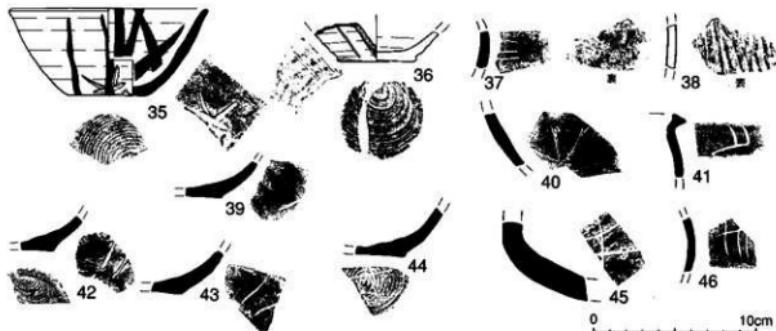
規格 番号	種 類	器 種	出土層位	計 測 値 (cm)			外 面 調 整			内 面 調 整			分 類	備 考	
				口 径	底 径	高 さ	門 形	体 積上 下	部 分	門 形	体 積上 半	体 積下 半			
1	上	器	环	J-14 I型	13.1	5.7 (5.4)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	薄底条带	B II b 内外面スス状碳化物付着	
2	上	器	环	I-20 I型	11.8	4.6	4.6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	薄底条带	B II
3	上	器	环	J-14 I型	-	6.0	-	-	磨成 (ロクロ)	-	-	ハラニギ	磨底条带	B I 内面黑色处理	
4	上	器	环	E-29 I型	-	5.0	-	-	磨成 (ロクロ)	-	-	ハラニギ	磨底条带	B II	
5	上	器	环	J-20 I型	-	4.8	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	磨底条带	B II	
6	上	器	环	G-26 I型	-	5.0	-	ロクロ	ロクロ	-	ロクロ	ロクロ	磨底条带	B II b	
7	土	器	罐	H-20 I型	-	5.0	-	-	ハラニギ	-	-	ハラナダ +トナダ	砂底	A	
8	土	器	罐	J-12 I型	-	5.4	-	-	ハラニギ	-	-	ハラナダ	砂底	A	
9	土	器	罐	J-12 I型	-	5.4	-	-	ハラニギ	-	-	ハラナダ	砂底	A	
10	土	器	环	I-16 I型	-	5.2	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	磨底条带	B II 内外面磨滅	
11	土	器	环	表	-	5.6	-	-	ハラニギ	-	-	ハラナダ	ハラナダ	A ロクロ不使用	
12	土	器	环	C-16 I型	-	5.4	-	-	ハラニギ	-	-	ハラナダ 砂底	砂底	A	
13	土	器	罐	I-24 I型	-	7.0	-	-	不明	-	-	ハラナダ (中空)	ナダツケ (中空)	A	
14	土	器	罐	I-11 I型	-	7.2	-	-	ハラニギ	-	-	ハラナダ 砂底	砂底	A	
15	土	器	环	I-17 I型	-	6.4	-	-	磨成	-	-	ハラナダ (中空)	ナダツケ (中空)	A 外輪模様	

図52 遺物外出土遺物(1)



図版 番号	種類	器種	出土層位	寸法		外面調査			内面調査			表面模様	分類	備考
				II	III	基部高さ	頂部高さ	口縁部	底盤上半	底盤下半	口縁部			
16	須恵器	壺	I-21 H 1層	-	-	8.2	-	-	ハラカズリ	-	-	ロクロ	菊文	b
17	須恵器	壺	表様	-	-	7.8	-	-	ハラカズリ	-	-	ロクロ	ナデツケ	c
18	須恵器	壺	J-1 1層	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	b
19	須恵器	壺	F-21 1層	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	b
20	須恵器	鉢	表様	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	ロクロ	ロクロ	-	-
21	須恵器	鉢	N-13 1層	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	-
22	須恵器	壺	N-15 1層	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	b
23	土器器	小型土器	J-24 1層	-	-	6.0	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデツケ	-
24	土器器	小型土器	H-1 1層	(4.8)	5.5	3.8	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	磨滅	-
25	土器器	小型土器	H-13 1層	-	-	(3.6)	-	磨滅	-	磨滅	-	磨滅	磨滅	-
26	土器器	小型土器	L-29 1層	(4.7)	-	-	ユビナデ	ユビナデ	-	ユビナデ	ユビナデ	-	-	-
27	須恵器	壺	H-23 1層	-	-	-	-	ハラカズリ	-	-	ロクロ	菊文	c	
28	七輪器	壺	表様	-	-	-	-	-	不明	-	-	ヘラナデ	裏陶痕	A
29	七輪器	側面土器	J-18 1層	-	-	-	-	-	-	-	-	板目底	-	-
30	七輪器	側面土器	K-37 1層	-	-	-	-	-	-	-	-	板目底	-	-
31	土器器	土器	J-1 1層	-	-	-	-	磨滅	-	-	ヘラナデ	-	-	外面施錆斑
32	土器器	高台付环	C-16 1層	-	6.0	-	-	磨滅	-	-	磨滅	磨滅	B II c	
33	土器器	高台付环	H-20 1層	-	-	-	-	磨滅	-	-	磨滅	磨滅	B II c	
34	須恵器	壺	表様	-	-	-	-	ハラカズリ	-	-	ハラカズリ	ハラカズリ	c	

図53 遺物外出土遺物(2)



器種 区分	種類	部種	出土位	計 遺 物 (cm)			外面 調整			内面 調整			裏面調査	分類	備考	
				口 径	器 高	底 径	I I 様	体部上半	体部下半	口神部	体部上半	体部下半				
35	須恵器	环	J-12 I層	12.0	5.4	4.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	側板余留	a	大ダスク痕跡 ヘラ記号「△」	
36	土師器	环	I-12 I層	-	-	5.0	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	側板余留	a	ヘラ記号「×」	
37	須恵器	壺	J-12 I層	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	-	-	ヘラ記号「△」 火ダスク痕	
38	土師器	壺	表様	-	-	-	-	タキ	-	-	タマ真珠	-	-	-	-	ヘラ記号「△」 火ダスク痕
39	須恵器	环	H-23 I層	-	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	側板余留	-	ヘラ記号「△」 火ダスク痕	
40	須恵器	壺	B-21 I層	-	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	ヘラ記号「△」 火ダスク痕	
41	須恵器	鉢	J-20 I層	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	-	-	-	-	ヘラ記号「△」	
42	須恵器	环	I-20 I層	-	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	側板余留	-	ヘラ記号「△」 火ダスク痕	
43	須恵器	环	I-19 I層	-	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	側板余留	-	ヘラ記号「△」 火ダスク痕	
44	須恵器	环	J-12 I層	-	-	-	-	-	ロクロ	-	-	ロクロ	側板余留	-	ヘラ記号「×」	
45	須恵器	大壺	表様	-	-	-	タキ	-	-	不明	-	-	-	-	ヘラ記号「△」	
46	須恵器	壺	J-12 I層	-	-	-	ヘラケズリ	-	-	ロクロ	-	-	-	-	ヘラ記号「△」	

図54 遺物外出土遺物(3)

B I類 外面をロクロナデ調整をしている。

B II類 外面をロクロナデ調整、内面をヘラナデ調整している。

### 須恵器

出土した須恵器は、破片数で坏類約160点、壺・甕類（鉢類を含む）約1450点の合わせて約1600点であった。破片数の割には、接合しないため全体の形状を知るものはごくわずかである。以下に出土した須恵器の分類と特徴について述べる。

【坏形土器】坏はすべてロクロ成形で、切り離し技法は回転糸切である。形態による分類は行わず、調整技法から分類した。

a類 底部、体部下半に再調整するもの。

b類 底部、体部共に再調整がないもの。

【壺形土器】壺は短頸壺と、長頸壺に分けられるが、短頸壺と思われるものは非常に少なく、長頸壺が壺形土器のはほとんどを占める。胴部上半はロクロ調整、胴部下半はヘラケズリ調整が施される。口縁部の形態（I類・II類）、底部の形態（a～c類）に分類した。

【口縁部形態】 I類 口縁端部の断面形態が方形を基調とするもの。

II類 口縁部に突帯を意識したつくりのもの。

【底部形態】 a類 低い貼りつけ高台をもち、ケズリ調整のみのもの

b類 低い貼りつけ高台をもち、底面には菊花文状のケズリ調整をするもの。

c類 切り離し技法がヘラケズリのみのもの

【鉢形土器】鉢はロクロ成形で、切り離し方法は回転糸切によるものがほとんどで、中には図22-1のように縦に対する耳が付くものも出土している。

【壺形土器】口径が30cm以下を中壺、50cm以上を大壺とした。須恵器埋設遺構の大壺(図51-1)は、内面に当て具を当てた状態で外面から叩き板で整形している。

【口縁部形態】 a類：口縁端部の断面形態が方形を基調とするもの

b類：口縁部に突帯を意識したつくりのもの。

【体部外面】 タタキ目 a類：木目に対して、直交に刻み目を入れた叩き板で叩き締めた痕跡

タタキ目 b類：木目に対して、平行に刻み目を入れた叩き板で叩き締めた痕跡

【体部内面】 アテ具痕 a類：樹状や鳥足状に刻み目を入れた当て具で器内面から押された痕跡

アテ具痕 b類：木目に対して平行に刻み目を入れた当て具で押された痕跡

## 2 石器

石器は88点出土し、これらを器種により砥石、敲磨器、台石、石皿、軽石として分類した。各器種の石質及び特徴的なものを取り上げて記載する。

【砥石】石質は流紋岩、安山岩、多孔質安山岩、凝灰質泥岩、チャートである。多孔質安山岩は表面がざらつき、色調は暗褐色及び茶褐色を呈するものである。

図20-41は平坦な使用面に被熱痕を持つ。

図55-48は擦りにより、強い湾曲面を持ち、使用頻度が高いものと思われる。

図55-47は使用面が5面あり、明瞭な擦痕を持つ。

図55-49は使用面を4面持ち、端部に敲き痕が認められる。

【敲磨器】石質は流紋岩、凝灰岩、安山岩、多孔質安山岩、泥岩、砂岩、閃綠岩で、被熱痕を持つものが5点出土している。

表面及び側縁に擦面をもつもの(図20-35・36・38・39、図24-25・26、図25-5、図29-16、図32-12・13、図49-25)

敲きによる凹痕を持つもの(図34-4)

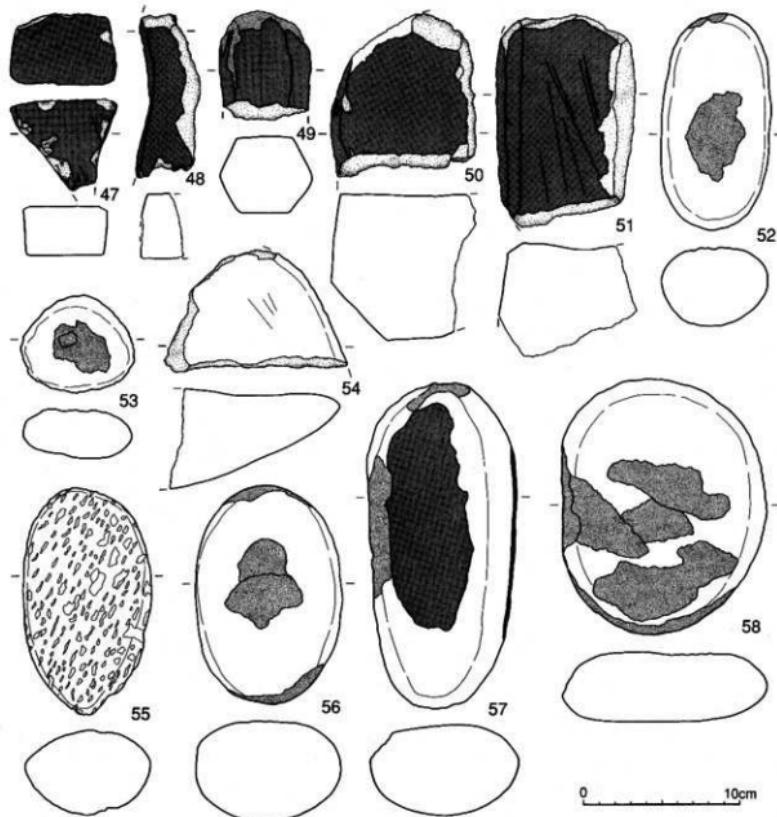
敲きによる凹痕のほかに、擦面をもつもの(図29-18)

【台石】石質は流紋岩、凝灰岩、安山岩、多孔質安山岩に分かれ、被熱痕を持つものが5点出土した。

図26-1、図40-18、図49-24、図55-58は表面に明瞭な敲き痕を持ち、図32-16、図55-54は平坦面や湾曲した面に擦痕を持っている。

【石皿】石質が凝灰岩、安山岩、砂岩の3点が出土しており、図32-11は被熱痕がみられる。

【軽石】遺構外のJ-8から出土している。(図55-55)



件號 番号	器種 器種	出土層位 出土地点	寸 厘 毫 (cm)			重量 (g)	石質 岩質	備考 備考
			長 さ	幅 き	厚 さ			
47	砾石 石核	II-13 1層	(5.7)	6.7	4.5	(136)	凝灰質泥岩	
48	砾石 石核	H-16 1層	(9.9)	(3.6)	3.9	(147)	流紋岩	
49	砾石 石核	H-16 1層	(6.8)	5.8	4.8	(295)	チャート	
50	砾石 石核	I-26 1層	(9.6)	(9.2)	9.1	(497)	多孔質 安山岩	
51	砾石 石核	G-14 1層	(13.2)	(8.8)	(7.2)	(950)	流紋岩	
52	磨擦器 摩擦器	II-21 1層	13.6	6.9	5.0	601	凝灰岩	被熱処
53	敲打器 石核		6.1	7.3	3.1	93	多孔質 安山岩	
54	石核	J-14 1層	(7.4)	(11.5)	(6.2)	(499)	安山岩	
55	砾石 石核	J-8 1層	14.3	8.5	5.3	147	珪石	
56	磨擦器 摩擦器	T-16 1層	13.8	9.2	6.4	1259	閃綠岩	
57	敲打器 石核		25.0	9.5	5.7	1438	流紋岩	
58	台石 石核		16.2	13.0	4.4	1457	安山岩	被熱処

図55 遺物外出土遺物(4)

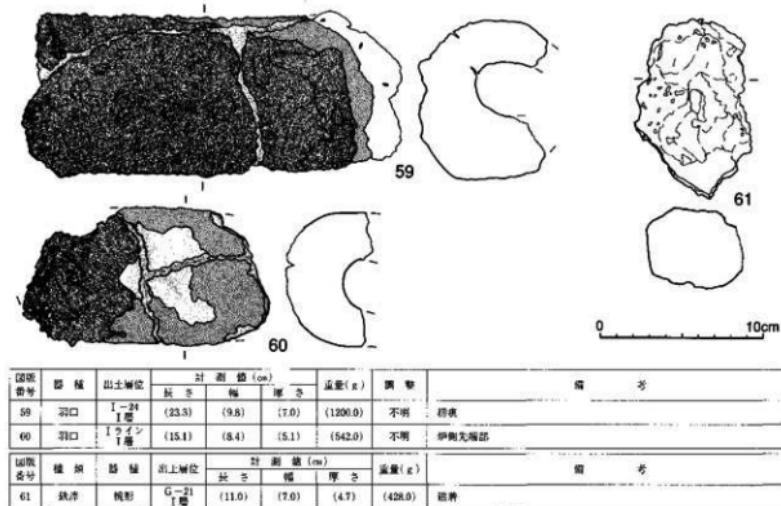


図56 遺物外出土遺物(5)

### 3 その他の遺物

#### (1) 羽口

出土した羽口は、破片資料が多く、出土量はおよそ10kgで、全体に占める割合は溝跡27%、土坑10%、竪穴住居跡からは極僅かで、60%以上が構造外からである。

図49-26は平坦面全体に、溶着済が付着している。

図56-59は胎土自体が軟質で粒子が粗いため脆く、側面形態は円筒状であり、炉側先端部分は高温のため溶解・発砲し、ガラス化した済が複数方向に垂下している。胎土表面には粉痕が確認された。

図56-60は炉側先端部分で、ガラス化した済の一部が発砲し、酸化により紫褐色化している。胎土状況は硬質感があり、粒子が緻密である。

#### (2) 土製品

出土した土製品は、遺構外からの土玉が2点である。

図56-62は外面をヘラミガキ技法で調整し、表面には光沢が見られる。

図56-63はやや大ぶりの土玉で外面を指圧痕によって調整している。

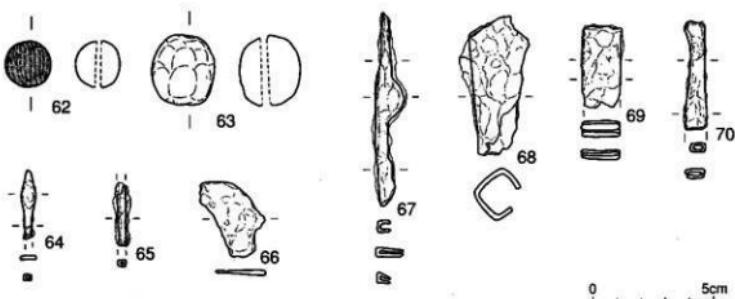
#### (3) 鉄製品・鉄滓

[鉄製品] 10点出土したが、分類は行わず、各器種の特徴を記述する。

鉄錠(図57-64) 頸部が欠失し、錐身部のみが残存している。

棒状鉄製品(図57-67) 板状の鉄をコの字状に折り曲げて整形している。使用用途は不明である。

筒状鉄製品(図57-68) 板状の鉄を方形に折り曲げ、筒状の状態としている。片側が若干縮っては



試験番号	器種	出土場所	計測値(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
62	土玉	K-35 1層	1.8	1.9	1.9	5.9	ミガキによる光沢
63	土玉	E-34 1層	2.9	2.5	2.5	18.4	
試験番号	器種	出土場所	計測値(cm)			重量(g)	備考
64	鉄製品	軌道	表抜 (2.9)	(0.6)	(0.3)	(1.3)	
65	鉄製品	軌枕	I-15 1層	(2.6)	0.3	0.3	(1.3)
66	鉄製品	軌枕	E-24 1層	(3.0)	2.1	0.2	(2.7)
67	鉄製品	軌枕	J-13 1層	7.9	1.1	0.5	10.7
68	鉄製品	軌枕	Fラン 1層	(5.5)	2.1	(1.5)	(23.5)
69	鉄製品	軌枕	表抜	(3.3)	1.6	0.6	(9.6)
70	鉄製品	軌枕	E-27 1層	(5.2)	0.9	0.4	(5.7)

図57 遺物外出土遺物(6)

いるが内部には残存するものが確認されなかった。

楔(図57-69) 側面縦方向に亀裂があり、断面形態から4枚の鉄を貼り合わせて鍛造されている。

【鉄滓】鉄滓の出土量は約24.8kgで、堅穴住居跡0.4kg、土坑0.5kg、溝跡3.6kg、遺構外20.3kgと遺構外が8割を占める。また、磁石に反応する鉄滓は52%と高い割合である。

橢形鉄滓(図56-61)は、色調が赤褐色で、上面に気孔・砂粒の付着がみられ断面は半球状で、磁石に反応し、金属反応が認められる。

#### (4) 木製品

木製品は井戸跡から薦槌、板材などが出土している。

薦槌(図41-23~27) 第115号(井戸跡)土坑から5点出土し、いずれも欠損品である。丸木材を面取りによって鼓状にしている。

板材(図41-28) 柱目状に木取りされている。

範状木製品(図11-1) 第10号井戸跡から出土している。

(中鶴・竹内)

## 第4章 自然科学的分析

### 第1節 放射性炭素年代測定 ( $\beta$ 線計数法)

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1999年 2月 26日

青森県埋蔵文化財調査センター 殿

1998年 12月 3日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。測定した炭素の $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル)の値が記入してある場合は、上記の年代値は同位体効果の補正をした値です。 $\delta^{13}\text{C}$ の値の記載がない場合は同位体効果の補正是行なっていません。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示しております。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{13}\text{C}\%$ を付記しております。

#### 記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK-20095	炭化材 from 朝日山(2) 遺跡	1550 ± 70
No. 1	第5号住居跡床面直上(D-18)	$\delta^{13}\text{C} = -28.6$
		A. D. 400

以上 木越 邦彦

## 第2節 放射性年代測定（AMS法）

青森県埋蔵文化財調査センター

様

(株)地球科学研究所

### 放射性炭素年代測定結果報告書

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

#### 報告内容の説明

**14C age (y BP)** : 14C年代測定値  
試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。  
半減期として5568年を用いた。

**補正14C age (y BP)** : 補正14C年代値  
試料の炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定して試料の炭素の同位体分別を知り  
 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

**$\delta^{13}\text{C}$  (permil)** : 試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比。  
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)  
で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  [標準] = 0.0112372である。

**層年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動に対する補正により、層年代を  
算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の測定、サンゴのU-Th年代と  
14C年代の比較により、補正曲線を作成し、層年代を算出する。最新のデータベース(  
"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)  
により約19000年までの換算が可能となった。\*

\*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

#### 測定方法などに関するデータ

**測定方法 AMS** : 加速器質量分析

**Radiometric** : 液体シンチレーションカウンタによる $\beta$ -線計数法

**処理・調製・その他** : 試料の前処理、調製などの情報

**前処理** acid-alkal-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄  
acid washes : 酸洗浄  
acid etch : 酸によるエッチング  
none : 未処理

**調製、その他**

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理  
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出  
Cellulose Extraction : 木材のセルローズ抽出

Extended Counting : Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する

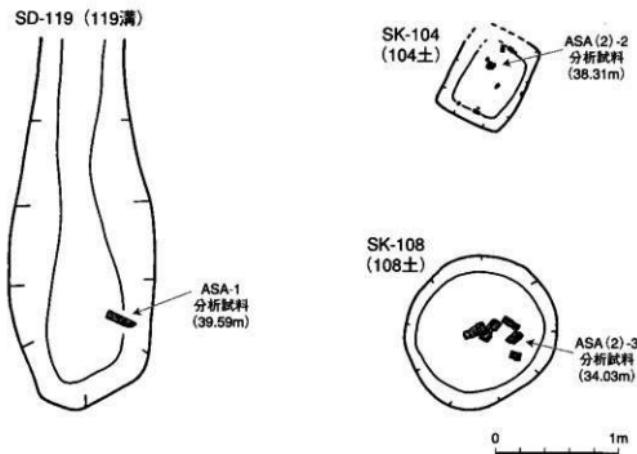
**分析機関** : BETA ANALYTIC INC.  
4985 SW 74 Court, Miami, FL33155, U.S.A

## C14年代測定結果

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 137340	1240 ± 40	-26.3	1220 ± 40
試料名 ( 12915 ) ASA-1 (SD-119)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material		acid-alkali-acid	
Beta- 145156	1170 ± 40	-25.8	1150 ± 40
試料名 ( 15275 ) ASA(2)-2 (SK-104)			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 145157	1230 ± 40	-25.3	1230 ± 40
試料名 ( 15276 ) ASA(2)-3 (SK-108)			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リフレンス スタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

(株) 地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区緑田本町1-608 TEL052-802-0703



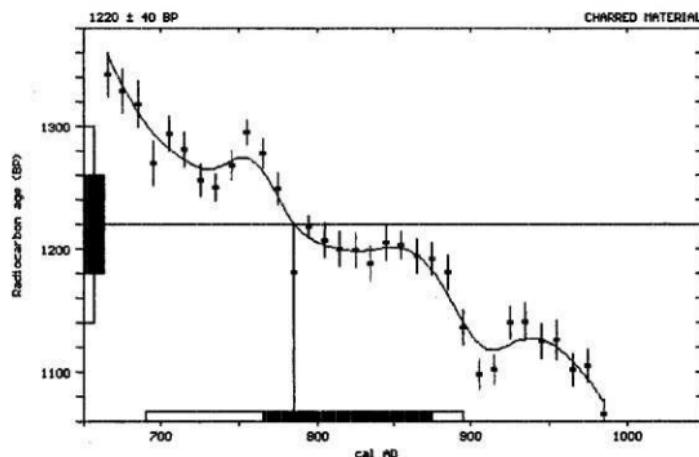
**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables: C13/C12=-26.3; lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-137340

Conventional radiocarbon age:  $1220 \pm 40$  BPCalibrated results:  
(2 sigma, 95% probability) cal AD 690 to 895 (Cal BP 1260 to 1055)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: cal AD 785 (Cal BP 1165)1 sigma calibrated results:  
(68% probability) cal AD 765 to 875 (Cal BP 1185 to 1075)

## References:

- Calibration Database*
- Editorial Comment*
- Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xlii
- INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration*
- Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
- Mathematics*
- A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*
- Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 ■ Tel: (305)667-5167 ■ Fax: (305)663-0964 ■ E-mail: beta@radiocarbon.com

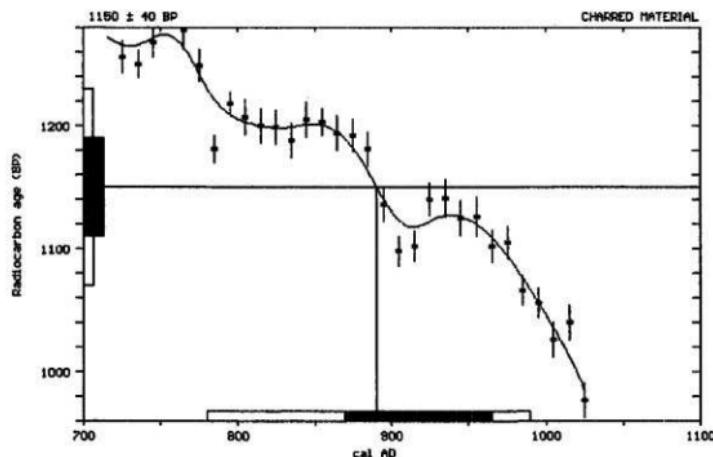
**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables:C13/C12=-25.8:lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-145156

Conventional radiocarbon age:  $1150 \pm 40$  BPCalibrated results:  
(2 sigma, 95% probability) cal AD 780 to 990 (Cal BP 1170 to 960)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: cal AD 890 (Cal BP 1060)1 sigma calibrated results:  
(68% probability) cal AD 870 to 965 (Cal BP 1080 to 985)

## References:

- Calibration Database*
- Editorial Comment*
- Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xii
- INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
- Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
- Mathematics*
- A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*
- Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 ■ Tel: (305)667-5167 ■ Fax: (305)663-0964 ■ E-mail: beta@radiocarbon.com

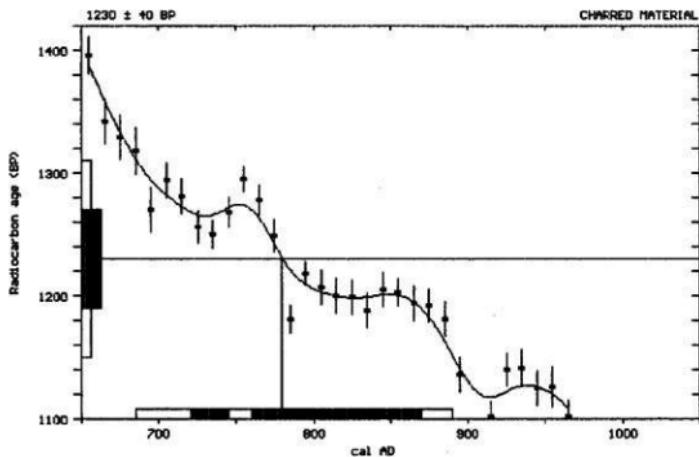
**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables:C13/C12=-25.3:lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-145157

Conventional radiocarbon age:  $1230 \pm 40$  BPCalibrated results: cal AD 685 to 890 (Cal BP 1265 to 1060)  
(2 sigma, 95% probability)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: cal AD 780 (Cal BP 1170)1 sigma calibrated results:  
(68% probability) cal AD 720 to 745 (Cal BP 1230 to 1205) and  
cal AD 760 to 870 (Cal BP 1190 to 1080)

## References:

- Calibration Database*
- Editorial Comment*
- Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xlii
- INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
- Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
- Mathematics*
- A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*
- Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33153 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

### 第3節火山灰の蛍光X線分析

#### 朝日山(2)遺跡出土の蛍光X線分析

奈良教育大学 教授 三辻 利一

##### 1)はじめに

青森県内の平安時代の遺跡からはK, Ca, Rb, Srの4指紋元素からみて対照的な2種類の火山灰があることが知られている。白頭山火山灰と十和田a火山灰である。両者の簡易識別法ができるので、その方法を使って、朝日山(2)遺跡から出土した火山灰試料の同定結果について報告する。

##### 2)分析結果

分析結果は表1にまとめられている。このデータに基づいてK-Ca, Rb-Srの両指紋図を作成した結果を図1, 2に示す。

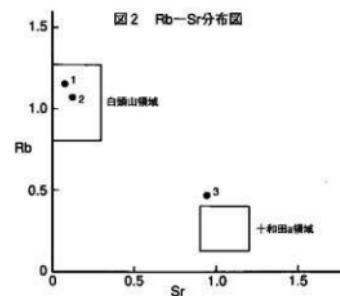
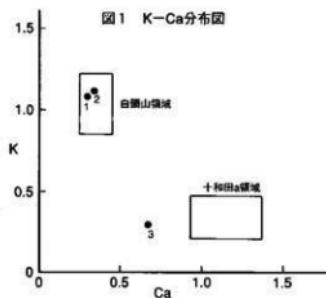
白頭山領域に分布した2点の試料は白頭山火山灰と推定された。

両領域に対応しないNo.3はNa量が少なく、風化した試料であり、粘土試料の可能性もある。

以上の同定結果は表1に示されている。

表1 朝日山(2)遺跡出土火山灰の分析データ

試料番号	遺構名	層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	判定	
No.1	12-1556	第5号竪穴住居跡	覆土	1.08	0.295	2.51	1.15	0.075	1.14	白頭山
No.2	12-1557	第8号溝跡	4層	1.11	0.329	2.35	1.08	0.124	1.22	白頭山
No.3	12-1558	第102号竪穴住居跡	Pit10覆土	0.297	0.675	1.62	0.469	0.942	0.417	不明



## 第5章 まとめ

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、青森市南西部の中位段丘上に位置し、標高はおよそ30~50mである。調査区は東方へ傾斜する斜面で、おもに畑地として利用されており、盛り土された部分や削平および搅乱を受けた部分が存在する。

### 2 検出遺構

本遺跡で検出した遺構は、平成10年度と平成11年度を合わせて、堅穴住居跡13軒、土坑32基（含井戸跡4基、焼成遺構3基）、溝跡36条、掘立柱建物跡2軒、須恵器埋設遺構の計84である。

### 3 出土遺物

出土した遺物は、平成10年度の調査で段ボール箱に8箱分、平成11年度は52箱分出土した。

縄文時代の土器や石器も出土したが、大部分が平安時代の遺物である。

### 4 まとめ

本遺跡で検出した堅穴住居跡は外周溝を伴うという特殊な構造で、以前に調査した朝日山遺跡や朝日山(3)遺跡でも調査例があり、その関連性が考えられる。また、朝日山(3)遺跡では、堅穴住居跡と外周溝のほかに南側に掘立柱建物跡を伴っており、平成11年度に調査した第104号堅穴住居跡も東側に掘立柱建物跡が存在するが、住居跡に伴うものとは断定できない。

住居跡に付随する外周溝は、堆積土の下層に砂粒が堆積していることや、底面に緩やかな傾斜が見られることから主に排水施設として使用されていた溝と思われる。

住居跡と外周溝などの遺構が重複する区域と見られない区域などがあることから、遺構が構築される場所は、ある程度限定され、その時期その場所に構築しなければならない要因が考えられる。

青森市内で平安時代と確定できる井戸跡の検出例は少なく、出土した遺物は、堆積している白頭山・苦小牧火山灰の下層からのもので、土器編年などの好資料となると思われる。

遺構の軸方向には、ある程度まとまりがみられ、磁北と一致している遺構がある。

椀型溝や羽口が出土しているが、それらを用いた遺構が確認されていないことから、鍛冶遺構などの鉄関連の遺構は削平されたか、調査区外にある可能性が高い。

出土した土師器や須恵器は、欠損品が多く、土師器は壊や壊の割合が高く、壺・鉢・壺などは低い。また、須恵器は五所川原産のものが主である。

本遺跡で検出した遺構の時期は、出土遺物や重複関係からおよそ9世紀中葉から10世紀前半と考えられる。

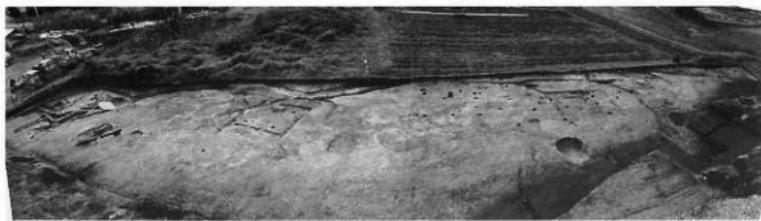
調査区城は西側に広がるため今後の発掘調査によって新たな事例が検出される可能性が考えられる。

(中嶋・竹内)

## 《引用・参考文献》

- 青森県教育委員会 1983 「朝日山遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第87集
- 青森県教育委員会 1992 「朝日山遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第152集
- 青森県教育委員会 1993 「朝日山遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
- 青森県教育委員会 1993 「内真部(4)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第158集
- 青森県教育委員会 1993 「山元(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
- 青森県教育委員会 1995 「朝日山(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第167集
- 青森県教育委員会 1997 「朝日山(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第215集
- 青森県教育委員会 1998 「新町野・野木遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第238集
- 青森県教育委員会 1999 「野木遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第264集
- 青森県教育委員会 2000 「野木遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第281集
- 井上 雅孝 1996 「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相(素描)」  
・中世土器の基礎研究 XI 日本中世土器研究会編
- 宇部 則保 1989 「青森県における7・8世紀土師器」北海道考古学 第25輯
- 窪跡研究会編 1997 「古代の土師器生産と焼成構造」真陽社
- 北林 八洲晴 1983 古代(奈良、平安時代)青森県の考古学 青森大学出版局
- 五所川原市教育委員会 1998 「大走須恵器窯跡」五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 桜田 隆 1987 「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相(I)」秋田県埋蔵文化財セ  
ンター 研究紀要 第2号
- 三浦 圭介 1990 「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」  
シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」資料
- 三浦 圭介 1994 「古代東北地方北部の生業にみる地域差」日本考古学協会編「北日  
本の考古学」吉川弘文館
- 三浦 圭介 1995 「古代」新編弘前市史 資料編1(考古編)

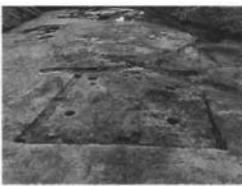
写真図版



調査区（N→）



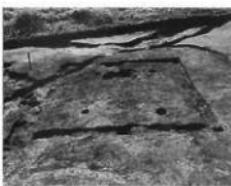
遺跡全景（E→）



2住完掘（W→）



2住遺物出土状況（SW→）



2住完掘（N→）



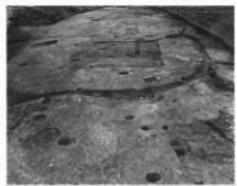
3住完掘（N→）



3住遺物出土状況（N→）



4住完掘（W→）



4住・11溝完掘（W→）



4住粘床跡状況（E→）



11溝遺物出土状況（W→）



11溝土層断面（W→）



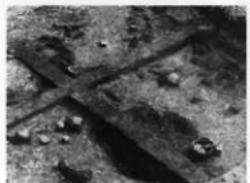
11溝・9土土層断面（E→）

写真 1

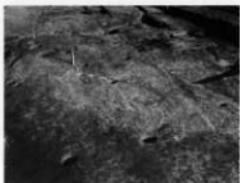
平成10年度調査(1)



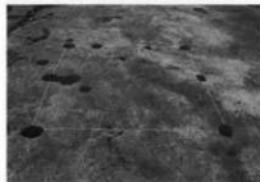
5 住家掘 (W→)



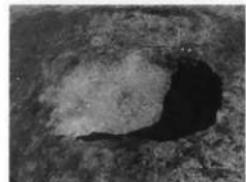
5 住遺物出土状況 (S→)



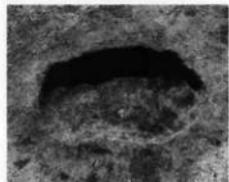
5 住家掘 (W→)



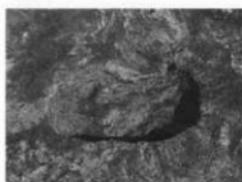
1 挿立家掘 (W→)



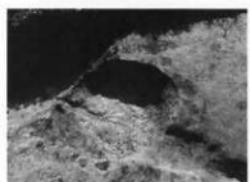
1 土家掘 (W→)



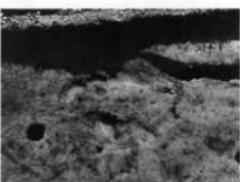
2 土家掘 (W→)



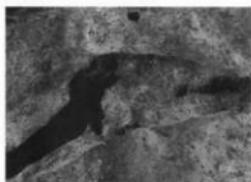
3 土家掘 (S→)



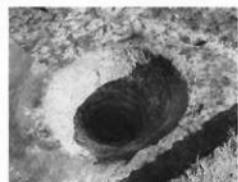
7 土家掘 (N→)



11 土家掘 (W→)



12 土家掘 (E→)



10 土 (井戸跡) 家掘 (N→)



10 土 (井戸跡) 土層断面 (E→)



調査風景 (W→)



遺跡全景 (E→)



遺跡全景 (W→)

## 写真 2

## 平成10年度調査(2)

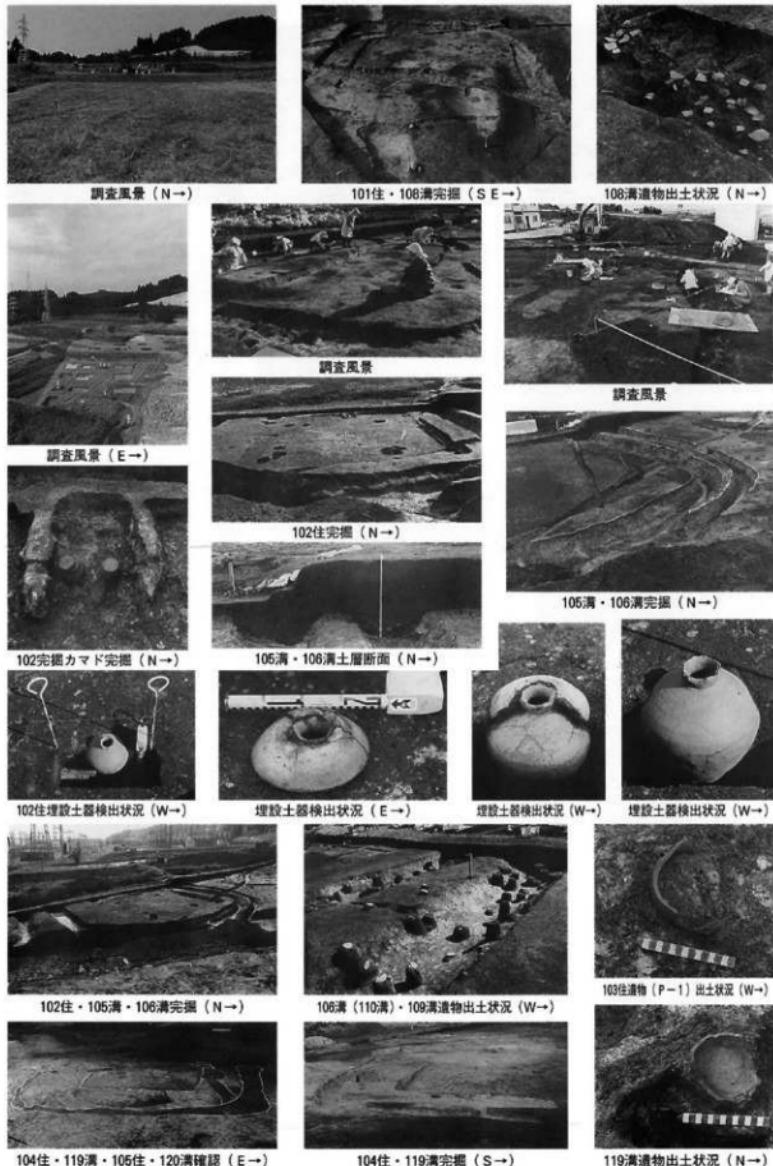


写真 3

平成11年度調査(1)

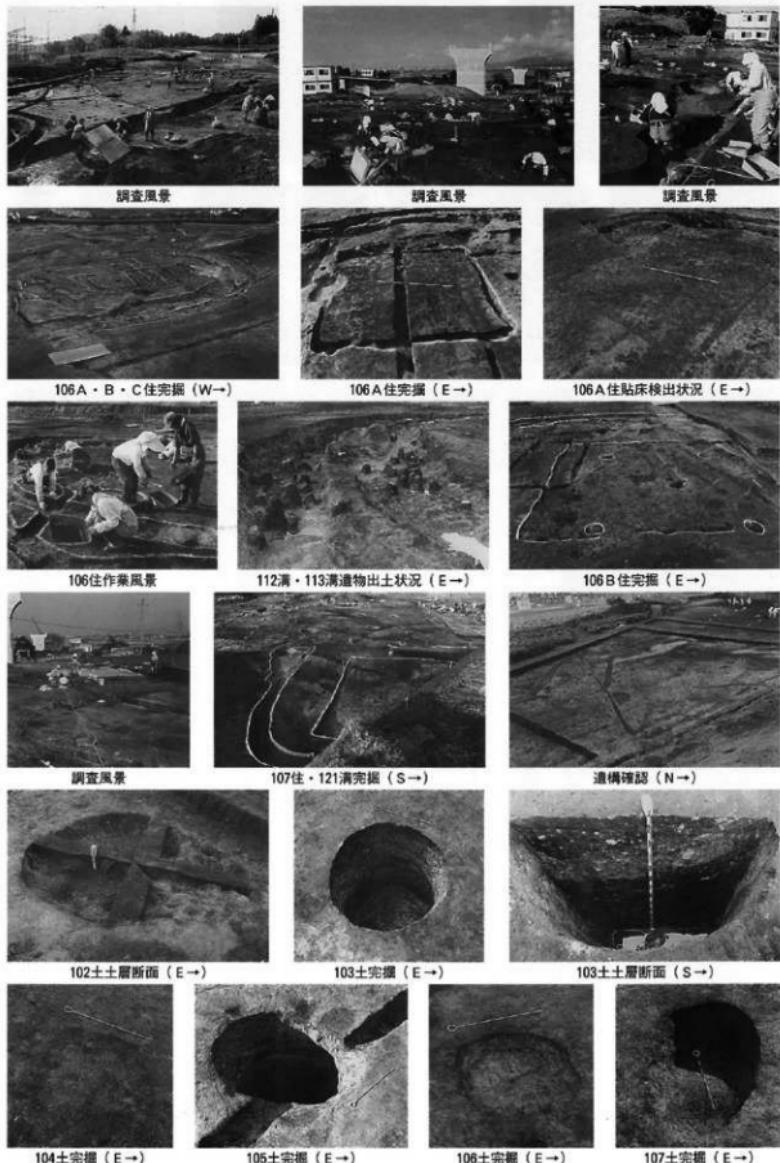


写真 4

平成11年度調査(2)

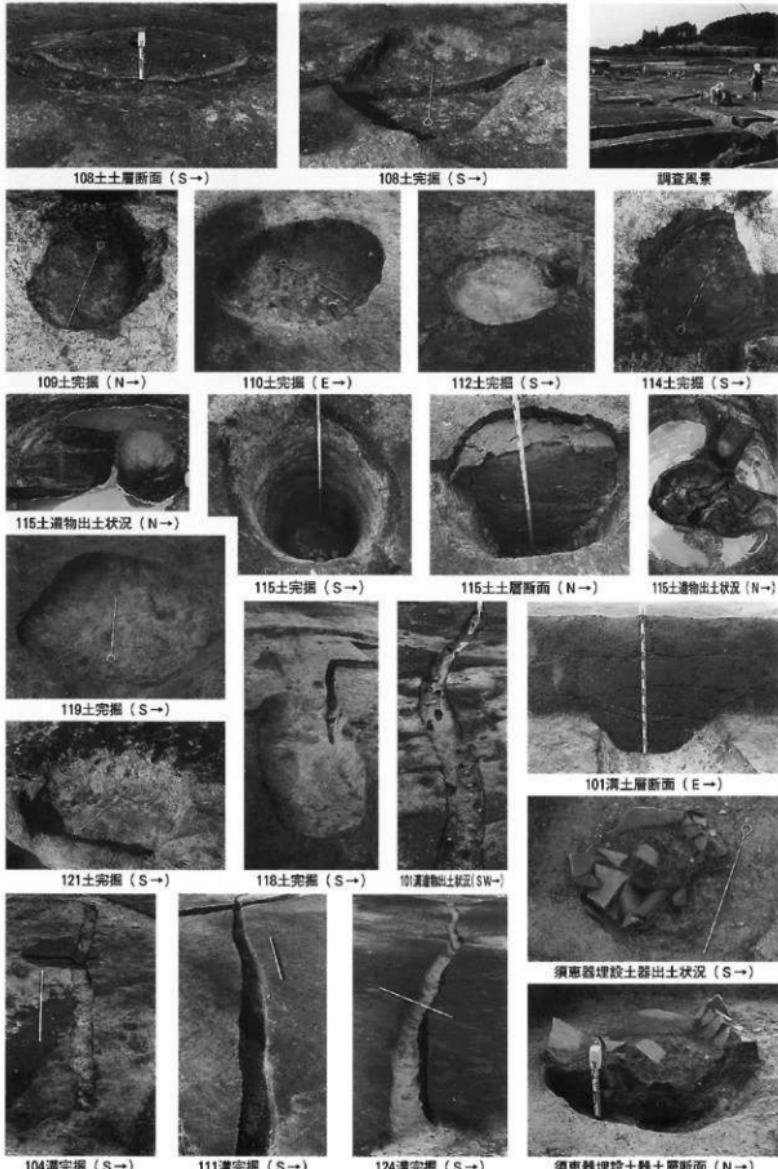


写真 5

平成11年度調査(3)

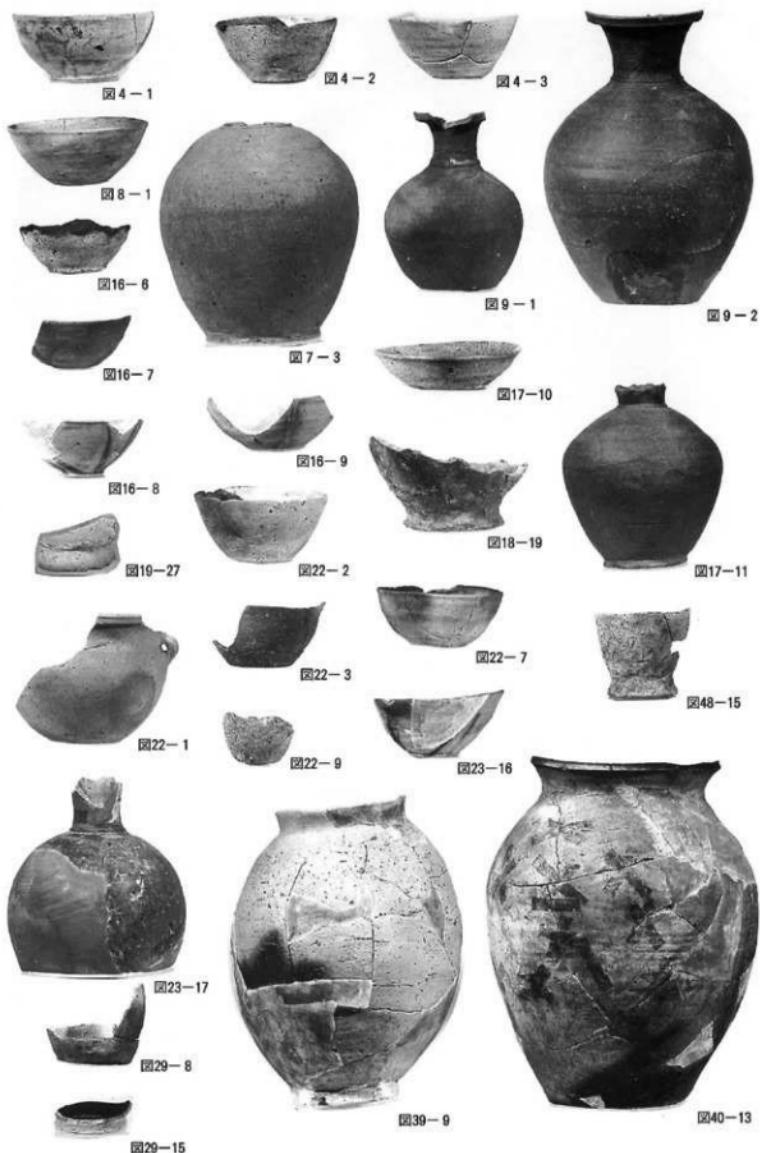


写真 6

出土 遺物 (1)

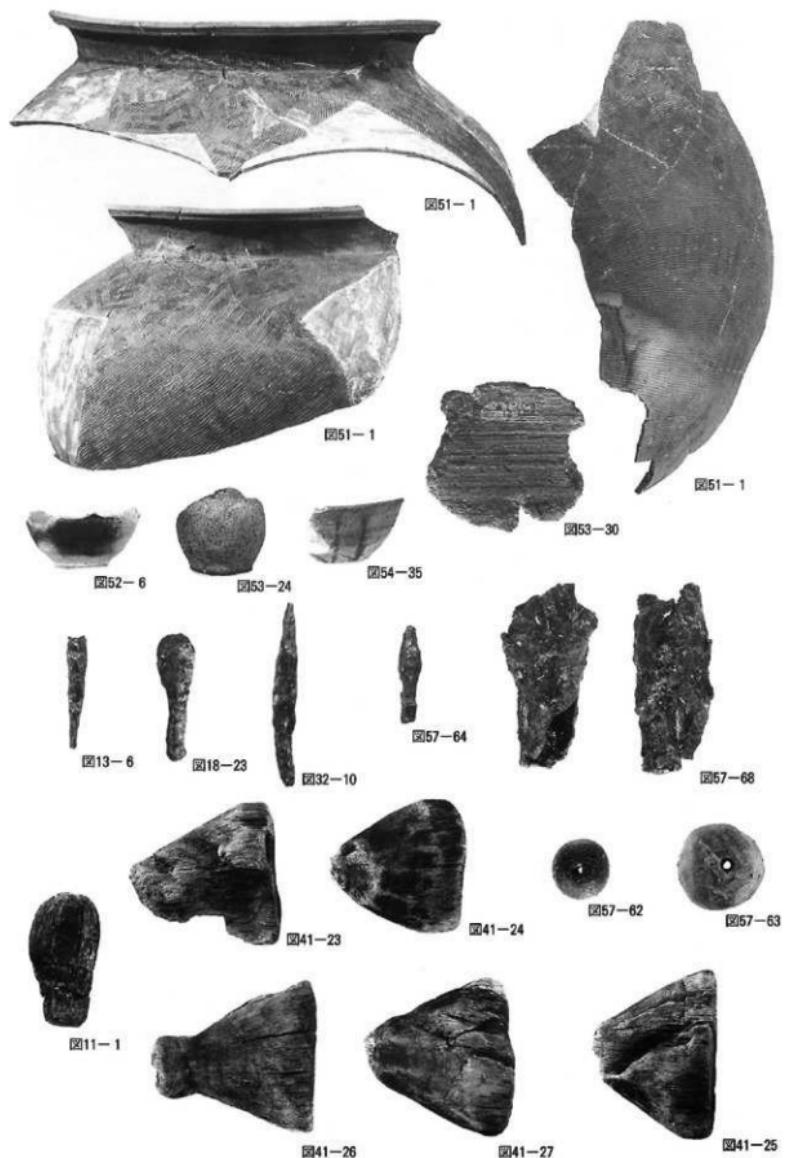


写真7

出土遺物(2)

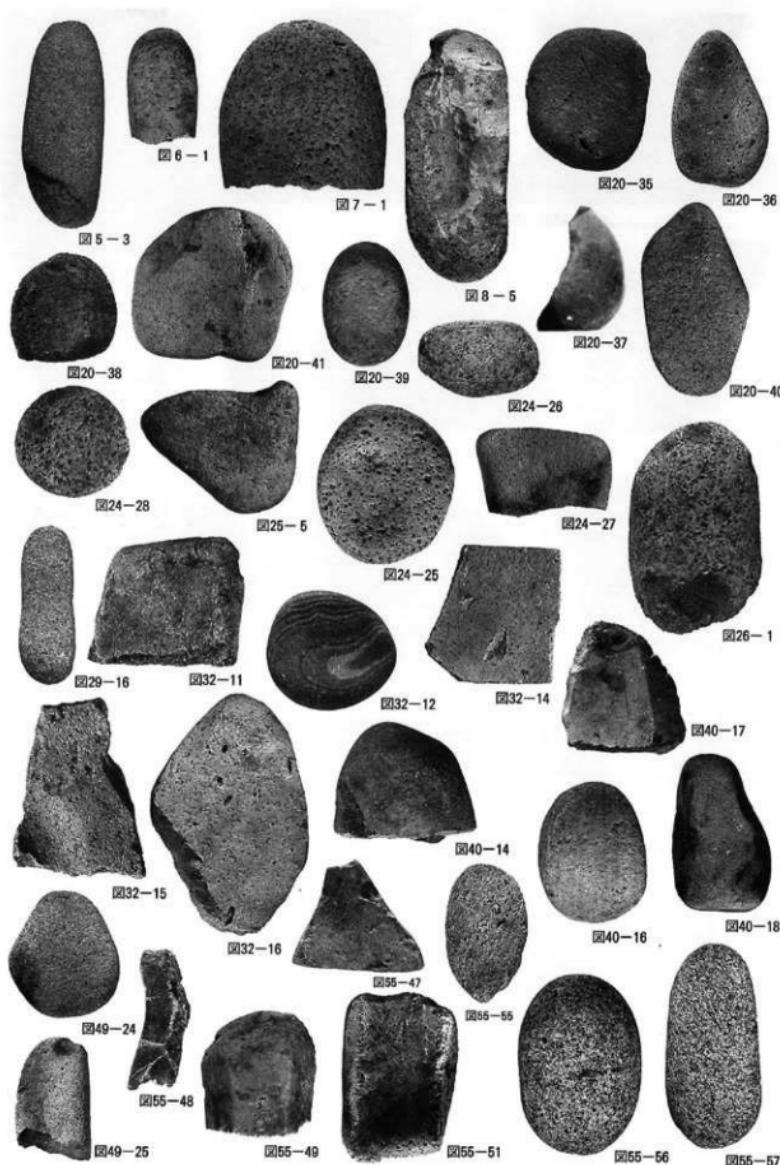


写真 8

出土遺物(3)

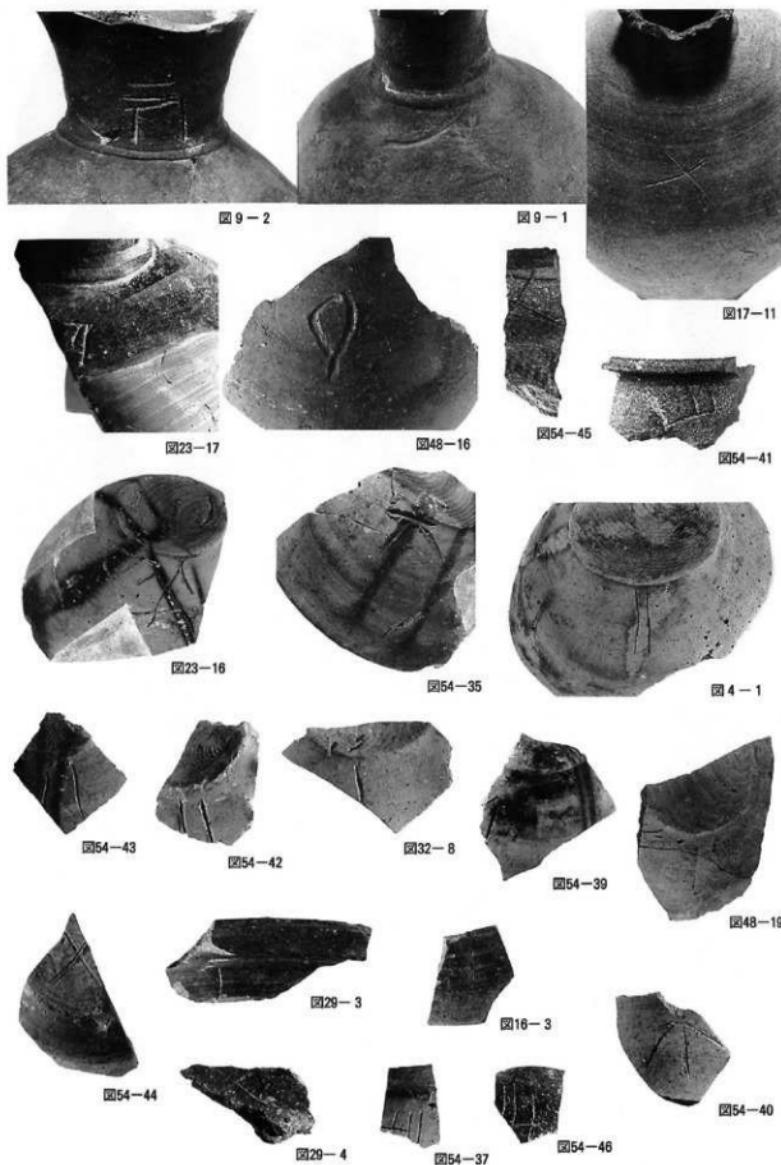


写真9

ヘラ記号土器

## 報告書抄録

ふりがな	あさひやま(2)いせき
書名	朝日山（2）遺跡
副書名	県道青森浪岡線道路改善事業に伴う遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第298集
編著者名	中嶋友文、竹内誠司、畠山昇
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701
発行年月日	2001年3月16日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
朝日山(2)	青森市人字高田字朝日	02201	197	40°	140°	19980916	1,500	県道青森浪岡
	山408、外			46'	42'	19981030		線道路改良事
				34"	53"	19990803	3,000	業に伴う発掘
						~		調査
						19991029		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日山(2)	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 13軒 土坑(含井戸跡)32基 溝跡 36条 掘立柱建物跡 2棟 須恵器埋設遺構 1基	土師器 須恵器 石器 土製品 鉄製品	

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第298集

**朝日山(2)遺跡**

県道青森浪岡線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告

発行年月日 平成13年3月16日

発 行 青森県教育委員会

〒030-0801

青森市新町2丁目3番1号

電話 017-722-1111（代表）

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042

青森市新城字天田内152-15

電話 017-788-5701 FAX.017-788-5702

印 刷 所 不二印刷工業株式会社

〒030-0902

青森市合浦1丁目10番16号

電話 017-741-5439 FAX.017-741-2541

---





活彩あおもり  
—輝くあおもり新時代—